川柳雑誌

四百号特集

昭和廿二年七月
昭和廿五年九月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年九月
（毎月一回一日発行）
創刊大正十三年・通巻四百号

No. 400

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌九月号目次

題字……麻生路郎・表紙……田村孝之介

不朽洞句帖……麻生路郎……(3)

光輝ある四百号を迎えて……路郎・霞乃・緑雨・生々庵・栄・白柳・与芳……(4)

輝やく巨歩……堀口塊人……(18)

俳諧と川柳の交流……堀口塊人……(20)

川柳の形態学……北川春巣……(16)

川柳名句と難句……麻生路郎……(8)

・特別寄稿・誌寿四百号を祝う……川上三太郎・岸本水府・中島柴郎・椙元紋太・布部幸男・石渡吉竜乃・伊志田孝三郎・大島詩明・石井服民郎・東野大八・北村白眼子……(22)

前田雀郎自選川柳三十五句……R・H・ブライス訳……(19)

レーニンに会った男……東野大八……(28)

自選句集……不朽洞会員有志……(54)

「句評リレー」……香林・鳥雀・すゝむ・亜純……(36)

★川柳談架……(7)

★現代柳人録……(30)

川雑支部のページ……(35)

★

川柳塔……麻生路郎選……(10)

同舟近詠……諸家……(15)

近作柳樽……麻生路郎選……(30)

金泥集……北川春巣選……(35)

入門講座……麻生霞乃選……(42)

各地柳壇……清水白柳……(73)

一路集「思いやり」……若本多久志選

「空き箱」……冨岡淡舟選……(48)

「道草」……野村味平選……(76)

ペンの散歩……

川柳雑誌社主催

四百号祝賀川柳大会

(記念事業の一)

日時　九月十一日(日)正午開催

会場　大成閣(電話㉗五二三八～九)
南区大宝寺町五丁目二六
(心斎橋大丸北の辻五〇米北側)

献花　司会　西尾栞

開会の辞　松江梅里

挨拶　(川柳雑誌社主幹・不朽洞会理事長)　中島生々庵

祝辞　大阪府知事・大阪市長(代理)　前田勇先生

講演　「毎日の言葉」　前田勇先生

花束と記念品贈呈　麻生路郎主幹(不朽洞会から)

謝辞　(川柳雑誌社主幹)　麻生路郎

表彰　四百号を回顧して　橋本緑雨氏(川柳輝誌代から)
麻生霞乃女史(不朽洞会から)

休憩

兼題
「発展」2句　岸本水府選
「思い出」2句　椙元紋太選
「飲み仲間」2句　堀口塊人選
「巨人」2句　布部幸男選
「よろこび」2句　中島生々庵選

★出句〆切9月5日本社着便(川柳雑誌社主幹)

席題　三題当日発表(各2句宛)

呈賞　各題・天地人

会費　百五十円

閉会の辞　若本多久志

懇親宴　五時閉会後、同会場で会費三百五十円

★出席されぬ方の投句は、郵券五十円封入のこと。なお郵便物運配統制の折、投句はいま直ぐに。

10月本社句会

"兼題"
わが家
非常口
古本
貯金

不朽洞句帖

麻生路郎

南紀勝浦にて

露天風呂少しは色気ほしいなり

二等車におっぽり出したウインキー

鑑賞用男性とやら裸なり

鳥を籠に入れるのは罪悪だろか

ママの子等　いつか偵察の辮がつき

坊っちゃんの引揚げ汽笛ながくひき

散歩

これは私の散歩すがたです。私の家から二丁ばかり北に、万代公園があるので、ときどき散歩します。大阪人は東京人ほど散歩をしません。散歩をするような場所のすくないことと、常にアタマの中が仕事に占領されてるからでしょう。万代公園は大阪としては珍らしく静かな公園ですが、あまり知られていません。池の向うに見えるのは女子大です。

さらに五百号から六百号へ意欲をもやす路郎主幹の烈々の意気はそのまま、わが「川柳雑誌」のいのちである。「川柳雑誌」は柳界の太陽でもある。

麻生路郎主幹と麻生葭乃女史　橋本緑雨氏　林宏子氏・西尾栞氏

百号を迎えて

路郎イズム—

「川柳雑誌」誕生

生々庵—皆さんお忙しいところご出席くださいましてありがとうございます。私が司会を仰せつかりまして——。

きょう七月十日は、奇しくも路郎先生のご誕生にあたりまして、ここでこの日、四百号記念の座談会を開くことは二重のよろこびと存じます。大正十三年二月十五日が創刊の年で、生々庵流に言わせてもらうなら、ちょうど神武の御即位の年と同じように考えています。そこでわれわれが知りたいのはその以前の神代時代のことなんですが。

路郎—えらいことになりましたね（笑）明治時代の心ある川柳人は、昔の川柳から新しい川柳への転換をねがっていたのだが、久良伎、剣花坊といった人たちによって明治35年ごろ、まず新川柳の狼火（のろし）が挙げられたのです。私が川柳に手を染めたのは明治37年の春ごろだったと思う。われわれも宝暦、明和時代の名句をしのぐ川柳を作りたいことと、狂句的川柳打破に立ち上がりましたが、とにかく当時は群雄割拠（かっきょ）の時代でいろいろな結社が生まれ、兄弟牆に鬩ぐ（けいていかきにせめぐ）といったありさまで、これではいけないと私は思い、ここに「川柳雑誌社」を起こす原因があったのです。

雑誌を出す以上、社会へ進出して行けるもの、つまり俳誌でいう「ホトトギス」のようなものです。内容の革新も大切だが、なによりも川柳の社会化ですね。「後の葉やなぎ」や「雪」等を出したが、みな二、三年間でつぶれてしまった。そこでこんどこそ、一生やれる雑誌を出し、これには川柳の社会化、初心者指導、古句研究の三つを旗印にかかげ、従来の柳誌は売ることよりも寄贈にあけくれていたが、私は敢然と売れる雑誌にした。その代り読んで値打ちのあるものにしたのです。川上三太郎氏などにも進呈せずに金をもらったものです。経営の合理化を考えぬ雑誌に発展なしと喝破（かっぱ）したのです。

語る人々

麻生路郎
麻生葭乃
中島生々庵
橋本緑雨
清水白柳
西尾栞
戸田古方

大体、柳誌というものは、土地の名をつけたり土地の何かいわれのあるものを誌名にしていたものですが、私はズバリ「川柳雑誌」とつけた。なになにの柳誌というより一見して柳誌とわかるように「川柳雑誌」としたことを、久良伎が、自分とこだけを「川柳雑誌」とは僭越（せんえつ）だと怒ってきた。その抗議文は不朽洞の壁に今でもかかっています。

生々庵—先生のご苦労の一端がうかがえ、葭乃先生と共に苦労をされた緑雨さん。いかがですか、二柳子さん時代の何かご感想といったものをご披露ねがえませんか。

緑雨—えー私たち、そのころ「みおつくし」というガリ版の薄っぺらなものを出して、市電交通局で川柳を作っていましたが、路郎先生や、木府、五葉といった大家が句会へお越し願うようになってから、会員もウンと増加して、いつまでもこんな謄写誌ではいけないから、一つ立派な雑誌を出そうではないかということになり、では、指導者にどなたを頼もうかと、相談の結果、日日柳壇の選者である路郎先生が当時鳴尾におられたので、お願いに行ったわけです。

清水白柳氏　中島生々庵氏　不二田一三夫氏　戸田古方氏

光輝ある四

—誌面をつらぬく

路郎—しかし緑雨君とそのグループの人たちの一部には、路郎では困る、あの新傾向派の川柳はむずかしいから……（笑）

そこで私は言った、諸君は諸君の句を作ればいい、私は私の句を作るのだ、と。

私が指導する以上は、同人制ではイヤだ。諸君らが一票の権利があるなら私は二票の力をもらう。なにかがあった時、私は二票の力を行使してそれを決裁する。沢正の新国劇のように、路郎とその一党でよかったら諸君らの大将になろう。（笑）

栞—おいくつでした？

路郎—三十七才だったとおもう。久良伎なんか、鳴尾、麻生路郎とより書かないが、それで結構その頃の郵便物は遅配もなしに届いたものだ。というのは鳴尾には飛行場と競馬と野球（現在高校野球の甲子園以前）が全国的にも有名だった。

栞—先生はおいくつごろから川柳に手を染められました？

路郎—十七才でした。

白柳—鳴尾の話が出ましたが、あの頃、鳴尾の先生宅を訪うつもりで、門まで行って時計を見るとちょうど昼飯どきでした。これはイカン、ご飯でも出していただくと初対面そうそうから厚かましすぎると、そのままようお目にもかからず、スゴスゴ引き下がりました。（笑）

古方—えらい気のアカン時代もあったのですね。

白柳—純情でしたなア。川雑の創刊号の近作柳樽に一句組で出ています。それには白柳となっていますが、子を脱字されていました。北国新聞の広告で「川柳雑誌」を知り創刊号から八月号までは小松から、それ以後は大阪から投句していました。

生々庵—その頃の同人は二十四人だそうですが、これらの人々で生存者は何人ぐらいおいでですか。

路郎—いま山口県にいる吉川亜人君とここにいる緑雨君ぐらいなものでしょう。

生々庵—創刊号から拝見していって、葭乃先生のお名前がどこへ出てくるかと、実は興味をもってページを繰っていましたが、やっと一巻第六号から見えはじめましたので家庭人としてのご多忙がわかったような気がいたしました。

葭乃—鳴尾時代に月一回、柳談会という集りがありました。これには雑吟一句持ち寄るのです。これを路郎が批評するわけですが、柳談会といっても別にむずかしいことはせず、ホントに楽しみながら勉強していくといったものでした。

出席者の一人を講師にえらんでそのえらばれた講師は何かの本職をもっている人で、たとえば生々庵さんなら小児科、白柳さんなら神社大工、といったように、その本職の話をしてもらうのです。すると誰も知らない専門のことが知らず知らずのうちに覚え、けっきょく新しい知識が得られ、そこから川柳も生まれるわけです。

怪談ばなしのうまい人なんか、実にゾーッとするような口調でやるものですから、ゆかたがけの暑いころでも寒くなるほどでした。高橋かほるさんなんかよく踊ったものです。自家製の幕の内が好評でした。

路郎—葭乃は結婚以前から川柳を作っていたのですが、私の川柳には反対でした。つまり革新の句がわからなかったのです。ところがやはりいつのまにか私の句風に共鳴してきたわけです。

葭乃の句集「福寿草」にある写真は、製版する時にパックを消したが、そのうしろに野口雨情が立っていたのです。雨情が鳴尾を訪ねてくれたときの写真がアレです。

緑雨—雑誌の校正も鳴尾でやっていましたし、鳴尾は川雑の産声をあげたゆかりの地です。

武玉川研究十二年間連載

古方—昭和五年八月号から婦人ばかりの〝光輝会〟というのがありますが、これが現在の川雑婦人友の会の前身だそうですね。

葭乃—そうです。そのころ月一

回、女性が集って、それを誌上に発表していたのです。潮花さんが桜島でそのころから女ばかりの会を育成されていたわけです。

白柳—石田沐天氏が、女名前でこっそり出したのを葭乃先生に見つかって、お目玉をいただいたことがあった。（笑）

栞—昭和六年に阪大川柳会が笠原路生、長崎柳秀といった柳人医博によって生まれ、天神祭りの日が発会式でした。

路郎—柳秀氏の指導で北川春巣氏も作句していたが、学生は入会できないことになっていた。だから卒業まで入会はお預けだった。

ところでこの長崎柳秀医博（阪大教授で薬理学を担当）が、川柳をやろうとした時、では誰に師事したらよいかということになってそこで長谷川一徹医博が私を試験しにやって来たのです。（笑）まあ師事するに足る人物とその試験にぼくがパスしたわけですな。（笑）

古方—昭和七年の百号記念を朝日会館で開催したことは今なお短詩型文学界の話題にのこっていますが、とにかく先生の太っ腹には俳人月斗氏も驚かれたのもムリありません。

路郎—そのことは〝古稀特集号〟にも書いたが、とにかくムチャクチャにやったものです。禁酒一カ月してまで仕事に打ち込んだ。新劇運動をしていた古川俊隆に脚本を書かせ川柳座をつくり芝居をやったり、帝劇の山根千代子の娘、寿子（当時十二、三才。後の東宝スター）に新舞踊を踊らせ余興としてもデラックスなものでした。

会費一円にはウチの者までびっくりしたようだった。今なら四百円相当の会費だから、川柳の句会とすればたしかに高い。

白柳—その頃の句会の会費が三十銭でしたが、当時の浜口内閣は緊縮内閣といわれていただけに、先生は断乎値下を敢行され、二十銭にされたのです。すると十銭のこるので句会の帰りにうどんが食えました。うれしかったなア。（笑）

路郎—とにかく朝日会館進出は大成功だった。その祝賀会を松虫花壇で開いたときは、日頃のムリがたたってドッと床についてしまったが、鳥山一歩氏らが私を戸板に乗せて会場まで連れて行こうと云った。ちょうど映画や芝居で観るやくざの親分が戸板にかつがれて行く、あの姿が想像された。（笑）

生々庵—ご健康ではあるが、ちょいちょい生死の境を彷徨（ほうこう）されたわけですね。チブスをやられたそうですが、それがよかったと思います。

路郎—枕元へ原稿用紙をおいて書き、寝ながら校正の朱も入れた。週刊朝日の原稿を書いたときなど、口述を葭乃が書いてくれたものです。悪性だったが、今も昔も、私は医師の命令はよく守ったものです。

桃谷順天館でサラリーを二百円からもらい、小説まで書いていたのであまり不自由はしなかったが長男ロンドンの死などで苦闘の連続でした。

葭乃—いくら原稿料が入ってきても、みんな飲んでしまうので楽ではなかったです。（笑）

緑雨—よくスキ焼きをよばれましたな。（笑）

路郎—昭和七年には雑誌へ「武玉川研究」を六月号から、昭和十八年十二月号までの十二年間にわたって連載したもので、梅本秋の屋、森東魚、姪子省二の諸氏が担当した。

栞—偉大なる足跡ですね。十二年間連載とはずいぶん思い切った企画だ。

柳界にただ一誌の有保証の新聞紙法適用

古方—昭和八年十月五日の本社十周年記念東京句会は〝古稀特集号〟にも書いておられますが、なかなか大変だったのですね。

路郎—路郎一人に東京の各柳社が通せんぼをしたのだからね、しかし結果は大成功だった。久良伎も剣花坊も会場へ来てその盛況に驚いていた。

緑雨—先生が満鮮地方へ川柳行脚をされたのは昭和九年三月でした。

路郎—川柳社会化運動のためには文字通り足を棒にしてとび回わった。

昭和十年に川柳雑誌社は東京に支社をもつことになった。その初代支社長には福田山雨楼氏が就任した。

翌十一年はいろいろの意味で思い出も多いが、川柳職業人を宣言したのもこの年だった。このことは〝古稀特集号〟にも書いたが、この年の七月十一日、外出の帰りみちで葭乃が津守の駅でたおれたことがある。駅員に頼んで鶴見橋通りの薬局で生葡萄酒を買って来てもらい、その間、駅から電話で玉出駅前の向いに沢田（四郎作医博）という医院があるからすぐ自動車で走って来てくれと頼んだ。幾度か新聞記者時代があったのでこんな時にも駅員を使ってテキパキやるカンがよくはたらいたのでしょう。自宅に帰ってから阪大の長崎柳秀医博、布施筑川医博、井上沔三医博のお世話になったが、一年間はブラブラしていた。この年に一回だけ休刊し次号に合併号を出したことがある。

有保証の新聞紙法の適用のもとに、掲載内容の拡大化をはかった。これは柳誌では「川柳雑誌」だけだった。着々川柳の社会化進出が実って行ったのです。

古方—昭和十二年二月七日に不朽洞会員が初会合しましたが、松坂倶楽部で「川柳路郎講座」が開講されたのもそのころでしたね。

路郎—俳句は青木月斗氏が担当して、川柳は私が受けもった。

生々庵—なごやかだったが厳しい会でした。一句出来ると、しずしず先生の前へ持って行ってご批評をいただくのですが、

「君は何年やっている」なんて

肝疾患・疲労・二日酔
★総合強肝剤
ウロコ印
武田薬品
リポコール
（12種の成分を配合）
20錠・50錠・100錠

言われながら句へ朱を入れてくださるのです。一人一人に硯があるのですが、あれで文字の勉強にもなりました。赤毛氈（もうせん）も敷いてあってなかなか風流な会場でした。

白柳—こうした会は明治以来はじめてでしょう。

生々庵—先生の講義がよかった。

路郎—古句などから例句をあげ音響語なども説明をした。

古方—何年間つづいたのですか。

路郎—戦争までつづきとうとう解散した。

生々庵—ああいう会を復活していただきたいと時々おもいますね。

芸術は国境を越えて飛ぶ

路郎—昭和十三年は十五周年記念で「川柳雑誌」の型を菊倍判にした。この年には記念出版として「新川柳評釈」を発行し、九月十八日正午神戸第一突堤から黒竜丸に乗船、長駆北支蒙疆の旅に出て十月二十一日に日本へ帰った。

昭和十五年新春号からの表紙にエスペラント語を入れました。

Pensoj flugas trans la land-limon

これは「**芸術は国境を越えて飛ぶ**」という意味のものです。

栞—昭和十七年十二月の本社句会は〝大東亜戦一周年記念川柳大会〟として、御津八幡宮で開催、その翌年の創立二十周年記念南方動物川柳会を天王寺動物園で四月にもち、翌十八年六月に「食べられる雑草の吟行」を南海高野線郊外で催したころには戦局も香ばしくなくなっていました。

古方—雑誌奉還はいつでしたか。

路郎—私の肚は昭和十九年の十二月号ときまっていたので募集課題も十二月号でキチッとおさまるよう編集にも苦心しました。

紙やインキの欠乏からとはいえ、雑誌奉還を発表したときはみんな暗然とした。

それまでには柳誌にも合併という統制時代があったが、わが「川柳雑誌」はその憂き目を見なかった。しかし物資の欠乏には勝てずついに奉還することになったのです。

それまでには川柳塔の句が検閲にひっかかったり特高へよばれたりしたが、最後まで始末書を書けといわれても書かずに頑張りとおした。

古方—私の句もひっかかりました。〝**一寸だけ喋べるに役人供をつれ**〟たったこれだけの句ですのになア。あの時は先生にえらいご迷惑をかけたものです。

路郎—検閲にひっかかった川柳塔の一ページを破いて発送したりして苦心をした。戦地へ送ったものまで返送させよと言うのだから手のつけようがなかった。

短詩型の雑誌で有保証は「川柳雑誌」以外にないのだから自由に書けるのだが、進駐軍が来るまではやはり言論の自由はなかったわけです。

いのちある句をれ

路郎—昭和二十一年八月号から「川柳雑誌」が再刊した。この裏にはアメリカ軍進駐の検閲官の中に前山北海、古川魔花麗という門下がいて、両氏の尽力で「川柳雑誌」のためにはまったくの幸運で刊行がうまくいった。

その後のことは、もう皆さんもご承知のことばかりだから、今更なにも言うことはないが、さきに「古稀特集」を出し、こんどは「四百号特集」を送ることになった。友人や門下の人々がこの四百号へ寄せられたご熱意に対し心からよろこんでおります。

編集部—わが「川柳雑誌」と一心同体である先生が、短詩型文学の文化交流を叫ばれ、関西短詩文学連盟を結成して、川柳をより一歩進められたことは、われわれ川柳人の大きなよろこびであり輝かしい未来を約束するものとかたく信じております。「川柳雑誌」が伸びることは川柳を伸ばすことに直結していることを思えば、われわれが吐く一句、一句に責任と光栄を感じないではおられません。

先生のご健康を祝ってこのあたりでテープ・レコーダーを止めたいとおもいます。有益なお話をいただきありがとうございました。

（カメラ・橘高薫風子）
（ペン・不二田一三夫）

續 川柳書架 (1)

「川柳書架」は『川柳雑誌』の第一巻第四号（大正十三年四月十五日発行）から掲載しはじめた柳書の平面的な解説で、川柳人にとって有益な参考資料として好評だったもの。今回「続・川柳書架」の名の下に、続稿を掲げることにした。

麻生路郎句集

旅人

（麻生路郎著）

★左に著者の序文を抜くと、

エスペラントのために一生を捧げたザメンホフ博士は偉らかった。ロシヤ文学の英訳に一生を捧げたマガシット夫人は偉らかった。くそ虫の研究に一生を捧げたアンリー・ファブルは偉らかった。何れも自分の夢を実現させた人達である。

そして川柳に一生を捧げた私は？私は云うべき言葉を知らない。

私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう。

一九五三年十一月三日　麻生路郎識

★目次を覗いて見ると

旅人—人生の雑音。大空—李伯の末裔。恋ごころ。愛欲。不死鳥—水の垢。前書のある句。旅つれづれ。

★初版は昭和廿八年十一月三十日発行。菊版半截七二二頁、定価八百円。発行所　大阪市住吉区万代西五の二五、川柳雑誌社。

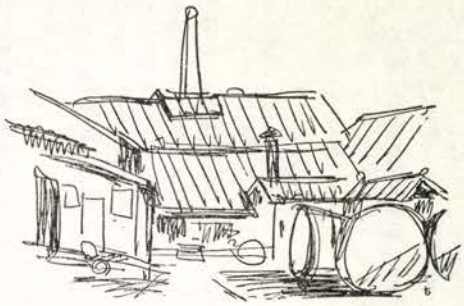
★著者川柳生活五十年の作品の結晶である。

大阪—名古屋 2時間27分
ノンストップ

近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき特急運転
座席指定 特急券
お求めは ご乗車の5日前から
近畿日本鉄道



川柳 名句と難句

麻生路郎

事のついでに、池田内閣のことを少しく述べておこう。内閣の発足は昭和三十五年七月十九日で、総理は池田勇人（いけだはやと）、中山マサ（大阪二区）を日本最初の女大臣に据えて新味を見せた。池田勇人は貧乏人は麦を食えと言って反感を買った男だが総理となっては低姿勢である。この低姿勢もいつまで続くか予測はゆるされない。

〔七九〕

池田屋のいまはナイフでつけた傷

（梅志）

この句の池田屋は宿屋の屋号で、池田屋騒動の見学に行った学生が、柱へナイフの傷痕を残した悪戯を詠んだものである。

だから、この句の方は詠史川柳であって時事吟ではないが、「池田屋」が判らないと句意のハッキリしないこととなる。そこで解説が必要となる。

池田屋は京都の三条大橋の旅館で、一八六四年に討幕挙兵を協議中の長州藩志士を幕府の新撰組や会津・桑名の兵が襲撃したので、その時のチャンバラが柱などに遺した傷あとになって、ナイフで傷をつけたというのである。斯うした悪戯は若さの産物であることは言うまでもなかろう。

時事川柳には前にも述べたように、一時的には興味はあっても、時の経つにしたがって味が稀薄になるおそれがあるし、詠史川柳の方は寿命は長いようでも説明的に陥ちいり易いので、味のある句にはなりにくいものである。ここに二つの池田屋の句を挙げて、そうしたことを述べて見た。

〔八〇〕

救急車うちの子供はうちに居る

（鞍馬）

事故が起きると、救急車が警笛を鳴らして街から街を気違いのように疾走する。この警笛は子を持つ親の耳底へ驚くべき速度で達する。

「若しや、うちの子が、トラックの下敷

〔七七〕

うち貰うてえなと三十遠慮せず

（喜由）

敗戦は多くの若い男性を失った。それがために多数の女性はよき配偶者が得られず、ひそかに悩んでいた。そしていつのまにか三十になった。斯うした嫁き遅れの女性にとって自らプロポーズするのもムリのない話だ。「うち貰うてえなと」という悲痛な言葉も、自然にとれるではないか。

〔七八〕

代がわり池田屋ののれんなわのれん

（芳仙）

時事吟ではあるが一寸面白く感じたのでここへとりあげた。「代がわり」とは岸内閣が池田内閣になったことを意味する。「池田屋ののれんなわのれん」というのは同じ自由党ではあるが、今度の総理は低姿勢なので、なわのれんだと言ったのである。なかなか巧みな比喩である。しかし、時事吟だから、時間的にかっさいをはくしただけで、時日の経過で興味はウンとげんさいされてしもう。それだけでなく、「代がわり」も不明になるし、「池田屋」が、池田勇人氏の内閣の換称だと気づく人がなくなって、池田屋騒動のような、実在した池田屋を想起することになる。そして、その句意は不明ということになる。そんな場合、古川柳研究者から、だろう解をされ、つまらない句だと烙印を押されて愚となることが多い。しかし、時事吟の作者の意図はそんなところにはないのだから、そんな句の例証に、この句をここへとりあげたのである。

結婚式場
長生殿
神殿(2)控室(16)宴会場(和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか 貸衣裳一切を完備しております ●6階
金曜定休
松坂屋
大阪日本橋三

きに」という思いが、瞬間的に閃めいた。そして横を向いたら、うちの子はそこに余念もなく遊んでいたというのである。親としての至情あふるる句だ。

〔八一〕

お仕合わせでございますかと先妻が

（七面山）

フトどっかで、先妻に出会ったのであろう。女はパリッとした装いであったが、男はよれよれのタイを締め髭もモジャモジャさせていかにも見すぼらしい姿であった。こんな時、女の口をついて出た言葉は

「お仕合わせでございますか」

であったと言うのである。

次の言葉は

「わたしは、もう少しの未練もありませんのよ」であろう。

落ち目の男の姿がマザマザと浮ぶ句だ。

〔八二〕

でこの蚊を叩き落せるのも夫婦

（良　子）

「でこ」とはおでこのこと。パチンと不意に夫の額にとまっている蚊を叩いたのである。他人だったら幾ら親しい仲でも、そんな真似は出来ないであろう。

よき妻、よき夫を想像させられて、ほおえましい句だ。

〔八三〕

乳を吸う力強さに励まされ

（雄　々）

赤ン坊がゴクンゴクンと息もつかずに乳を吸うているさまを眺めた若い母親は世帯の苦労を何んとも思わなくなったと言うのであろう。

女性心理を巧みにつかんだ句だと思う。

〔八四〕

アブストラクトさかさのままで売れたらし

（柳　志）

画廊の一角に展観されたアブストラクト・アートが逆さまに吊るされていたが、それがいつのまにか姿を消していた。多分逆さのままで売れたらしいと言うのである。大たい、アブストラクト・アートと云うのはシュールレアリズムと並んで二十世紀の主要芸術思潮の一つであって、第一次大戦後に発生したものである。対象の再現を目的とせず、多かれ少なかれ幾何学的な様式をもった合理的な美の発見と表現を目標としたもので、絵画、彫刻、建築、商業美術等あらゆる分野に浸透している。そんな訳で、画なども一寸見たところでは、どっちが上やら下やら判らないものが多いのでこんな皮肉な句が生まれたのである。

〔八五〕

經營の合理化寺に電話ひく

（清　生）

戦後、寺の経営はむずかしくなった。ボヤボヤしていては坊さんも食えないと云う末世のありさまに、いろいろと経営の合理化が図られるようになった。お経はスクーターや自家用の自動車で配達されるようになるし、幼稚園の施設や洋裁や書道やダンスの教授までするようになった。そこで電話までひいたと云うのである。この句の面白さは寺のような仕事？に合理化と云うような堅い文字を使ったところにある。

〔八六〕

ハシタだけ飲む気がハシタだけ残り

（甲　吉）

どんな金だか判らないが、呑ん平にはよくある例だ。

こんな男は酒を飲むんでなくて、酒に飲まれるのである。そんな時の金こそ是非必要な金であることも云うまでもなかろう。

〔八七〕

草月流仲仕の力も藉りて出来

（静　馬）

草月流に限らず、近ごろの生花はだんだん横道にそれて行くようだ。インテリの奥さん連中が、何れも投げ入れをされていることを華道誌のアンケートで知ったが、私のうちでも投入れ派だ。その点からこの句は誇張句と云いたいが、事実仲仕の力を借りるような生花が流行っているんだから驚く。行き過ぎはどこの世界でも反省するに越したことはない。

〔八八〕

就職に女將の力偉大なり

（藤　波）

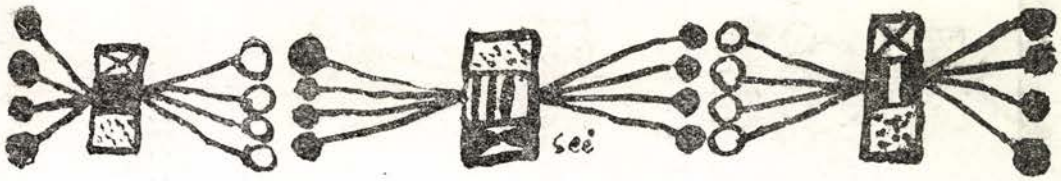
女将というだけあって、大店は大店なりに、小店は小店なりに、そうとうに威力を発揮するものである。赤坂の料亭の女将などは大物の政治家さえおさえてゆく力を持っている。

就職問題でも女将から頼まれると、

「寄こしたまえ。僕から云っておくよ」

と云う社長さんの多いことを思うと、「女将の力偉大なり」に違いない。

ビールは
アサヒ
ゴールド



川柳塔

豊中市　戸田古方

なんとかかんとか姙んでしもていた
ひとまわり顔が大きく姉女房
糸くずたばこのくず二月堂の経机
地下鉄新緑畑の中へほり出され

西宮市　若本多久志

ふんどしは嫌とも言わず洗濯機
俺も痴漢の素質があると思う宵
キッス盗まれたと訴えもせず

大阪市　正本水客

全集を枕に雨は樋伝う
新聞の社説のとおり訓辞する
悔のない一生とは人が言うてくれ

大阪市　丸尾潮花

児を連れて浴衣でしゃがむ金魚釣り
宿を出てついの浴衣と言う歩調

岡山市　武部香林

閑居して新種たばこの名も知らず
蛤の自由は貝を締めるだけ
その罪は消えず手紙を焼いたとて

大阪市　北川春巣

ビール痛飲胃の大きさをいぶかられ
夜食出る気配末っ子寝つかれず

全国鉄川柳会に出席

鳥羽湾の青さ一瞬みな黙り

ホノルル市　築山快夢起

古本の整理あれも惜しこれも惜し
失業が猫の欠伸をじっと見る
ハンサムの客だがいつもノーチップ

大阪市　須崎豆秋

入院の十日もすればじじむさく
一発で癒すと〇〇教が言い
長尻が来て病人は熱を出し
しんぼしんぼジャングルでさえ十余年
血を売りに来る細腕に目を外らし
鰻の皮キュッといっ杯もう駄目か
生か死か白装束で手術台

ホノルル市　羽佐間柳葉

長生きに聞けばビタミンなど知らぬ
二次会は尻に敷かれた顔でなし

堺市　吉田圭井堂

失業を明日は我が身か訪うてやる
種なしの西瓜頼りなくよばれ
街路樹の生活力に鞭うたれ
六十のぼんちで通る島の内
でこぼこのひどい道だで事故がなく
三等が消えたは切符だけのこと
始めからあぐらで聴いているお経

山口県　国弘半休

雨までが群がって来て抗議する
発展の港ネオンの灯にむせび

防府市　長野井蛙

養老院子のこときけば気をそこね
不利と見て相手に口を挾ませず
辞めて知る床の間淋しい盆と暮

岡山県　直原七面山

ポリの目に危なっかしい娘の一人旅
十代はくったくもなく自殺をし
政治には暗く小鳥の世話をやく
極道の点でお客と馬が合い

鳥取市　河村日満

売込みへ元首相まで口を出し

社長の帰日に

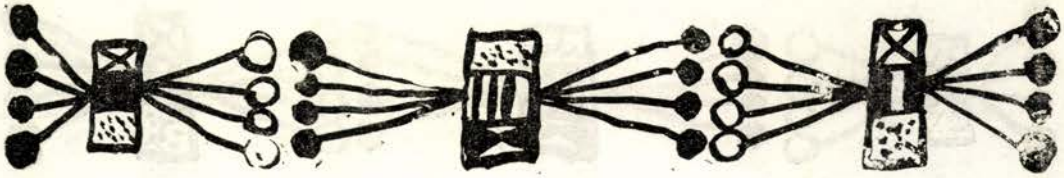
陽やけした顔がうれしい旅帰り

倉敷市　木村千容

はがゆさは長者の意図をよう汲まず
まだ生きているのぼかんと口あけて
三十五そのころ父は世に出とり

倉敷市　田垣方大

東大と大きな声で答えたり
妻も娘も信用しない免許証
ふるさとはいいなあ釣瓶で水が飲め



加賀市　野村味平

大島のあんこにしては手弱女の
宴席のしがない勤めを悪るびれず
居残りへ使丁はハタキでいやがらせ

大阪市　木村水堂

内閣が誰に変ろと王手飛車
総裁の椅子にもスポンサーがつき
父ちゃんの意見敗れた多数決

高槻市　福田丁路

殴る蹴る撃つ斬る喧嘩花ざかり
自動車が当るクイズがやさし過ぎ

大阪市　真鍋一瓢

月賦月賦ビールが喉に引っかかる
事件落着長男と届けられ
隣なんかにゃ負けない電気冷蔵庫

大阪市　後藤梅志

秋近しプラネタリウムでも見るか
袴羽織譲り手もなき古箪笥
歯揃びのよさが閣下の名残りなり
酔うていたとかでとうとう無罪なり
白タクの方が素速く来て止まり

米子市　小西雄々

姑死んで急に天井高く見え
先輩の髭がビールの泡に濡れ
お茶をくむだけの勤めにパリモード
犯人の鼻から書いたモンタージュ
ミステークどころか雷族即死

大阪市　山川阿茶

小唄より英語を習うべきだった
この人も仇花おつれありそうな
背の高い月見草やと並んで見
つれがもう死んでしもうた甲子園
甲子園行きを叱った父も死に
あこがれの士をみやげに甲子園

大阪市　金井文秋

金もてば買って来るぞと勇ましく
買物に女は叡智ひらめきぬ
凱旋の気で買物の包さげ
妻の座に悔がないのかよく肥り
わざとエロ効かす小説鼻につき
仲人は社長気の張る事ばかり

加賀市　那谷光郎

夜更しを禁じた医者と碁を囲み
床置きは父の明治をひっ込ませ
居合せた不快失せもの見つからず
適合期そろそろドライ振りが消え

岡山市　浜田久米雄

きうり四、五本千円札を出してくる
市民税うちではきうりもみをたべ
電化して月賦いつまでつづいて来

出雲市　尼緑之助

山中温泉にて

団体に山中節の間ののろさ

東北路にて

肉づきの面をペラペラバスガイド

永平寺にて（二句）

そりたての頭法城の美少年
永平寺ここもねむたい蟬しぐれ

大阪市　水谷竹荘

病欠にしといてやれとよい社長
うそ一つ言えぬ男で甲斐性なし

京都市　大鶴喜由

美の条件に目と鼻と唇が要り
面白半分もいるジグザグの
何処やらが母に似ていて気を引かれ
楽したい母にとっても重い孫

奈良県　飯降白香

きれぎれの想いリキュールをまだあおり
ファイトだけあおって涼しくすましてい

奈良県　西辻竹青

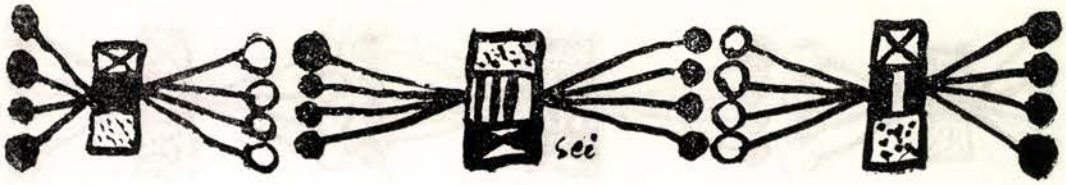
陳情帰り妓の事でけんかする

呉市　林野甦光

紅一点灰皿の位置少し変え
柔道をする娘男臭そうなり
しぶちんもけっこう恋人持っている

岡山県　福島鉄児

病んでてもりんきの方は衰えず
聞かなんだことにしておく嫁のこと



岡山市　服部十九平

女店主の浮気問屋をまた変える
ビニロンの簾が庫裡を夏にする

尼崎市　長谷川三司

孫のかずこの友達も年を取り
怒られて何が可笑しいもう笑い

兵庫県　若林草右

声のない声きく耳を持つ不幸
ですよですよで首相つっぱる気
これでもかこれでもかと女薄う着る

岡山県　田村藤波

保健婦として恥かしくない健康美
里親と知らであまえる児の哀れ

岡山県　岡田夜潮

くらげのようなまけていても蓄めて居り
履物を揃えるも心中のエチケット
駄々広い道へ領く城下町

大阪市　稲葉鳩花

裏切った亡父だが焼香してあげる
信じてるさかい化粧はせえへんの
持ち合せ無いとはなんとじょさいなし

児島市　本田恵二朗

祝いごと下戸ばっかりで静かすぎ

京都市　松川杜的

紅一つ付けずに男の味を知り申し
葱坊主一人留守居の農繁期

岡山市　津田麦太楼

田も畑も取られリンクの芝を刈り
ねじり鉢巻長屋の餓鬼のデモゴッコ

吹田市　橋本幸男

デモばかりやって大学卒業し

堺市　高崎雄声

能筆で一生人に使われて

島根県　藤井明朗

子等食事父の朝寝はほっとかれ
ひげまでも妻の手借りる新世帯

岡山県　永松東岸

山の雨蟹を踏みつけそに走り
右へ倣えと汚職は続くなり
むっつりと盃を取る不平組

倉敷市　野田素身郎

大雨警報なにをしているうちのパパ
風通しもよいが埃もようはいり
眠りたい欲さえ妻はみたされず

大阪市　伊達堰子

ゆきのしたほったらかしの花が咲き
寄附帳にすぐ伺うと道で会い
全学連雨には勝てず散ってゆき

大阪市　不二田一三夫

教養がオホホとだけより笑わない
太陽を引上げるよう　朝の網
声すでに音と化す幕あいの女たち

文化財的存在ヨロガワのミルと言う
知らぬまにぼくを祖父にし五十にし

兵庫県　酒井ひか平

しゃべらせば秋田実はどもり勝ち
未だやってまんねと老けた漫才師
買物よりも奥様ビール飲むつもり
地下街で夫婦出口が見付からず

宇部市　津秋六花

ステテコで迎える客の太い声
結納を済ませば月賦屋寄って来る

神戸市　丸川初甫

引退へ家買う話飲む話
引退へ化粧廻しの重さ知る

岡山県　池田古心

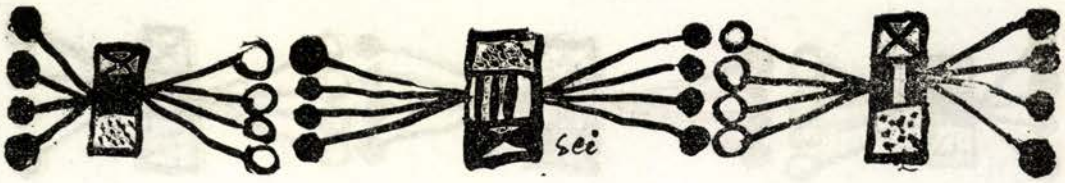
空箱を重ね景気に北叟笑み
肩の凝るそんな話は聞いていず

大阪府　早川清生

中華そば食べに八階までのぼり
マルクスを信じて処女にこだわらず
株やっと買っての社会党ぎらい
大阪工場などと河内の隅に建て
男ってみな同じねと後妻いう

岡山市　武部若菜

政権へ金の流れる音がする
夕空のネオンお伽の国おもう
坦々として大阪へ続く道



堺市　辻　圭水

つきあいのスト執行部だけ騒ぎ
兄弟の違いが親を疑わせ
しきたりへ末っ子なんの遠慮せず

大阪市　児島与呂志

風鈴の風が祭りの風らしく
師匠には済まぬ身振りの隠し芸
いつの間か事無かれ主義のままで老い

岡山県　野々口美舟

ためいきが姑にもあった倦怠期

西宮市　小浜牧人

四〇〇号を祝って

肥沃した土に根を張る花ざかり
アルバイト番地を聞いて聞いて来る
白昼の道頓堀を赤いシャツ

大阪市　菱田満秋

ごめんねと云えば女はそれでたり

兵庫県　前川左文字

病窓の風鈴おそるおそる鳴り
退屈を売り歩く男買う女
絵心を誘うダリアへ癒え始め

大阪市　橘高薫風子

白い花ばかり活けてた女死に
僕の齢啄木はもう死んでいた
熱の子へ眼鏡をかけたまま眠り

下関市　中村九呂平

風はらむヨットの前に立つ若さ
絵はがきにカジカが鳴くと書き加え

大阪市　西川晃

剃刀を持つ妻の手にふと怯ゆ
病み呆けて黴の匂いを嗅いでいる
詩がどうのこうのと店に尻むけて

名古屋市　野田一念

槍穂高来ても女は飯を炊き
初恋の囁き磯の風に消え
婿さんの出物あったら頼みます
君君と呼ぶのは何と女です

神戸市　仲どんたく

一オクターブ上げてマダムは客迎え
ねぎ抜いて石垣積めば坪二万
新劇はいまわのきわにも理屈云い
すりに切られましてん上衣見せあるき
月給を三つに分けて帰途につき

平田市　久家代仕男

掛引きの要らぬ理論で恐れられ
拾円の借りを婆さんまだ気にし

大阪市　本多柳志

スト三月黒い羽根など云うてなや
大金は持てぬ手相を撫でられる
南極の犬は死ななきゃ帰れない
千年の門へ蛍光塗料映え

岡雲市　原独仙

冗談でないわよわたしあんた好き
涼み台北斗七星子に習い

大阪市　大谷月都

長女誕生

会社に居って子の泣き声を懐かしみ

岡山市　江国幽谷

荒行の僧人間の顔でなし
冷房の室へ扇子を置き忘れ

岡山市　光好陽子

飲み歩いて親の墓が建たず
あんた泳げるのなんて失礼な

西宮市　河相すゝむ

御挨拶に来ました長屋のスピーカー
まだゼロが続き球場灯がはいり
涙ぐましき顔を並べて美容院

西宮市　樋口舟遊

儲からぬうちを楽しむ小あきんど
ゴムマリの運命は力へはね返り

新潟県　高野むじな

デモをするのに授業料納めてる
入選の美談は作り話めき

大阪市　欄蘭

ボーナスの封を女房に切らせたり
亭主関白外では民主主義唱え

大阪市　石倉旅風

見解の相違だなどともう弱音

是非の別分りのおそい政治なり
馬鹿者奴声には出さぬ親ごころ
梅さくら程のちがいで姉いもと
毒舌を黙って聞いている自信
戦争か平和か科学すすみすぎ
かぶと虫ぐらいの武装して自衛

大阪市　魚住満潮

続西成界わい（五句）

真人間にどうしても世間して呉れず
人間を売る証文を取交し
棺桶に片足入れて日歩を貸し
酔が廻ればライオンの様な男なり
四十の抵抗飛田をうろちょろし

大阪府　林　昌男

女難とは易者嬉しいことを言う
奥さんに悪いが傘に入れたげる
唇を逃げて理性を取り戻し
花名刺大事にもってもてもせず

愛媛県　村上旭童

豪雨の中で百姓がいやになり
うたたねのままの酒豪へ朝がきた
仲人へ無沙汰のままに子が産れ

倉吉市　大前鳴恍

妻揚枝くわえて妻のあとから出
よい夢を見ている蚊帳をはずされる
「シブチンネ」元の女になって逃げ

鳥取市　北村三歩

運命の岐路に立ったと気がつかず
面倒だから今の意見に手を挙げる
半分は返すだろうと貸してやり
刑務所の塀の高さを目で測り

神戸市　傍島静馬

遮断機を早目に下ろしうらまれる
水やりもひとにやらせず忙わしがり
冷房も特価売場で温うなり
待望の電話がついてひまになり

笠岡市　木山遠二

床柱へ合槌あっちからもこっちからも
合槌をオッチョコチョイがすぐに打ち
地下たびで見る豚の本鶏の本
日日好日晩酌代を子がくれる

布施市　森下愛論

ロカビリーへガム吐き出したハイテーン
招待マージャン敗けるのに苦労する
大ジョッキ二杯もいける娘を誘い

岡山市　宗高矢寸志

招待の二泊三日に疲れ切り
もう少し苦労させたい子が四十
虚栄心隣は隣と割り切れず
クラス会靴を盗られてから行かず
まずほめてじんわりいっている小言
子供にも古いといわれ気がくさり

大阪市　河井庸佑

順に吠えられて夜更けの千鳥足
ストもせずボーナス決った頼りなさ
自民党やまたの大蛇という姿

泉大津市　高津徹也

人情は馬鹿な子供が持っていた
子の野心静かにけずってくれた母

愛媛県　槇柴光

七夕の宵というのに待ちぼうけ
コスモスのような彼女に気が疲れ
けだものの中の一人に気をゆるし

青森市　工藤甲吉

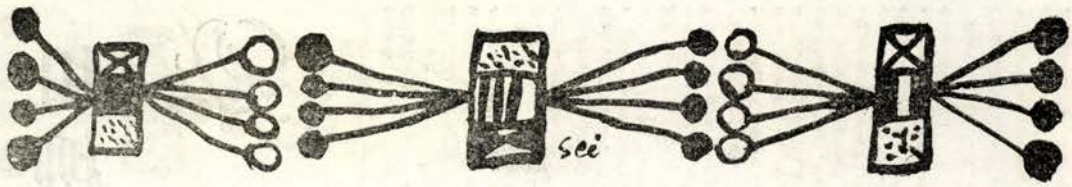
人の死を三行にして記者非情
ひたむきな恋に中年押され気味
上役が惚れてる人に惚れられる
女房は声なき声をきき分ける
母が言った総理大臣にはなるな
料亭の鮎など食べて次期首班
デモというものにすっかり母おびえ

西宮市　門永三舟

戦後派の脚美しく潮干狩
親切だから好きですは情なし
縄のれん一足早い浴衣着る
面白いように賞与も逃げてゆき
スクーターなんと粗末な顔を乗せ

玉野市　伊原明林

大阪府　谷沢好祐



碁をうっていても社長は金になり
大阪市　藤村梨花

あじさいの重たく梅雨の色に耐え
鏡見て来いとは書かず不採用
トタン屋根焔の如く夕焼ける
顔色を見る素早さの淋しき瞳
松江市　小林孤呂二

たった一日の休暇電話に呼出され
一寸したことでも拗ねるほど育ち
落書が嬉しいほどの出来であり
松江市　舟木与根一

負けているのに解説くど過ぎる
昼寝の娘の年頃へ母あわて
岸さんへ
引き幕の故障へ踊りの手がだるく
神戸市　室田千尋

クリームがとけて見合はうまくゆき
愚痴っぽく家のまわりの草むしる
半袖になればむっちり肥えて居り
豊中市　林夢虹

着飾れば心も自分のものでなく
また人妻が買うて行く丹羽文雄
打ち水がしてあり二号さん営業日
恩人の死へほっとするものがあり
堺市　吉本菁風

親分がインテリすぎて気に入らず
成り上りらしく指環を二つさし
母親はまだ長二郎と言って居る
西宮市　山本一傘

銅像の視線感じて歩き出し
腹立てた方が負けだと恋は云う
取り巻きが良かったなどと思ていず
銭になるからやくざ自由党を支持
大阪市　今西生薑

オートメのこわさ身に潤む見学者
うなぎつかむ呼吸も知らず株を買い
停年へ最後のお世辞酒もつぎ
かたことが言えますのよと眼を細め
京都市　室井八九寸

人文字の分子としての祝賀会
悪評へ秘書独断とふてくされ
学生のバイトも列にコンチキチ
彼氏彼氏とおさげませた口

同舟近詠

大阪市　橋本緑雨

犬連れてゆとりができた浴衣がけ
惜別
オルゴールみんなでくれた女事務
筆算で花見勘定して帰り
須坂市　高峰柳児

折さげて役得誘いにすぐなびき
屋上の植木雨待つ姿なり
いつからか笑いがとまった相場欄
アルバイトたくましい汗買われてい
心落つけて税務署の門くぐり
末席へ来た猪口徳利ついて来ず
大洲市　米沢暁明

レコードの力も借りて雨乞いす
残業もテレビにつられ捗らず
認証式紅一点へなごむもの
栄転は反組合の功労者
今治市　長野文庫

ちっぽけな会にも主流反主流
どきりっとさせるノッポの黒眼鏡
和歌山市　秋月宏方

月明り虫は楽譜をまちがえず
劇のあるかぎりわらじにある販路
新居浜市　月原宵明

見るものにしとく西瓜のはしり賞め
うしろばかり気にする客でみなサクラ
辻替えて香具師とサクラは入れ替り
函館市　北村白眼子

金縁の中狡猾な瞳が動き
恩讐を忘れた瞳と瞳美しい
有難し老妻貧に動じない
母の遺物をうまがる帰省の子

★★★★

川柳の形態学

北川春巣

★★★★

近頃の川柳界におきましては、やれ詩川柳だ、やれ革新川柳だ、やれ本格川柳だとやかましい議論が闘わされております。それは川柳の内容についての議論でありまして、それはそれで結構なことでありますが、私は川柳の内容に拘わらず、川柳の形態について調べておりますので、少しばかりお話ししてみたいと思います。医学におきましても、先ずはじめに解剖学を習いますのと同様、川柳におきましても解剖学ー形態学は大切であると思います。

川柳の形態学では研究の対象は色々あります。先ずリズム、五七五のリズムは忘れてはならないことです。またその五七五の区切り方にしましても、上五を一・四、二・三、三・二、四・一、と区切る区切り方、あるいは五七五を八・九とするあるいは九・八とする、十・七とするなど、分類の仕方は色々ありましょう。

次に形態学には、音韻のこともはいると思いますが、音韻につきましては既に本誌第三七四号に私が小研究を発表したことがございます。また座五がどんな品詞で止っているかということも面白い研究課題であると思います。これにつきましては、同じ号に早川清生氏が「句の結びについて」と題して研究を発表され、種々と意見を述べておられますが、私はまだ意見を述べる段階にまでは来ておりません。今夜はこれについて調べたデータを述べまして、皆様にも考えて頂きたいと思うのであります。

清生氏は座五の「止め」が名詞で止っている句、動詞で止っている句、形容詞、助動詞、助詞で止っている句というふうに分けておられますが、私が調べましたものも「止め」は大体これ以外にないようでありますので、清生氏の調べられたものは、そのデータをそのまま使わして頂いて議論を進めます。

お分りとは思いますが、この分類の例を挙げてみますと、お手許にお持ちの「川柳雑誌」八月号で「名詞止め」と申しますのは、路郎先生の不朽洞句帖では

なんかにごまかされて来た平凡な一生
地下鉄を出た気持ちなり誕生日

などがあります。「動詞止め」では、「終止形止め」と「連用形止め」とがありますが、「終止形止め」は、同じく不朽洞句帖に

頂点に立った気箱根で靜養す
土地の沈下とともにこころも沈む

があります。「連用形止め」は不朽洞句帖には例がありません。次の頁の川柳塔に

四五枚の一万円札を三度よみ　多久志
ユリ活けに来て淋しさを置いて去に　潮花

などがあります。次の「形容詞止め」は比較的少ないのですが、川柳塔に

繃帯の白さえ見えぬのも悲し　潮花
手に触れる感触だけの日がこわく　潮花

があります。これも終止形止めと連用形止めとがあり、作者もどちらで止めようかと苦心された所であろうと思いますが、数が少ないので分けずにおきます。

次の「助動詞止め」では、不朽洞句帖の

米ソに挟さまれてその日ぐらしとなれり

は「終止形」で止っており、川柳塔の

口止めをしたかと母に案じられ　本客
張切りなさんなと医者に注意され　春巣

などは「連用形」で止っております。「助詞止め」は

ファンも疲れるだろうさ社会黨の動きには　（路郎）
参考書探がすことには能たけて　古方
新調の家具へゴッホは古いかな　快夢起

などであります。

そこで私は豆秋句集「ふるさと」、霞乃句集「福寿草」の全部の句を、以上の方式に従って分類して、そのパーセンテージを示しますと第一表のようになりました。

第一表

	名詞	動詞	形容詞	助動詞	助詞
	%	終 連		終 連	
川雑(500句)	23	(11) (39) 50	2	(10) (6) 16	9
柳樽(500句)	35	(5) (46) 51	6	(6) (1) 7	1
ふるさと(245句)	19	(13) (28) 41	3	(15) (6) 21	16
福寿草(568句)	37	(10) (22) 32	5	(13) (4) 17	9
武玉川(280句) 719	65	(11) (12) 23	3	(6) (3) 9	0

清生氏の発表された「川柳雑誌」からの句五百句と柳樽の句五百句とのデータをお借りして、一しょに表に書いてみました。これにどんな意味があるかということは、さきにいいましたようにまだ考察してはおりませんが、句集ではその作家の形態上での句風とい

ノイローゼをふっとばす

習慣性や副作用の心配がない　催眠鎮痛剤

ブロバリン【健保適用】

30錠 60円　100錠 150円・医家用には粉末 25g～

日本新薬株式会社

ブロバリンはもちろん催眠剤ですが、又一方に於ては大脳皮質性の緩和な鎮静剤としても大へん広い用途を持っています。例えば……最近話題のトランキライザー的な使用法もその一ツ……イライラ、ジリジリした時にいつも二ー三錠これで気分も落着いて夜も又安眠、という訳あまりクヨクヨせずに今晩はブロバリン錠で熟睡なさって下さい。

うようなものがわかる気がいたします。

所で、川柳はもと連歌から出たものであるといわれておりますので、私はその祖先の連歌について少し調べてみたのであります。

水無瀬三吟何人百韻

長享二年正月二十二日（一四八八年）

賦何人連歌

1 雪ながら山本かすむ夕べかな　宗祇
2 行く水とほく梅にほふさと　宗肖
3 川風に一むら柳春見えて　宗長
4 舟さす音もしろきあけがた　宗長
5 月や猶霧わたる夜に残るらん　宗祇
6 霜おく野はら秋は暮れけり　宗柏
7 なく虫の心ともなく草かれて　宗長
8 かきねをとへばあらはなるみち　宗祇
（一ノ裏）
9 山ふかき里やあらしに送るらん　宗柏
10 なれぬすまひぞさびしさもうき　宗長
11 今更にひとり有る身をおもふなよ　宗祇
12 うつらはんとはかねてしらずや　宗柏
13 置きやぶる露こそ花に哀れなれ　宗長
90 雁なく山の月更くるそら　宗祇
91 小萩はらうつろふ露も明日やみん　宗長
92 あだの大野をこゝろなる人　宗柏
93（名残の表）忘るなよかぎりやかはる夢うつゝ　宗祇
94 おもへばいつをいにしへにせん　宗長
95 仏たちかくれては又出づる世に　宗柏
96 かれし林も春風ぞ吹く　宗祇
97 山はけさいく霜夜にかかすむらん　宗長
98 けぶり長閑に見ゆるかり庵　宗柏
99 いやしきも身ををさむるは有りつべし　宗祇
100 人におしなべ道ぞたゞしき　宗長

ここに挙げました「水無瀬三吟」は連歌の模範ともいわれておりますもので、これが作られましたのは一四八八年今からざっと五百年前で、柳樽初篇が出ましたのが一七六五年ですから、柳樽の約三百年前ということになります。足利義政が京都に銀閣を建てた五年後に当ります。宗祇という宗匠が弟子の肖柏、宗長と三人で大阪三島郡にある後鳥羽院の廟へ、後羽鳥院の二百五十年忌に奉納したものであります。後鳥羽天皇は和歌の方で有名な「新古今集」の撰を命ぜられた方であります。

連歌といいますのは、先ず一人が第一句（発句）を詠みますと、次の人が第二句（短句）を付けるその次の人は第三句（長句）を付ける、第一句第二句で一首の和歌になる、第三句と第二句とでまた違った趣きの和歌が一首出来上るそしてその付合せの妙を喜ぶものでありまして、第三句を付けてできた和歌と、第一の和歌は、もう何の関連もなくてよい、いや関連があってはならないのであります、従ってこうして五十韻百韻が出来上りましても、首尾一貫した思想を現わしているわけではなくむしろ一句一句が違った趣きを展開するのが見所であるのであります。しかし連歌にはキチンとした作法がありまして、第一の発句は現在眼前の季節と風景とを詠み、こせこせせず気高く幽玄にうたいまた切字を入れた句に独立性と完結性をださなければならない、切字を入れなければ「平句」と区別がつかなくなり、発句の値打ちはないといわれております。この発句が今日の俳句になったことは、皆様ご承知の通りであります。第二句は「脇」といい、発句を受けて句柄を気高く、物の名で押えて止めるのがよい。また第三句は「て」で止めなければならない、第五句は「らん」または「けらし」で止めなければならない。第五句は「月の座」といい月を詠まなければならない、第八句までを「表八句」といって、懐紙の表へ書き神祇・釈教・恋・無常・又は名所などは詠んではいけない、懐紙の裏（一の裏）の第一句は「らん」上りで格長高い句を入れるべきだ、などなど作法が実にやかましいのであります。一の裏から二枚目、三枚目の表と裏へは各十四句を書き、第四枚目（名残ともいう）の表も十四句、名残の裏は八句を書き、最後の句（挙句）は祝言で終ることになっております。

私はこの「水無瀬百韻」から川柳と同じ五七五の長句ばかりを選んで、その句がどんな品詞で終っているかを調べてみました。もちろん和歌は文語調でありますし、川柳は口語調であり、また連歌には「名詞止めにせよ、らん止めにせよ、てで止めよ」などという作法がありますので、そこに大きな違いのあることは予測されたことでありますが、これを表示してみますと、第二表のようになりました。

第二表　水無瀬三吟

名詞	動詞	形容詞	助動詞	助詞	副詞
12%	連 (4) 命 (4) 8	2	己然 (2) 終 (12) らん (20) 34	42	2

この数字はパーセンテージを示しておりますので、長句五十句の中には、この数字の半数の句であったということになります。川柳の祖先の連歌では、このように川柳とは似てもつかぬものでありました。

連歌の行われていた頃、連歌の余興として「俳諧の連歌」というものがありました。俳諧とは滑稽ということで多少かみしもをぬいだような所があつたものと思われます。戦国時代になり山崎宗鑑らによつて、これが独立の機運を迎え、それから江戸時代になつて松永貞徳らは俗語をまぜ、縁語やかけことばなど言語上の技巧に滑稽を求めるようになりました。その頃また「前句付け」も行われ、はじめは連歌の付合せの修辞だという指導精神であつたのですが、後にはこれも独立して前句を出題してその付句を募集するようになり、さらにはその付句の高点入選者に賞品を出すようになつて来ました。そうしますと、作句者も武士だけでなく一般庶民もこれに加わるようになつて来たのであります。四時庵慶紀逸の「俳諧武玉川」初篇が発刊されましたのが一七五〇年で、これは紀逸の選した俳諧の付句の入選句を集めたものであり、「俳風柳樽」は前句付の付句のうちの前句がなくても意味のわかる付句を集めたものであることはご存知の通りであります。「武玉川」は俳諧ですから、長句短句の両方が出ております。私はその長句だけを拾いまして、先程のように下五の止め方を調べてみたのであります。（第一表）初篇には長短合せて七一九句のつておりますが、短句を除きますと長句は一八〇句ありました。「武玉川」にはまだ文語調の所もありますが、口語調もだいぶまじつて来ておりまして、先程の連歌とはかなり違つたものになつていますが、また「柳樽」ともかなり違つていることは、表に見られる通りであります。

私は川柳の祖先といわれる連歌から、「俳諧武玉川」それに「俳風柳樽」（これは清生氏のデータによる）現代川柳の一部を調べ、それらの句の下五の止め方を分類してみました。表に見られる通り、連歌は全然資が違つております。その他では、現代川柳において「名詞止め」が減つているのが目立ちますし、また「助詞止め」がややふえております。尋に「武玉川」には助詞止めは一%もありませんし、「柳樽」では「助詞止め」は一%しかありませんでした。「動詞止め」には減つたとかふえたとか一定の傾向は見られませんが、その中で「連用形止め」が減つて、「終止形止め」がふえて来たことは著しく目立つております。「助動詞止め」は現代川柳においては割合がふえており、しかもその中の「終止形止め」がやや多いように感じられます。

私はどれがよいとか悪いとかいつているのではありません。これが川柳の指化の道を歩んでいるのか、あるいは退歩しているのかわかりません。ただ歴史的の傾向を見せしたに過ぎないのであります。その原因、過程の考察は今後に残された問題であることを申し上げて、暑つ苦しい話を終りと致します。

（本社八月句会の柳話から）

輝やく巨歩（1）

——創刊号から四百号まで——

★ ★ ★

大正十三年一月十九日、大阪南堀江、書林倶楽部で「川柳雑誌社」の創立川柳大会開催、二月十五日、「川柳雑誌」創刊。㈠川柳の社会化、㈡古句研究、㈢初心者の指導を目途とする、菊判三十二頁、定価三十銭の月刊誌。当時の柳誌は四六判型乃至は小型で、然も断続的な刊行であったため、川柳雑誌の菊判型の型体と確実な月刊発行とは、既成柳誌に異状な刺激を与え、柳誌改革の風潮を捉したことは、川柳史に特筆される快事であった。事実、「川柳雑誌」は、その内容の句、評論、随筆などは言うに及ばず、表紙から挿画に至るまでを各界の第一流の執筆者で飾り、**川柳の社会化と高度の文芸性を指向して**熾烈な意欲を燃やし続けて来た。かくて三十幾星霜四百号記念特集号発行に当って、「川柳雑誌」の略年譜と、その輝かしい歴史の一端を担われた執筆者とを並記するのも極めて意義の深いことと思われる。過去の整理が将来の指針となれば、この目的の大半は達せられたこととなろう。

大正十三年

川柳雑誌社誕生。一月兵庫県武庫郡鳴尾村本社創立句会、一月十九日大阪書林倶楽部で開催。

創刊号発行　二月十五日菊判三十二頁一部三十銭。

観梅吟行　二月十八日金熊寺から砂川へ。

川柳書架　五月号から掲載。小島六厘坊忌　五月十六日端の坊で営む。（以後省略）

新和歌浦吟行　六月二十三日。路郎主幹橋本緑雨を帯同北陸へ藤村青明忌　八月九日に修す。（以後省略）

松村柳珍堂忌　九月九日端の坊で営む。（以後省略）

柳翁忌　九月二十三日端の坊で営む。（以後省略）

大正十四年

創立一周年記念川柳大会　一月二十三日端の坊で開催。

川柳家の戸籍調べ　四月号から連載。

本社事務所新設　大阪市港区八条通二丁目十一番地。

納涼川柳会　八月九日夜道頓堀川納涼船上で。

観心寺吟行　十月四日

大正十五年

新年号は四十八頁、二月号から従来より八頁増頁の四十頁本位となる。定価据置。

読者の天地欄二月号から新設

第一回遅日荘柳談会開催　二月の句作上常套語法　四月号から掲載。路郎主幹執筆。

女人高野吟行　三月七日

路郎主幹南紀行脚　八月

本社近畿支部連合句会　十一月二十四日日本橋倶楽部で開催。（以後省略）

昭和二年

柳樽評釈二十四篇まで、二月号から連載。路郎主幹執筆。

ロンドン君死去。三月一日

川柳漫画累卵の遊び　四月号から掲載。路郎主幹評　柴舟氏画。

本社移転　六月八日大阪市西成区千本通五丁目七番地へ。

堺吟行　五月二十二日妙国寺から潮湯まで。

路郎主幹松江支部訪問七月十日

「川柳雑誌社」は八月号から従来の同人制度を廃し新組織を採るとともに、紙質を改良、飛躍的増刷をなし、市内の各書店に配本。

西垣松雨死去　八月九日

本社印刷部輪転機を据える。八月。

川柳献句祭　九月十八日天満宮参集所で開催。初代川柳の霊を祀る。

古句質疑欄新設　十一月から蛭子省二氏担当。

昭和三年

月評欄二月号から掲載。以後名称の変更などあるも句評は原則として連載。

客員今井卯木氏死去。二月三日

路郎主幹八月十六日北海道周遊の旅へ。

高野山吟行　九月六日

御大典奉祝句会　十二月八日

昭和四年

誌友制を設く　一月

本社事務所に電話開通　一月

路郎主幹松山支部発会記念川柳大会（二月十一日道後公会堂で開催）へ出席。

川柳類題索引　二月号から連載

社友名義の変更。特別社友を同人。維持社友を社友と改称。

金熊寺・砂川吟行　三月三日

BUILDING欄（随想随筆）新設。

聖駕奉迎句会　六月五日日本橋倶楽部で開催。

飛燕往来欄　七月号から新設。

洲本吟行

路郎主幹十一月二十四日松山へ

昭和五年

光耀抄（園秀作家の作品）一月号から掲載。

大問題小問題欄（柳論）一月号から掲載。

前田雀郎氏一月五日本社新春句会で講演。

矢田冷刀死去　一月十六日

須崎豆秋社友に。天王寺支部発足。三月

柳壇の人々　五月号から掲載。

客員西原柳雨翁逝く。四月二十日

路郎主幹五月四日日本ラインへ

路郎主幹裏日本・北海道・東京へ。第二回海峡親善川柳大会（五月十八日函館）へ出席。

宇治吟行　七月六日

光耀抄　八月号から連載となる。**（川雑婦人友の会の前身）**

納涼川柳動物句会　八月七日天王寺動物園で開催。

深日・加太吟行　八月十日

本社九月句会当夜会場附近の病院から出火。

河盛芦村翁死去。十一月十四日

句会費の値下げを断行　三十銭から二十銭に。

（橘高薫風子）

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大阪市東区糸屋町一丁目二番地
電話東(94)1745・5563番

前田雀郎自選川柳三十五句 (1)

アール・エッチ・ブライス訳

Thirty five senryu (Witty Japanese Verses of the shortest type)
self-selected by Maeda Jakuro Translated by R.H. Blyth

年始状　小さな借を　思ひ出し

Nenshijō chiisana kari o omoidashi

The new year greeting card,
It reminded me
Of a little money I owed him.

屠蘇の座に　昨日思へば　遙かなり

Toso no za ni kinō omoeba haruka nari

At the table of the new year wine,
How far away
Is yesterday!

朝涼の　銀座を抜けて　勤めする

Chōryō no Ginza o nukete tsutome suru

Through the Ginza Street
Go the salary men
In the morning cool.

隅の眼の一つ　気になる　夜の汽車

Sumi no me no hitotsu kininaru yoru no kisha

The train through the night,
The eyes in the corner
Weigh on my mind.

旅先きで　古レコードを　聞くみじめ

Tabisaki de furu record o kiku mizime

On a journey,
The misery of listening
To an old record.

死ねば死ねそうに　女と　七日居る

Shineba shine sōni onna to nanuka iru

As though we could die of we would.
Living with her
Seven days.

俳諧と川柳の交流

堀口塊人

俳諧の作品が前句附へ流れ、その流れはいつの間にか、川柳の流れとなっていた。寛延三午年から、安永五申年までに、十八編まで出版された「俳諧武玉川」の作品と明和二酉年から、つづいて出版された「俳風柳多留」の句を比較してみれば、その類似性によって、その事が証明されるであろう。

俳句の方は、元祿七年、正風の祖松尾芭蕉が没してから、次第に衰退の傾向がありその後、約九十年、与謝蕪村の天明調によって復活するまで、特に、川柳がさかんであった宝暦、明和の頃は、現代の俳句史観によれば、暗黒時代であったと称せられる。かかる見方は、明治の正岡子規の蕪村偏重主義によるものと思われるが、その頃多くの俳諧作家が川柳の方へ移って行った為に、俳諧が川柳に押されたのでないかと想像される。

俳諧にはあまりにも刺激が多かった。明治四十二年発行、岩本梓石、宮沢未明共著「新撰俳諧辞典」の、連句作法、によれば、歌仙式の要件として、

一、季の詞は発句、脇、第三、月花の前後及び揚句に必ず入るべきこと。

一、月は初表、初裏、名残の表の三ヶ所に一句宛、必ず詠み入るべきこと。

一、花は初裏、名残の裏の二ヶ所に必ず詠み入るべきこと。

一、裏移は折端の季に従って季の句をすべきこと。

と、説明されている。しかし、この程度の説明は簡単であって、その用語用字についてはもっともっと繁雑な約束があり、その上、各宗匠の流儀によって、当流の方式によれば、当流の秘伝によれば、などと、後進を指導したらしいから、俳諧とは甚だ六ずかしい形式のものであったらしい。私は明治廿六年名古屋で発行された、松井鶴羨著の「俳諧秘事大全」と言う本をもっているが、その第二十八俳諧正式の項は

俳諧正式は連歌の正式に倣ひ、寛永二乙丑年十二月五日松永貞徳、洛陽妙満寺文坊に於て執行ふ、俳諧一座とは十八人をいふよし、列席には、郷、太夫、侍、百姓、町人、僧、禰宜、山伏、女、あるへしとそ、

となって居り、さらに第三十六の、硯引取り方の項では

貴人宗匠へは蓋硯を引き、其他席衆へは五人毎に組硯を引くなり、取方は組たる最下の硯を取り逐次末座に送る、五人の末の着蓋を取りて預り置なり、先づ墨を摺り筆を点して硯箱の前へ穂先を掛け休め置なり、発句を案したる毎に詠草に認め、句案終れば筆を元に納むべし、句案或りたる印なり、一応詠草にて宗匠の添削を乞ひ、後短冊に認むるなり、句案中は行座たるべく、案後は動座も免すへし、短冊を集むる時復座す、硯は末席より蓋をして逐次上に送る、取りたる時に反対して上座の着角廻しとなし執事に渡すなり

と説明しているが、如何に江戸時代の人民とはいえ、これではついて行けまい。そこへ登場したのが前句附である。

一、賞金の魅力があったこと。

二、俗語の使用が自由であって、用字用語に制約がないこと。

三、前句に対して取次所へ句を投じるだけで、しかつめらしい運座（句会）の形式を守る必要のないこと。等

これ等の事情によって、俳諧作家は川柳作家になって行ったものと想像される。かかる事情の下に出現した「俳風柳多留」ではあったが、そのあまりにも大衆的なるが故に、早くも二三の矛盾を胚胎していたのである。「柳多留」は俳諧を大衆化して俗語を俳諧化したものであるが、それと共に、俳諧を俗化（俗語化に非ず）したものであった。その為に、俳諧の風雅を忘れさせ、俳諧から狂句への道を開いたものとなったのである。

民主々義政治とは、大衆による大衆の為の政治、との事であるが、大衆を知性によって分類してみると、賢こい人よりも、阿呆な奴が多い為に、民主々義政治とは、大勢の馬鹿による政治、と言う事になる。この大勢の馬鹿が、だんだんかしこくなれば、政治もよくなるわけであるが、ともすれば、馬鹿はさらに馬鹿を誘う傾向をもっているので、政治はなかなかよくならない。「柳多留」は俳諧を民主化したものであるから、その、よさ、と、わるさ、をもっていたのである。

「柳多留」二十四篇までは、初代川柳の息のかかった作品集となっていて

これ小判たった一晩居てくれろ

嬉しい日母はたすきでかしこまり

のような、佳作が多いとされているのであるが、初篇においてすら、その反面に

三神はなぶるとよみし御すがた

立臼に天狗の家をきり倒し

のような、低俗なるうがちによる狂句の芽をもっていたのである。

「柳多留」は天保九年一六七篇をもって終りをつげているが、それより少し前の文化、文政、の頃からだんだん堕落して行き天保の頃にはすっかり狂句調になってしまった。それから明治年間に至り、新川柳が提唱せられるまでを、川柳の暗黒時代と言われている。

この説に対し、私は、その頃の、川柳集をよく読んでいないのでよくわからないが「柳多留」の中で全く狂句化した筈の川柳が、今度は、既に暗黒時代を経て復活した俳諧の中で芽を出していた事は、指摘出来ると思う。「蕪村七部集」の中の若干の作品がそうである。

七部集の中の「其雪影」は「柳樽七篇」と同じく、明和九年の刊行である。これは主としての俳諧の連句集であるが、その中で、一句のみにても句意わかりやすく、しかも川柳調に近い作品を撰んでみれば、次

の通りである。（江戸時代の俳諧書には著作年月日と刊行年月日には相違がある。）

添とけて居るとの便手も下り　几圭
腹立た帯は左へ廻り過　同
ごろ〳〵といつ子宝になる事そ　同
及なき人を見初る松の内　同
見返り〳〵よいとしをして蹴つまづき　同
いとほしや大小差ていとま乞　同
さかやきを半分剃て悔みうけ　同
父上のお江戸詞を笑ふ也　同
ほととぎすかはかり腹の立時に　同
追従に己が威勢をとり交て　同
長尻か借りに来た物置て行　几董
長家中昼飯時と成にけり　蕪村

このような例は「明烏」「一夜四唫」「花鳥篇」「桃李」「続明烏」「続四歌仙」のいたるところから発見出来るけれども、その終り「柳樽十八篇」と同じ天明三年に出た「五車反古」からは次のような句を撰ぶ事が出来る。

丹をべた〳〵と大津絵の鬼　田福
隣に耻よしうとめの声　同
おもたき傘を返す日もなき　維駒
一ト谷はみな維盛の子孫にて　道立
百姓のたはこは臭し梅花　嵐山
海苔の香やまたみぬ海のなつかしき　舞閣
貌つきや花にやはらく小役人　臥央
畠の中を駕のちかみち　几董
初雪ふれり師走ついたち　維駒
うつゝなふ抱よせたる膝かしら　百池
傾城に腕見せけり相撲取　松化
去年より又淋しいそ秋の暮　蕪村
喰かゝり残すへからすとうからし　来雨
とうからしつれなき人にまいらせん　百池
茶の花や隠者かむかし女形　鉄僧
行としや又訪ふ家もすゝ払　維駒
水うちそゝぐ進物の鯛　春坡

こんな例は必ずしも「蕪村七部集」ばかりでなく、その頃刊行された、他の俳諧書にも見る事が出来るが、人間的な俳句として有名な、小林一茶の「おらが春」の如きはその著しい一つの例である。この句集は文政二年に成り、それから約三十二年を経て嘉永五年に刊行された。明治天皇御降誕の年である。その頃「柳樽」は全く発行されていなかったようである。その中から、川柳に類似性ありと思われるものを、前書は省略して、抄出してみると、

目出度さはちう位也おらが春
這へ笑へ二つになるぞけさからは
み仏や寝ておはしても花と銭
猫の子や秤にかゝりつゝじやれる
雀の子そこのけ〳〵御馬が通る
五月雨も中休みかよ今日は
竹の子と品よく遊べ雀の子
蚊がちらりほらり是から老が世ぞ
花つむや扇をちょいとぼんのくぼ
古郷は蠅迄人をさしにけり
大蛍ゆらり〳〵と通りける
松の蟬どこ迄鳴て昼になる
蟻の道雲の峰よりつゞきけん
露の世は露の世ながらさりながら
飛蛍其手はくはぬくはぬとや
まかり出たるは此藪の墓にて候
どう追れても人里を渡り鳥
鵙の声かんにん袋きれたりな
影法師に耻よ夜寒のむだ歩き

さて「蕪村七部集」の方は、連句の中の一つであり「おらが春」の方は発句集から選別したものであるが、これ等の句に共通している点は

一、俗語を活用していること
二、自然の写生でなく、自己の心境を外界の事物に托して表現していること
三、人間的体臭を発散しながら、芭蕉以来の風雅の匂ひ、をのこしていること

などである。私は、そこに「武玉川」から「柳樽」へ移行した頃の初期の川柳作品との類似性を感じるのである。

私は「川柳とは俳諧の連句が、前句附を契機として独立したもの」と解釈している。そうした見方によれば、江戸時代の俳書はすべて川柳の参考書となる。そこで、俳諧の作家が、前句附の作家となり、それが川柳の作家になって行った事情は想像出来るけれども、せっかくの川柳が、だんだん狂句化したのみか、その狂句化した川柳すら中絶してしまった、事情の方は、どうも理解出来なかったのである。作品の転落と共に、その作家はどうなったのであろうか。

私は、これを、川柳の作家は再び俳諧へ後退した、と解釈したいのである。あまりにもわずらわしい俳諧の制約に、いや気がさして川柳作家になってみたが、その川柳も大衆化すると共に、いたずらに野卑低俗、風雅のこころもちを失った作品ばかりがはびこるようになったので、これにも失望して、再び俳諧の作家に戻って行った。斯うした想像は無理であろうか。

その裏付として「柳樽」と前後して刊行された、俳諧集、には俗語を使用したものがだんだん多くなっている。「柳樽」休刊後に発行された「おらが春」の如きは、俗語を自由に使用しながら、決して低俗ではない。と言う事が出来る。川柳はいつの間にかその流れを変更して俳諧の中へ逆流していたのである。

右の意見は、単なる私の思いつきであり感想である。あらゆる文けんをあさりつくした研究の結果ではないから、この思いつきに興味をもたれる方は、このテーマによって改めて研究されたい。ただ私は、一川柳人として、江戸時代の俳諧作家と、同質の血の流れを感じているのである。

（川柳雑誌四百号を祝して昭和三五・七・一六稿）

・特別寄稿・

誌壽四百号を祝う

川柳單語

川上三太郎

庭は
道の盡きたところから
はじまり
句は
実を虚にしたところから
はじまる

○

句なんぞ書く
時間がない
と言う人
よく
生きている
時間がある

○

句の目方は
自分の目方と
同じである

○

精神一到
だけでは
句は
成らぬ

○

句の道は
行くこと
いよいよ深ければ
われは
いよいよ
孤独なり——

○

孤独地蔵花ちりぬるを手に受けず

★

句帖愛着

岸本水府

私の家の非常持ち出しのその第一号は私の句帖である。私の書斉の腰かけのうしろにある帳だんすに赤紙を貼ってあるひきだしに入っている。創刊号からの「番率」も大切だが誰か持っているし、句帖は天下に二つとない私の句集だからである。

句帖を保存するようにと意識して、秩序をつくり出したのは、戦中の昭和十五年からで、月一冊と定め、これは月刊ですと洒落れていたが、去年から紙数を倍にして隔月発行？　にしている。

罫なしの白紙をとじた大学ノートを買って来て、学生時代の重い印象のあの表紙を破りすて、カレンダーの版画などのものと取り替えて、一寸見ると雑誌のようにする。このような大形にしたのは、故松瀬青々氏がいつも手にしていた雑記帳式の句帖をマネたものである。

銀行から貰うてのひらに載る式の手帖は、字をこまかく書かねばならないし、推敲して書き直すのにわずらわしいからこの方がよほど便利。その上旅をした時など先々の旅館のマッチレッテルや箸紙や庭の花など採って貼ることも出来る。いささか少女趣味におちいっていることも百も承知だがあとからみると実に楽しい。ハガキ形の紙に書いた柳話メモなども貼っておくと、話した内容もおよそわかるというわけ。

例会などでこの句帖に作句して行ってあとから披講をきいて、採否をあきらかにしておく。つまり入選句に一々点をつけておくのである。私のこのやり方はこの句とこの句は活字になる、あとの句は没になったが、このまま自分として没にしておくか、生きている句として認めるか、あの選者は選がたしかだから……と反省する時と、あの選者にこの句の味はわかるまい、などという突っこんだ考えをもつ場合とある。この時の出句の結果に点を入れることは必要なことでぜひおすすめしたいことだと思っている。

ところが最近某氏が某誌に「入選句を聞いて悦に入って手帖にサインしている嬉しがりがいる」というような意味を書いていたという。私もそんな目で見られているという気がしてゾッとした。

私はむしろ、句会でいなきり、句筵に句を書いて、ひかえもとらず出句している人を見て、その場かぎりの作句、句を大切にしない人だとさえ思うくらいである。句想が頭から出て、紙上に鉛筆が動く、この句は責任ある（強く言えば）その作家の一句であるものを、流れに捨てたつまようじのように扱かうとは腑におちない。

ひかえをとった句帖の句に入選句に点を入れて、入選句を愛撫するもよし、後日自嘲するもよし、採られながら選者をテストした気になるもよし、句会の句として軽視するのはおかしい。没の句にも作者自身には一片の作意があった筈である。没がもっともだとして推敲してみる没は選者の不明からだと断定して、選者をあわれむも勝手。

いずれにしても私の場合は、句帖の句に、選者がついてまわった句に限り、当落をはっきりサインしておいて後日の参考に資するようにしている。

私の句帖——いま一九六冊目を使っている。川柳雑誌のよろこびに習って近く二百号記念のお祝いをやろうかと、ただしこれはうちの家だけのこと、おまけに来年になったら忘れてしまうにちがいない。

喜悦

中島紫痴郎

川柳雑誌が四百号になったと聞いて今更のように驚いた。実は長い間送って頂

いて毎号を手にし拝見はしたが、何号になったかなどと考えてなかった。ソレだけに驚きもひどかった。

実は路郎氏が川柳で生きて行くと宣言された時に、私等は当時の川柳の社会的位置から考えてそれは無謀で継続の困難な事で、単に機関誌の発行さえ危うまれたのであった。

昔は、俳句でも川柳でも投句者から入花料と称し、何句一ト組で何銭をとり、其の入花料から高点句の賞品や選者の選句料及び雑費をまかなった上、いろいろと句集を美事の印刷で発表されて来たのであった。

柳樽と云う世界にも無い長期の刊行物であったが時代思潮か選者の好みか狂句と変って来た為め、句が言葉の綾や語呂の面白さ位であった為め識者からは低俗趣味の遊戯として冷笑に付し去られてしまった。

明治何年であったか忘れてしまったが時事新聞社の時事吟として何世川柳と称する人の選で天位に抜けた句は

サツマ艦イモ羊羹と下女思い

であった、軍艦のサツマ艦が進水式をあげた新聞記事への句であった。

それを久良伎や剣花坊さんが古川柳の復興運動を起し、機関誌を出されて居たが、一般社会からは文芸作品としては見てくれず、謎々や、ものは付位に推定されて、其の雑誌も投句者が申込む位で、余程の物ずき者でなければ読んでくれなかった。夫をなげいた我々青年が技巧主義から心の表現詩にしようと新傾向句と銘打って発表運動を続けたが、悲しいかな三号雑誌かせいぜい二三年雑誌で姿が消えてしまうのであった。

斯る中を路郎氏が宣言し断然と立たれた其の意気で四百号までこぎ付けられ、尚前途ある雑誌とされた事は、川柳人として心から其お骨折りを感謝し、川柳の為めに喜び悦ばなくてはならぬが、此の際尚一層の御努力を以て、句の向上のお はかりして頂き度くお願いしてお祝の言葉とします。

大会の 兼題から

椙元紋太

川柳雑誌の誌寿四〇〇号祝賀記念川柳大会のご案内を戴いて、その五つの兼題を見ていると、どれもが川柳雑誌の現実に関連した味わいを横に持っており、縦に各選者その人にもそれぞれ調和したものがあるように感じられるのではほえましく思ったのである。

私の願は「思い出」であるが、事実、私も今は思い出を楽しむ齢になってしまって、若い人に昔話をよくするようになっている。それに、何事にも諦らめる心が強くなり、結論を急がぬ気の長さを持つようになった。元々そうした性分であったが近頃は特に著しく、柳論などを読んでも、そう喧くならなくてもどちらでもよいのだと思ったりする。

従って、折角熱心な人の話に水をかけてみたり、大まかな断言で議論の出ばなをくじくようなことが時々あることに気づく。これは自分に覇気の乏しくなったことを棚にあげて、今ごろの若い人たちはと、ひと口に云いたがる年齢なのであろうと思っている。

私が二十四、五才の頃、川柳ほどよいものはないと思いこんで、ここ十年もすれば川柳の地位も人口も驚くほどよくなり華やかな時代を迎えるだろう。川柳にはそれだけの特性と可能性を持っている。川柳が真実に理解されれば、どんなに社会がよくなるか知れない功徳があると、楽しい夢を抱いていた。

その後、十年経っても二十年経ってもそれらしい時代が現われない。人口は以前に比べればかなりの増加を見たようであるが、五十年という経過から考えると自然増と云うてよいほどで、大して私たちの力が役立っているとも思えない。

社会的地位にしても、相も変らぬ線を辿っているのみで、以前に比べれば少しは勝しかと思えるがそれも川柳家の年齢が高くなるにつれて、それに伴なうた程度の進み方で、本格的に川柳が認められているのではない。いわば五十年前も今も変っていないのである。

一面がっかりすると共に、一面若い時の短兵急な浅慮が思われて今更甘かった考え方を反省するのである。これは中々手強わい仕事である。今までのように外に向って求めることをやめて、じっくりと内部を見直してかからねばならぬ。

我田引水的に、手前味噌を吹聴してばかりいた気味がある。寧ろそれよりも、よいものは捨てておいても認めずにおれぬものだという自信のもとに、内部向上に努力した方が賢明である、と近頃思うようになったのであるが、これも今更云うまでもないことかも知れないが、年とった私の考え方である。

ある程度の宣伝と進出運動は必要であるがそれ以上の努力が内部向上に払われなければならない。勿論、云うに及ばずそれも行われているのであるけれども、多くの意見や柳論を読んでみても今自分が立っているところを引き払ってそこへ移るほど魅力のあるものにまだ接しないのである。

これはお互いがそうであるかも知れないので、従って先ず自己の脚下を深く掘りさげて充分に確実な基礎を築き得るものであるかを究める外はないのである。斯うして現在の静かな川柳界が眼前に横たわっているように私には思えるのである。少々の悪評や嘲罵をうけても或程とうなずけない限り、斯くなる外はないのである。

そこでいよいよ持久戦である。急ぐなかれである。川柳の不遇を嘆く心が川柳界の支えとなって張り合いのある努力を続けさせて現在まで来たのであるが、まだ柳界を貫く新説も出て来ぬとすればお互いにわが道を往く外はない。

現在の柳界は騒がしいようで実は非常に静かであると私は見る。動きが少ないだけに却って不安な気がする。社会に対する持久戦ともなればこの静けさは無気味である。いつまでも続ける底力があるかどうかが運命の岐れ目である。

この時、川柳雑誌が四〇〇号記念の式典を挙げようとしている。よきものは続きよきものは展びることを信条にして私も負けずにあとを追うて行くつもりである。今まで来た道をふり返ってせっかちに急ぐことを諦め、遠い未来に向って希望を抱きながら永久に続く底力を柳界に養うことをお願いとしたい。悲観する訳でないが川柳も前途遼遠であると覚悟した。

「今日只今」との対決

布部幸男

私は「川柳の話」をたのまれると、そのたびに話の第一声を「川柳をつくる」ということは、社会のあらゆる事象を捉えて、それを十七字に凝縮するという一つの工作を前提としているので、時々刻々の世相や時流を十七字で表現するという技術では、大きい自信をもっているのだが、その凝結されたエッセンスともいうべき川柳を、もう一度作句以前に遡えして、つまり川柳を解きほぐして話すということは、私の一番嫌いなことであります。したがって至って話をすることが下手なのであります。つまり十七字でいつも皆さんに話しかけているというわけなのであります…」と、大体こんなことを前置きにすることに決めている。

川柳をつくる技術などということは、すこしおかしいわけだけれど、一般の川

柳ファンにとって作句上の内面的な苦悩やシテスムなど、いわゆる「柳壇的」な話題をひろげても興味のあるわけがない。いつも「非柳壇的」な川柳にポイントを置いているともいえる。このことは近頃の川柳が「余りにも柳壇的な」傾向に偏在していて、ともすると「現代俳句」との領域に潜入しすぎているキライがあるともいえるし、庶民的な平易さを嫌忌していることに私自身が抵抗している故なのかもしれない。柳壇的意識過剰を離れて川柳ファンにものをいっているということなのである。

川柳とは十七文字を主体としたところの句そのものであって、作家とはそれを創りだした人間であるということは至極当り前のことである。川柳作句以外のことについては、たとえ「川柳作家」としての行動や感情があっても「その人」自身は決して「川柳」そのものではない。どこまでも句そのものが主であって、句によって人が生かされるところに川柳の意義が生じるということになる。私のこのような行き方や考え方がついこんなことを言わせるのであろう。

私はひとつ川柳に対して不信と懐疑を持ち永い川柳作句生活の低迷を過ごしてきたが、最近ではそんな「私」を捨てきって「今日只今の世相に対決してゆく」という新境地を見出だしたので、また新らしい作句意欲の虜となっている。このことは今日只今の人間としての生きつつある一つの実証であり、川柳を通じて「生きとして生ける」一庶民としての記録にも当るわけで、十七文字に托してほんとうの人間の楽しさと苦しさを味い得る自分自身に到達したことを大きい歓びとしている。

「今日只今の世相に対決する」ということは別に新らしい見つけどころでもなく、それが川柳の宿命かもしれない。しかしそのことを特に強調したところに、私の今日只今の柳壇的意識が存在するのであろう。

では「今日只今の世相に対決する」という私の境地を解明するかわりに、ここでも私は私のいう「十七文字」でこれを示してみよう。今ここに「川柳雑誌」八月号がある。それによってこれを実証してゆく。

今日も何遍うぬぼれたかしら
参考書探すことには能たけて
四五枚の一万円札三度よみ
霊柩車俺の乗るのもあれかいな
当用漢字では感じが出ないのも年か
酒煙草やめてなまこのようになり
板囲いすると汚ない家に見え
金言も諺もない世に変り
高下駄をブレーキにして出前来る
汚れてから決まる軍手の右左

以上の十句はパラパラと頁を繰ってみてすぐに私の眼を捉えた。私のいう「今日只今」の私の眼底にこれらの活字がハッキリと定着するのである。以下探し出せばまだたくさんあることであろうと思う。

以上は古方、没食子、多久志、豆秋、花村の皆さんの句から抽出したので敬意を表しておくが、私はこれらの句に対してはいわゆる「門内漢」としての批評は控えるとしても「今日只今の世相」に対しては対決の責を果たしている立派さをいいたいのである。

路郎先生の「不朽洞句帖」の連作にいたっては、タイミングであり、直言であり、対決の燃焼とでもいいたい川柳の火花を見るのであるが、十七文字という型態を離れて発想意欲そのままをやや奔放自在に発表されている。そこに誌寿四百号の主宰者としての年輪の彼岸が示現しまたそれが路郎作品としての大きい魅力とも見られるのである。

「川柳雑誌」の行き方が果して私のいうところと同じであるかどうか、それは知らないけれど、私は私なりに今後の川柳の歩み方に一つのたくましい力と広くそして永い道を得た感じである。

明日のことは知らないし言えない。ただ「今日只今」の川柳作家としての自分自身の作品を、素直に、謙虚に、大胆に自由に創作して「今日只今」に対決してゆくということに、川柳をつくることのよろこびを感じつつあることを言いたいのである。

創刊とも誌齢ともいわずに「誌寿」はうれしかった。文字を生かすという勉強になった。私の一文は「言わずもがな」の一言に尽きていると思うが、四百号という「誌寿」にあやかりたい悲願の悪章とでも見ていただきたい。

（平安川柳社同人）

四百号を一転機に作品の飛躍を

石原青龍刀

私事にわたるが大正十三年といえば、僕が川柳をはじめて二、三年の頃だから「川柳雑誌」の誌齢と僕の川柳年歴とは大してちがわないといってよい。実を言うと戦後はずっと「川柳雑誌」を見せていただいているが、戦前は創刊以来あまり見る機会を得なかった。ただ、今でも忘れないのは、満洲事変後（昭和七、八年頃）大阪大連航路の船中で、サロンに備付けてあった「川柳雑誌」を手にとり柳誌として型破りの大型（四六倍版・いまのA5版）に驚いたことである。それと、前後して、この柳誌が主宰麻生路郎氏の英断により、これも柳誌として型破りの、保証金（たしか当時の金の一千円）を積んだ定期刊行物（純文芸以外の政治問題などを載せることのできるもの）として登録されたということを聞いて、異色ぶりに注目したのが記憶にのこっている。

「川柳雑誌」創刊前後から満洲事変頃（昭和六・七年）までの間、川柳界は歴史的な伝統派と革新派との争いが墓んであった。この雑誌はそのどちらにぞくしていたか知らないが当時伝統派であった僕は、路郎氏の有名な「君見たまえほうれんそうがのびている」（竜註・文字の使いかたは原作とちがうかもしれない）などの作品に感服できず、一種の革新派だろうと思って、あまり興味をもたなかった。これも私事になるが、その頃から三十余年を経たいま、ようやく革新派（多少当時のものと意味はちがうが）になった僕自身をかえりみていささか苦笑するしだいではある。ところが、それと反対に、路郎氏はじめ「川柳雑誌」会員諸氏の作品は、戦後から、現在にかけて、ほとんど完全な伝統派なものになってしまい。戦前の異色ぶりがほとんど見られなくなっている。高鷲亞鉱氏の説によれば、それが最高の「詩川柳」なのだそうで、多年の経験を積んでようやくおちつくべきところにおちついた：老成した：ということになるのかもしれない。

自分ではなかなか実行できないクセに、マンネリを嫌い、飽一にあきたらず、新奇を好みパラエティを望む僕は「川柳雑誌」の近来の作品傾向には、そっちょくに言って不満である。なにかないかと毎号の作品を、たいくつをガマンして一々読んでみるのだが、ノートにとるべきものがほとんどないのに、いつも猛嘆をくりかえさなければならない。あるいは歓が多すぎるのかもしれない。高鷲亞鉱説の「詩川柳」にとって、僕はしよせん「蓬無き衆生」の一人であるかもしれない。だが、考えなおしてみると、堂々A5版約五〇頁の雑誌が毎月遅滞なく発行され、数百人の出句者を擁しているという事実は、とにかく一つの威力であり、たとえ「凡人浮士」であろうとも、それだけ民族文化の一翼をになっているのだから、そして、ある程度「精神の糧」としての役割をはたしているのだから、おまえの好みはどうあろうとも、これは貴とい存在ではないか、ということも言えないわけではない。

だからリクツは抜きにして四百号になったことは世間の相場どおり、おめでたいと言うべきであろう。人間が長寿を祝われたとき、祝われた当人は「いやもういたずらに馬齢を加えるのみで……」と心にもないカラお世辞を言う。「川柳雑誌」の場合、麻生路郎氏はおそらく「長い苦労の積み重ねであった」と答えられるかどうかはとにかく、そう思われるに

ちがいあるまい。ただし、この雑誌が路郎氏一代のものでなく、路郎を祖師とする一集団のものだとするならば、四百号を迎えて、ほこらかに祝うと同時に、人間の湯合の「馬齢」という言葉の意味を十分にかみしめ、後に続く人々はこの時を一転機として、なんらかの作品上の飛躍を考えられてもよいではないかと思うのである。高鷲亜鈍氏に叱られるかもしれないが、僕は世間一般の文化界の眼と同じく、決して、現在の「川柳雑誌」作品を……「詩川柳」であるかどうかは別とし……それほど高い短詩文芸だとは思わない。わかりきった言葉だが「向上の一路は無窮」である。「ポーイズ、ビィアンビシャス」は川柳作家の場合にも十分にあてはまるのだ。

川柳さん こんにちは

伊志田孝三郎

川雑が発行誌を重ねて今年は第四〇〇号を数えるという。素晴しい立派な川柳塔をうち建てたものである。創刊が大正十三年、この誌の生れた頃に赤ん坊だった人間が既に四十才に成っていることを思えば恐ろしいようなものである。主宰御夫婦を中心に今日まで、ひたすらな歩みを共にして来られた柳友各位は定めし感無量なものが有るであろう。長い歩みの間には至ってのんびりとした天下泰平の時代もあり、戦争という世界人類の試練にさらされて国民は衣食住を失い餓鬼と化してさまよった憂き思いも味わった。あれは昭和十九年冬のだったと思う私は岐阜県の山奥の街に疎開していて、降り続く雪に深く閉ざされていたのであるが、久しぶりに明るい陽ざしの或る日わびしい街なかの本屋で麻生路郎著、陣中やなぎ樽という本を発見して、むさぼり読んだ覚えがある。読む本どころか、まともに食う物も無く、煙草にあらぬ松の葉などを煙管に詰めて喫ったりして乞食のような生活をしていた最中だったのであの日の記憶は私にとって未だに忘れ得ぬ心あたたまる思い出である。今春四月三日きやり吟社四十周年記念句会で私も上京したがその席上鞍馬氏と久しぶりの対面の節も話は期せずして過去さまざまな思い出に賑わった。その時、これは十余年前の曽ての日の話、私の肝煎りで名古屋で大会を開催、その前夜祭として東西の各位が綺羅星の如く拙宅に集まられ不自由な一泊の裡にも柳語懇談に花を咲かせたのであるが、当夜路郎氏もまた勝手判らぬ幸楽町を派出所などで尋ねて、夜もだいぶんに更けてから御参加を得たのである。ところでその際、夜を徹しての歓談に路郎氏と鞍馬氏との間に出来た約束こそ、当時から今日も猶、鞍馬氏が連綿として川雑へ毎月の執筆を続けて居られる古句評釈だとのことであった。

いま全国で一カ月に何万句ぐらいの川柳が生れるのであろう。発表句数のおびただしさ柳論の旺んなる、実にこれ亦今昔の感である。私の初心の頃などは、例えば安直（あんちょく）という課題吟でその上位に

安直なシャツはお臍で仕舞なり

という句が発表され称賛がおくられている。甚だほは笑ましい限りで、整然とした柳論など稀少な時代であった。その点いまや柳界は恵まれている。けれどこの大きな柳界の流れにもマスコミという風潮が多分に感じられるのも矢張り時代というものであろうか。日毎に驚異的な数量を以って押し寄せて来る応募作品、実にどうも、何んと言ってよいか、安直なシャツにも遠く及ばぬ味気ない事を十七字に綴り合わせて異句同音に、よくもまあ根気よくそつてくる。農業の撒布に田園詩情から創つこどじよつても寂しく姿を消してゆく時、今更川柳の三悪票でもないが広い砂野から生れる一句には独特の余韻いうか川柳的詩感というか、何かしら共感を呼ぶ迫るものが無ければなるまい。思うに我々の淡去の柳界は作家数を集める情熱から入門者に対して余りにも安易に過ぎる呼びかけをしてゐつたのではあるまいか。川柳は日常茶飯事を十七字に綴れば可し。句帳と鉛筆を持った日から君は川柳家である。成程この誘惑には誘い込まれる。入り易い、然し今にして思う甚だ危険な呼び込みである。日常茶飯事、何んでもないこと、初心者はそれと、くだらぬ事との区別を識らない。くだらぬ事を十七字に綴るのは簡単に出来る。浅らでも出来るので、僕は機関誌作家だ、などと自ら誇って何十年間反省せぬものさえある。そこでこれに習う柳人と称する投句マニヤをマスコミは加速度的な数を以って柳界へ送り込む。おそろしい奔流である。

中には川柳とは課題吟だとのみ極めこんでいる作家も意外に多い。課題吟十七字の組み合せだけの事なら半年も熱中すれば先輩も初心者もあるまい。みんな一列横隊に轡を並べて常に明日へと歩んでいるのだ。いくら古顔だと言っても今日の内に明日の新聞は買えないのだから。けれど事実との区別を識って自分の生活に川柳愛の灯がともる時、朝夕の暮しを真剣に川柳と取っ組む、実はこんな至難なことは無い。げらげらと笑い過ごしても、所詮は寂しく強く生きねばならぬ人生である。

さまざまな人が通って日が暮れる

如何にも淡々として当り前なこと、誰れにでも詠めそうだが、これはくだらないことでは無い。この何気なしと見ゆる川柳にひそむ作家の人生観に深く気がつく時、人は愕然として、川柳とはただならぬものであると悟る。そしてその時から柳人としての悩みと苦しみが初まるのであろう。

泣いている夢が続いた朝寝癖　孝三郎

そんな汚れた唇で何がエレガント

生一本よしや肴は無くもがな

楽屋口帰る道化師何処へゆく

★

三十七年前の 思い出

大島濤明

川柳雑誌が四百号を迎え、寔に目出度い限り殊に私は路郎先生と三十余年に渉って呢懇にお願いしているので、人一倍の嬉しさを覚えるものである。

四百号と云えば三十余年前即ち大正十三年頃の創刊であろうが「十年一と昔」と云う諺からすると三昔も四昔も前と云うことになる、此の長い間に於ける路郎主幹は勿論のこと同人各位の御苦労は並々ならぬものがあり、同時に斯界に対する功績も誠に大きく、吾等同好の者たちは等しく感謝せねばならぬと思う。さて此の目出度い四百号をお祝いするに適切な言葉をと探したが、容易に見当らないので創立の年である大正十三年頃の思い出なりと書いてお欧びに代え度いと思う。

大正十三年と言えば、私が十有七年の官吏生活から足を洗った年である。がそれについて思うことは、私の役人時代と今日とは非常な差異と隔りがあって感慨甚だ無量である、其の頃はまだ尊民卑の遺風が残って居り、役人は一般大衆より高位にあるように見られて居て、役所の廊下とか土間などに「人民溜り」又は「商人控所」などと書いた紙が貼られ、役人以外の者は無断では室内に這入ることは許されなかった。役所の処置に多少の無理があっても御無理御尤もで、庶民は所謂泣き寝入りに終る場合も間々あった。

その頃私は用度課長をやって居ったが、諸文具、工事用品などを購入する時でも、カウンターを隔てて面接し、工事入札の場合でも、面前開札はせず、業者から見積書を取って係官が一人で開札し、その結果を電話で知らせると云う、至って片落的なやり方であった。

今日では民間人が官庁に来るにも、覚々と正面玄関から這入り、事務室にでも、部課長室にでも随意に出入し、思う存分意見を述べる許りか、ボス的な人になると役人を怒鳴って まで、自分の意見を通そうとする者さえある、それが今日の在り方である。又役人自体でも、当時は労組もなければ職員組合もなく、昇給も首切りも上司の意のままであった。それが今日ではやれ昇給斗争だの、ボーナスを戦い取るなどと、年中行事的にその要求が行われ、我々古い頭の持主には理解し得ないものがある。

デモやストを敢行する人たちの気持ちは全然判らないではないが、大衆の交通を妨げ、一般の通信を杜絶させるなど、世の人々に大変な迷惑をかけてまでも、自分たちの為にストをやると云うことは聊か腑に落ちないものがある。以上は世相の一端であるが、当時の川柳界を回想してみると、大正十三年は大きな変革で

あったとも言えよう、従来古川柳一辺倒であった斯界に、川上日車、田中五呂八、木村半文銭などの諸君が、革新を叫び出し、川柳界に革命の烽火を上げたのであった。その頃大阪に「揚柳」と云う雑誌が出て、古川柳抹殺論だの、先輩無用論など、極端な論評が掲載され斯界を驚かせたりした、而しこの揚柳は間もなく姿を消し、之れに代って北海道小樽の田中五呂八君が「氷原」を発刊して、盛んに旧派（在来の古川柳中心派）へ向って筆陣を張り、罵言を浴びせ、革新を強く唱導し、また之れと時を同じうして井上剣花坊翁も新派川柳を主唱宣伝に努めたのであった。

世の中が日進月歩の現状の中に、川柳だけが古川柳の殻に閉じ籠って居るべきでないと云う理論は成り立つが、扨て文学の形体までも時代の変遷と共に革むべきかどうかが問題で、大衆の川柳家は簡単に革新川柳へ走るには至らなかったのであった。

私が最初に路郎先生の句に接したのは

うちあけて呉れて返事に困るなり

の句で、人情の機微を衝いた名句として敬服したのであったが、此の句の短冊を頂いたのもその頃であったと思う。この様な句の作意を革新派の句風に詠み替えようとしても、適切な表現は出来ないであろうし、矢張り古川柳伝統の句には他の追随を許さぬ良さがあるので、簡単に捨てらるべきではないであろう。

こうした中に川柳雑誌は徒らに古川柳尊重だけに終始せず、さりとて革新を呼ぶでもなく、毅然として常に中正を持しつつ努めて新味を吸収し、所謂川雑句風を打ち立て、今日の隆昌を招来した点は、幹部各位の強い信念を以て新人を誘導されたに外ならぬ証左であろう。

寝ころべば疊一じょう塞ぐのみ

この句も其の後に戴いた短冊であるがこの句の如きものこそ伝統を一歩抜け出た新鮮な、所謂川雑独自の句風であって、ひそかに敬仰する所である。

私は満洲引揚げの際、何も彼も置去りにする外なかったので、単なる記憶を辿って書き連らねたほんの雑文に終ったことをお記びして擱筆する。

（三五、八、五）

同級生

石曾根民郎

見掛けない一通の絵はがきが配達された。普通のはがき大ではない。少し長目の横に広がった変型である。外国の印刷であることはたしかだ。宛名は私だが、熊谷寛夫という人から出した手紙だ。熊谷君は中学時代の友人だ。コペンハーゲンと読めるところがあるので、これは外国の絵はがきを内地で使ったこととわかった。変型だから五円切手では通用せず倍の十円が貼られてある。熊谷君は恐らく郵便局へ行って普通の私製はがきに貼るつもりの五円だけで郵送されるものかどうか、きっとたしかめてから出そうとしたに違いない。それが五円では足りず十円貼らねばならなかった。

文面は暑中御見舞を兼ねたちょっとした便りである。私の主宰している「川柳しなの」を毎号送っているが、忙しくてなかなか読められないのが残念だとあり、「XYZ忘れいる日もあるのなり」という私の作った（熊谷君の印象）の川柳をよく覚えていて、全くXYZに拘泥する日が多くて暇がないと書いてある。

実は熊谷君は東大の原子核の研究所にいて東大教授でもあるが、ごく地味な篤学の士である。ジャーナリズム方面にはあまり出しやばるわけでなく、ごく学究肌で、たまに新聞や専門雑誌に執筆者として名を挙げられているようだ。

この

XYZ忘れている日もあるのなり

という川柳だが、彼がまだ少壮学者として東大を出てしばらくして阪大にいた頃、郷里の松本で中学の同級会が開かれたとき、出席者それぞれの印象を私が川柳作品にしつらえたときのひとつなのである。平素数学の記号で頭をめぐらしつづける彼も、たまにはそうしたXYZの枠からはずれて、ひとときの閑をたのしむこともあってよいのではないか、少しはもののあわれの味わいも嘗めてもよいのではないかという私の内意をふくめたつもりであった。

もう三十年にもなる私のこの川柳をよく覚えていてコペンハーゲンの絵はがきにしたためたのである。彼は昨年年欧米に原子核研究で旅行されたが、この絵はがきはそのとき求めたのであろう。

私が川柳を「川柳雑誌」で熱中し出した頃と今では大分内容も変り陣容も一段と新しく整理されている。馴染み深い名はごく少くなってしまったが、それでもなつかしい雅号の人を不朽洞会員のなかに見出して、ああ私も川柳生活は長いものだなあと思う。そしてうつりかわる世相と共に川柳作家の顔触れをつくづく指折り数えてうたた想いをめぐらすことがあるのである。

XYZ忘れいる日もあるのなり

と一しょ頃に作ったものに

代診の頬に想いのセニョリータ

というのがある。これは同級の藤森閑一君のプロフィルを詠つたものだが、東大出のほっと出の医者の卵が代診で若い娘を診ているところを活写したつもりであった。藤森君はいま北大にいるが脳波の研究では一見識あると聞いている。しばらくアメリカのどこかの大学に留学し、奥さんとアメリカ生活をしたことがあった筈だ。大学教授と言えば九大の薬学科に百瀬勉君がいる。東大から新設の九大薬学にうつって久しい。彼を詠った川柳がないのがさびしい。

文ゴロにつのる恋など語らせむ

日大を出ていま日大三島分校の事務所長をやっている内山一也君を詠ったもの。彼は文学に堪能で、現代文学を論じたものを「川柳しなの」に寄稿して貰ったことがあるくらいだ。（文ゴロ）という特殊な言葉を解することは今の若い人たちにはむずかしそうだ。さしずめ尾崎士郎の「人生劇場」に出てくる学生を想い出すと話は早いようだ。内山君はこういう人であった。恋愛結婚で、もう長女を嫁がせている。

郷愁もあれ武蔵野に出でよかし

佐々木重孝君を詠ったもの、慶大を出て東京の会社に勤めていたが同級会でわざわざ帰郷して出席したわけだが、私が早速印象づけて作ったものだ。いま銀行の重役だ。

なつかしい川柳である。もう三十年にもなる古い私の川柳である。でもやっぱり愛着のにじみ出る自分の作品であることがうれしい。あの頃は若かったなあ、二十歳を少し出たくらいだったなあと思うのである。

熊谷寛夫君からの暑中はがきのなかに本人がよく覚えられていた川柳のことから、こうしてくさぐさくりひろげられて語ることも、やっぱり川柳に通ずるものであることと、しみじみなつかしさを味あわせられる。

新劇の開拓者
川上音二郎五十年

速水真珠洞

七月廿七日福岡ロータリ七月の会合が博多帝国ホテルであるのに、私へ「新派劇川上音二郎」の話をして呉れと依頼された、病後の私が長い口演は出来ないが三四十分間位ならと、うっかり受合って了った。

川上音二郎は博多出身の人物で、本年で物故して五十年、川柳雑誌の四百号記念とほぼ一緒につながる関係である。折柄川柳雑誌社の編集部不二田一三夫氏から四百号記念に何か原稿を送れとのハガキが来ていたので、此両者をくっつけて考えさせられた。

川上音二郎は博多の古刹承天寺に其の墓碑が在り久保田未遷が碑文を書かれてキ然と聳えている。曽て故人が「俺が死んだら、博多の汽車の音のする所に埋めてくれ」と云い残して冥福した関係で、博多駅のほん側の汽車の音のする処を選らばれたのである。

四十五祭の折新派の花柳章太郎一座が其の為め態々九州の文豪火野葦平作「女

俠一代」をひっさげて来演した、其の折私は花柳章太郎丈に

新劇へ四十五年汽車の音

と書いた川柳を贈ったら、其の折出演の筋書へ喜こんで採用して礼を述べられていた。

此川上音二郎五十年忌にも、花柳章太郎、水谷八重子一行が来て、七月二十九日から三日間博多電気ホールで「鶴八鶴次郎」等を開演するようになったので

川上に大瀑布あり燕飛ぶ

の一句を贈って置いた。

其の川上音二郎は元治元年一月一日生れで、博多対馬小路の川上軍蔵の家に生れて、軍蔵は以前黒田藩の御用納入係であった。家業はそっちのけで、遊芸が好きで長唄の鼓を好く打っていた由で、全盛の折に俳優柯原崎権十郎など出入していた由で、然し母親はそと反対で厳格其の物で、音二郎の教育にきびしく、学文所に背負って通い、学文、柔道、画、等の遺言に「お前御父さんの様な真似をしてはならない」と厳しく言い渡して死んだ。

川上音二郎は、母親の死後青雲の志やみがたく、或る日単身家を抜け出して、海岸の田平船に乗り込んで博多大阪間の連絡船に荷物の間に匿れて乗り込んで船長に出航後発見されて叱られた。

大阪の宇治川筋の八軒家の船宿に投げ込まれたが、船長が博多の方へ連絡したので、京都伏見の里へ舟で登って、その折懐中していた天保銭一枚で何して都合したのか東海道五十三次を徒歩で上京して、芝増上寺スミセンの御供へ御帳を二三日食べていたが、之も寺僧に見つけられたが、仏の情けで暫らく増上寺の下男をして、相撲が上手であったのでよく子僧者と相撲を取って一時は好評であったが之も長く続かず、寺から慶応義塾は福沢諭吉先生の処へ移されて、学僕となった。

慶応義塾で寮の学生が夜な夜な夜遊びに出かけ、品川遊廓神明の矢場へ通うのを音二郎は学生達から賄路を貰って秘かに学門を開けてやる、それが発見されて、之も又義塾から追放される。

とうとう東京裁判所に出て臼井塞治の給仕になり月給弐円五十銭を頂いたが飽えない。

喰い詰めたあげく、洋楽が其の頃日本に流行していたので此の度は洋楽の張りかえをして喰いつめた東京を去り、東海道五十三次を洋楽奏め替え染め替えで下って、一本八銭の工費で通り通って一応博多に帰って、巡業となる仕末である。彼は再び京都に出かけ、曾呂利新左工門の茜器家の門に入り「オッペケペイ」節で大当りをする、板垣退助の「自由民権」を看板にかざして、時の政府を憤罵して、投獄百八十回に及ぶ。

明治四十五年遂に劇団を組みて幕間にもオッペケペイ節を唄う、白のうしろ鉢巻、赤い陣羽織、嶋の小倉袴に日の丸の軍扇をかざして其の唄をやる。

へ権利幸福嫌いな人に自由党をば飲ませたいオッペケペッポーペッポッポ、堅い袴、角とれて、マンテルズボンに人力車、意気な束髪ボンネット、貴女や紳士のいでたちで、表面（うわべ）の飾りは好けれども、政治思想が缺乏だ、天地の真理が判らない、心に自由の種を蒔け、オッペケペッポーペッポッポ

それからの川上音二郎はとんとん調子である。

明治廿七年遂に日本第一の東京歌舞伎座に登場して満都は日清戦争劇に大評判となる。後に市川団十郎が其登場を憎んで「歌舞伎座の桧舞台をけずり直せ」と豪語させたという事である。

川上音二郎はそれから衆議員に出場して落選して、其の意気で洋行する事四回米国欧洲の人気を集めて悠々帰国して大阪に帝国劇場を作るという意気旺んな一生をかもした。

七月廿八日正午、花柳章太郎、水谷八重子外新派一同で博多五十年祭をする。川上音二郎の墓前で其の孫に当る川上豊氏が御礼の言葉があった、私も参列をして新らしく故人に涙ありであった。

★

四〇〇号を慶祝して

北村白眼子

老生の「川柳日誌」昭和三年九月一日の頁に次の一行が書いてある。

「**川柳雑誌主幹麻生路郎氏より来翰**」

路郎先生がわが函館柳壇を訪れられたのはこの昭和三年春の「御大典記念渡島川柳社大会」の時と翌々五年八月の「第二回海峡親善川柳大会」へ御臨席願った時との二度のように記憶する。この大会の記念品だった手拭に染めた句は

だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと 路郎

また此時先生に御揮毫して戴いて今も愛蔵している短冊の句は有名な

おれに似よ俺に似るなと子を思い 路郎

であるが、その後戴いた御作品中でも次の二句などは深い感銘をうけたものである。

呑みに来いと云い云い春を留守にする 路郎

文学を軽んじ馬で裾野行く（碧中） 路郎

またその頃発表されて有名になった。

君見給えほうれん草が伸びている 路郎

なども先生を想う時必ず浮かんで来る句だがこれらはみな三十余年前の古い話です。

一昨々年秋先生御発病と承り驚いてお見舞申上げた時の御返辞には

「いろいろ御親切な御伝たまわりありがたく御礼申上げます。この上もよろしく願います。小生は実は十月六日夜仆れまだ臥床いたして居りますので、これだけの御礼だけで失礼します。尤も危機は去り日に日に快方に向っていますから御放念下さい。すいみん不足と過労の積みかさなったのが原因です。血壓は今日百三十です。路郎生」とあるのでほっと病撫で下ろしたのだったが、その後もぐんぐん快くなられて復まだ柳壇へ御活躍を始められたのを見て全柳壇のため祝福していたのである。

五月の本年度「川柳祭り」大会へ参加された「こまつ」誌主幹伊藤茶仏氏の報告記事のある「路郎先生の柳話」の中にある。

「よき作家は必ずしもよき選者とは言いきれない」と「川柳とは何か？をきわめないで本格川柳だ、革新川柳だと本家ぶりみたいなことをいっていては、何時までたっても川柳は浮ばれない」この二つのお言葉には私も大いに同感したのでこの事を敷衍した柳論を郷土柳誌北見の「オホーツク」へ（回顧録）想川の「あさひ」へ（みなづき日記）載せたのだが、また貴誌六月号、直原七面山氏の「選の迷宮」の一文に就いての感想を小田の「こなゆき」へ（題詠雑考）寄稿した次第。

以上三稿に私の述べた要点を些し摘記させて貰って貴誌四〇〇号慶祝の言葉に代えたいと思うのである。

四十年来全国柳壇を見渡して来た老生だが「よき作家であると共に良き選者であった大家（A）も尠くなかったが、作品こそ風格ある佳吟を多く詠むのに選評の方は意外に駄目な人（B）も往々にあったし、これの反対で作品の方は安易低調なものが多いけれど選句には優れた才能を有つ人（C）もあった。しかし最も救い難い存在は、その作品も十年一日の如く平凡低調なら選眼も幼稚、更に定見を有たず、いつも玉石混淆シリメツレツの選句をして而もテンとして大家を気取っている愚昧低能な先輩柳人（D）であった。

Aの如き優れたリーダーをもつ吟社の向上発展は当然約束されるところだが、B、Cどころは未だしも、Cの如き無能な先輩が多く居たとしたらその吟社は進展どころか日日退歩の他なく総体が低調に堕してその地方は「三等柳壇」と見做されるに至り、遂には全柳壇から落伍の運命を辿ることになることになるのである。永年間にこの様な事実を尠からず目撃して来た老生はリーダー即ち選者の優劣が柳壇進展、退嬰の重大ポイントだと痛感する。

「勇将の下に弱卒なし」で優れたリーダーをもつ吟社からは優秀な継承者が輩出するのも亦自然のことで実例の多くがある処だ。

この意味に於いて主宰麻生路郎先生の五十余年に渉る倦まざる御精励と優れた御教導による成果は見事に稔って今やその育成された多くの優秀柳人を傘下に擁する川柳王国「不朽洞川柳雑誌社」の社運愈々隆々、機関誌も茲に第四百号刊行に到った歓びは単に路郎主宰や貴吟社のみのものならず、全柳壇の慶祝してやまぬところであろう。

尚前述拙稿三題の要旨の大部分を残すのだが今日は御指定のスペースの為もあり、又の機会に愚考を述べさせて貰うことにして寔に尻切トンボで遺憾だがこれでこの拙文を擱かせていただく。

ソ連の生みの親・故レーニン

特別よみもの

レーニンに会った男

東野大八

二十年ぶりに再会した信州の友人Mから、めずらしい印刷物を貰った。私がかねがね欲しがっていた文献の一つで、筆者は中平亮さん、この人は古い朝日の記者でそのかみのモスクワ特派員だった。

私が一九四〇年（昭和十五年）北京を訪ずれたとき華北交通社員になっていた中平さんと玉府井の前門グリルで昼食をともにした際「私はレーニンと会見したことがあるんですよ」と言い出した。どこか新劇俳優の信欣三に感じが似ているこの人は、口の重い割にひようひようとした顔で大きな話を軽くする癖がある。ほほう、という顔をこちらがしたら、レーニンズムは今後の国際政局に最も大きな影響力があるから、ぜひ詳しく記録に残して置きたい、と語った。私も言下に賛成した次第だが書くならぜひ私の方の社に、と話はまとまった。当時、きびしい軍国主義下の日本だったので、赤に関するものは一切がタヴーだった。現に彼が異常な熱意をこめて連載の筆をとっていた「ソヴエトロシア講座」もわずか数回で差し止めの厄に遭っていた最中である。しかし、彼が敢えてレーニンを書こうとしている情熱は、レーニンとの会見の自負や誇りが、その胸中にぬぐい難い形で消えやらぬ証左だと私はみた。

私（中平）が、はじめてレーニンという名前に接したのは、二月革命直後のある日のことで、大阪朝日の編集局に「レーニンが特別列車でペテログラード（現在のレーニングラード）に帰ってきた」という電報ニュースの届いたときだった。当時外報部員は、ロシヤ担当の私自身をふくめて、レーニンとはどんな男か全く知らずにいた。だが私の恩師でありロシヤ育ちの山口茂一先生が「このニュースはきわめて重大ですよ」と示唆された。ペテルブルグ大学出身の山口先生は、レーニンについてそのとき、つぎの様に説明された。一九〇三年の官憲交渉によって、ストックホルムからロンドンに移された第二次党大会で、ロシヤ社会民主党は、レーニンの率いる多数派（ボリシェヴィキ）とマルトフの率いる少数派（メリシェヴィキ）とに分裂して、ロシヤのインテリ層に相当のセンセーションをまき起し、なおさかのぼってはレーニン一派がスイスで発行していた雑誌「イースクラ」は最も尖端的な雑誌として密入手され、それを社会運動に興味をもつ連中がむさぼり読んでいたというわけで、それから四十年後、レーニンは革命後のソ連支配の知能となった。レーニンがペテログラード入りしたさきの事件は、ドイツのヒンデンブルグ元帥からロシヤかく乱のため、大金をつかまされて帰ってきた、そのときにあたっていたが、こちらはそのことについてはもとより知る由もなかったのである。とにかく以下は玉府井のグリルでこう語った中平さんの話とその文献を中心にして、レーニン会見の思い出を記録的につづってみたもの。私というのはもとより中平さん自身のことである。

最初、私が親しくレーニンの相貌に接したのは一九二〇年春、モスクワ大劇場で開かれた第二次コムインテル大会であった。この時私の眼に特に印象づけられたのは、彼の大きく円味をふくんでつき出たその額だった。知能の溢れ出そうなそのはげ上った顔を、遠くからうらやましい気持で眺めたものだった。しかし、その演説はトロッキイの方がよほど優れていた。声に幅がなく、ごくわずかながらキイキイ声といった音声である。ロシヤ人のいう〝赤糸をぬったような〟筋の立っているトロッキイの演説にくらべ、レーニンは学者だけに論旨が多岐にわたる傾きがあり、口調も講義のようで、おそらく大衆受けはしないだろうと思われたのであるが、さすがに一言一句が寸分の狂いもなく着実に論旨を編んで進み、一語のムダもなかった。この時トロッキイは赤軍の総帥として、コルチャック、デニーキン、ユーデニッチの反革命軍を粉砕し、ソヴエート政権を確保した直後だけに、彼の人気ははるかにレーニンを上回っていた。ずらりと演壇を囲んだ要人連の中央に、レーニンとトロッキイが肩を並べ、いかにも親しげに談笑していたのが印象的だった。

私がロシヤに入ったのは、十月革命直後だったが、モスクワに着くまで、三回ばかり出あったシベリア進撃中の赤軍兵士は、レーニンを全く神様扱いで、一人の男は「彼は世界中の各国語に通じている」と偉張ったので、日本語はどうかね、とからかうと「ああ、日本語だってシナ語だってペラペラだよ」といっていた。一九二〇年（大正九年）六月、長い間の運動の甲斐あって、私はついにレーニンに直接面接する日が回ってきた。

その朝、私はソ連外務省東洋局長につれられてクレムリ（普通クレムリンだがこれは誤り）へ行った。レーニンの書斎は赤色広場に面した建物の中にあった。入口からそこまで行くには幾つかの部屋部屋を過ぎ、廊下を伝ってまた部屋に入るのであったが、各部屋の入口、出口、廊下、曲り角には必ず武装厳しい番兵が立っていた。城門を入る時、閂門があって通過証を検査し、玄関には拳銃を腰にした将校がいて、これまた今調べられてきたばかりの証明証を入念に調べる。そのものものしい警戒ぶりには愕ろかされた。

書斎入口の別室には、十人余りの若い女がタイプをたたいたり、書きものをしたりせっせと働いていたが、まぎれもなくそれはレーニンの書記たちである。受付の女は三十がらみでせむしであった。

何んだかこの女が印象に残ったので、面会記にこれを書いたら、検閲したレーニンは「こんなことは不要だ」と削ってしまった。

レーニンの書斎は、壁にそってギッシリと書籍がつまり、金文字の背文字がさんとして輝いていた。彼は起ってまず私と局長にイスをすすめてくれた。東洋局長の服はよれよれで袖口も汚れていたが、彼の服は一見外国製のラシャ地の黒服で至極上ものであった。それまで私は、ルナチャルスキイやカーメネフやルイコフやチチェリンに会っているのだが、これらの人々の服はすべて粗末だっただけに、レーニンの服は一層眼についた。ところで、その服を着たレーニンだが、意外と思われるほどその物腰態度はやわらかで、一介の市井の人々と全く変りがない風なのにおどろいた。一国の元首としての奢りなどはみじんも示していない。そうした態度で、彼は最初に「生憎用があるので、会見は二十分ばかりで勘弁してもらいたい」といった。ところが話しはじめると、そんな約束を自分から忘れてしまって、次から次へと質問をもち出し、折角用意していったこちらの質問事項は葬り去られそうになった。随って私はあせり気味で彼の流れ出る言葉のときれるのを待ちかねていかねばならなかった。

彼はまず「日本には地主権の階級はどれだけの勢力のものであるか」と尋ねた。それからさらに、日本の輸出入のバランス等、その他一般的なわが国の経済状勢について次から次へと質問を発したのだが、最後に

「自分はある書物で、日本では決して親は子供を打たないということを読んだが、その通りか」

とたずねた。その通り、親は子供を大切にすると答えると、

「それは、ちょうどわが政府の方針に一致している」

と真顔で言った。

こんな話で三十分間はほとんどつぶれてしまったが、その間、彼は単に私に質問するばかりでなく自分の意見もつけ加え、かつ説明したが、その態度は、たとえていえば自分のオイか親せきの青年にでも前において世間話でもするような調子で、有名なあの硯学で一国の元首であるレーニンに向っているなぞという気分は私にはみじんもしなかった。イスの後脚をあげて片腕で頬を支えて卓によりかかって気楽に語りつづける彼である。

私がレーニンから得た印象は、叡智の溢るるようなその額、学者らしい風貌であったことは、さきに述べた通りであるが、さて三尺ばかりのテーブルを隔てて彼に向きあったとき、彼から受取った印象は、全く別なものであった。出張ったその頬骨、ひしゃげた鼻、落ちくぼんだ眼、それらが集って形造るそのすべては日本の田舎へ行くとよく出会う男前の悪い百姓親爺さながら—。だがもしもこんな顔に教養というものが無かったなら、殺人でもやりかねないという、そういった貌だと、私がイスに腰を下ろし相手をみた瞬間に思った、それは第一印象だった。この顔には残忍性をも表現されている—のだ、と。

この感覚は、後になって裏づけされたことだが、彼のこの東洋的風貌は、彼がロシヤに侵入した韃靼人の子孫であるという史実だ。オゴタイに率いられてロシヤに侵入した蒙古人の子孫は、金帷がロシヤ平原から撤せられた後でも、サマラを中心とするヴォルガ流域に止った。今でもこの流域には蒙古人の血が濃厚である。サマラに生れたレーニンの血液の中に、蒙古の血は流れていた。次には直観的なその残忍性だが、さるソヴエートの要人が私に語ったところによると、レーニン時代の恐怖政策は、いずれもレーニンの頭から出たものであるが、それがトロッキイの名において行われた。そのため一般にトロッキイが悪者にされているけれども、実はレーニンのこれは発案だった。トロッキイはお人好しだからそんなことに頓着せず知らぬ顔でいるのだ、というのである。

彼の伝記を眼にする人は、誰しもその中にひそむ強烈な光彩を秘めた抱擁力が彼に首魁性を与え、それが彼の学識と相結んで、各々一癖ある革命家の操縦を許し、彼にあの事業を達成せしめたものでなかろうか。カーメネフでもルイコフでも、ルナチャイルスキイでもともかくも一かどの学者には相違なく、苦労の点ではその伝記についてのみならず、レーニンには決して劣っていないのであるが、その人間的魅力ではレーニンの足下にも及ばない。わずかの会見でそんなことが判るものか、という人もいるだらうが、前述の人たちはすべてレーニンの子分として働いてきたのであった。彼の在世中、頭の上がらない彼等のうちでただトロッキイだけは、革命直前まで理論的にたてついてきた。革命後もレーニンをたてたのは一重に理論上だけの話で、終生彼を親方とは考えていなかったようだ。

以上の会見記の中で、話題の点で記憶に残る事項としては次のようなメモが残っている。当時ソヴエート政府はエストニヤと講和条約を結び、しかもどういうわけか忘れたが、何かの代償として巨額の金貨を支払った直後だった。この点について私が

「貴国の政府は主義として帝政時代の国債を破棄したのに、何故あの大金を支払ったのか」と訊ねたところ、彼は笑いながら

「エストニアはソヴエート・ロシヤに対し友情を示した最初の国である。その友情に対してこれだけの金を払ってやる価値があったのだ」

といっておいて

「およそどの国のブルジョアジーでも、金よりほかに有難いことが解らない、困ったものだ」

と大口をあけてカラカラと笑った。

以上が中平さんを通じて得た彼のレーニンとの会見における印象記だが、手にした文献は相当に長い。その文意のエッセンスは、ここに書いたものに尽きるようだが安保阻止をめぐる緊迫した国内状勢や、パワーズ事件を中心とする国際状勢の微妙な今日、レーニンやトロッキイの理論やその実せん様式が必然問題視されている。この貴重な一文はこうした時節柄なんらかの示唆をふくんで興味深いことを私は感じ、ここに記してみたわけである。伝説化された偉大なるレーニンの字句の背後からまざまざと浮かび上ってくるその一個の人間性を私はまたと得難いものと考えながら、それはそのまま川柳の持味にも通じるものだとその感慨を新らたにした次第である。終りに中平さんの消息は、終戦以来往時の知人間に求めつづけたけれども今もってわからない。

酒
清
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

会長に推されて妻の針が錆び　小松市　関戸宗太郎
型通り一級酒の宴が済み　同
七夕へ賀状以来の墨をすり　同
そうも取れますと社長へ逆らわず　同
終電へ乗せて貰うて乗り過ごし　同
週刊誌丸めて紳士話題変え　同
減税の話解散近うなり　岡山県　横山一声
昇給の音頭を取って首になり　同
デモ隊のニュース聞きつつ田草とる　同
内職は趣味です豪華な扇風機　同
鉢巻をはずしてボーナスもらって来　同
時間表眺めて旅をした気持　美祢市　安平次弘道
篠竹で耳くそほって易者ひま　同
許す気の女ジョッキをぐっと干し　同
ブロマイドのように仲人出して見せ　同
鯛網へ観光客も潮にぬれ　同
キッス避けるために虫歯のことに触れ　宇部市　平田実男
番台は裸にあきた本を読み　同
芸の虫婚期の過ぎたのを悔いず　同
銀行の態度を変える程儲け　同
ボート漕ぐ汗をヨットに見下げられ　同
ホッパーのピケへやぶ蚊もとりっかず　熊本市　田口麦彦
月収にふれない恋のエチケット　同
冷蔵庫買ったら入れるものがなし　同
病む子にも財布の薄さ気にかかり　同
後戻りしてまでビールの念を押し　岡山県　太田蓑流
K・Kの名刺家族で株を持ち　同
孫の蚊を追うのが何かてれくさく　同
集団就職髪赤くした娘が戻り　同
もったいないが観光バスでくたびれた　鳥取県　鈴木村諷子
女房孝行さても哀れな男にて　同
豆腐屋も詩人だ喇叭吹いてくる　同
田のあぜにゴロリと横になる人生　同
誘惑をビールの泡に意識する　西宮市　森本猛彦
川風へ愛の言葉のよどみなく　同
エンジョイしたけれどハイティーンの悪びれず　同
ずばり云う友情を見る太い眉　同
洪水も出てるに蛙雨を呼び　貝塚市　杉本一鶴
ユーターンばかりしてて斗病腑甲斐なく　同
割烹着つけて女患の回復期　同
ソフトクリームのようなヘヤーへ初夏の風　同
鈴蘭を植えてひと待つ庭にする　大阪市　板東千代美

現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）出生地（六）職業（七）電話（八）自信の句一句（九）川柳以外の趣味（一〇）配偶者の有無（一一）川柳に手を染めた年月

★本稿戦前に多年好評を博しておりました「川柳家の戸籍調べ」の続稿ともいうべきものでありますから既載の方は省略しました。

（1）中島生々庵

（一）中島蓬太郎（二）生々庵（三）なし（四）大阪市南区三休橋南詰（五）佐賀県小城郡牛津町（六）医師（七）㉗三九八四ノ五（八）**浮き草は浮き草なりに花が咲き**（九）日本画・小唄・日本舞踊（一〇）有（一一）昭和十年秋

（2）武田北人

（一）武田勇宗（二）北人（三）なし（四）豊中市岡町南二の五二（五）富山県戸出町（六）薬品製造販売（七）②九六四五（八）なし（九）清元・囲碁（一〇）有（一一）昭和二年三月

（3）大野風柳

もう燃えぬ血をかきたてる写真が出　同
物干の月を見てたら消防車　同
盃もかえさぬひとになっていた　同
好きと好き平行線のままでいる　布施市　久米奈良子
色黒に生れて服をよりごのみ　同
靴下のやぶれ悲しいウソをつき　同
あこがれてスターと同じ柄を着る　同
バタバタとヒスを押さえている団扇　西宮市　末沢　花美
情痴のマスク見事に女ぬぎ捨てる　同
かりそめの恋と並んで見る花火　同

妹の新家庭

甘やかにオーデコロンの匂う部屋　同
本論に入った頃に時間切れ　兵庫県　遠山　可住
格上げの二等で腰の痛い旅　同
妻の愚痴テレビを入れて一つ増え　同
海見えて棚の荷物を盗られたり　同

再手術　一句

看護婦へ術後の垢の多いこと　愛媛県　大垣たもつ
倦怠期金魚が沈む程怒鳴り　同
汗すればルームクーラーより涼し　同
選挙より議長の方に金が要り　同
貧農の意見はアカにされちまい　青森県　木村　涼人
百姓を自負してデカい握り飯　同
矛盾した世と心得て年不惑　同
金策に出かけるバンド締めなおし　同
空き腹で鳴門の渦を見て通り　岸和田市　田端くにを
盗られましと盗られた子を責めず　同
子の付けた犬の名家内中が呼び　同
旅先で引いたみくじに旅は凶　同
病室の窓いっぱいに梅雨が降る　京都市　都倉　求女
貧しさをむき出し手首のゴムバンド　同
鈴虫が孵ったわが家のビッグニュース　同
行水のたらいへ夏がやって来る　同
くず鉄の音で中古車また止まり　鈴鹿市　吉田　俊和
交際費に落とす気前のにぎり寿司　同
うれしさが何杯食べたかを忘れ　同
よく儲ける露店埃の中で笑み　同
一心同体なのねとある日の妻のこゝろ　大阪市　堀　風船堂
坂町で友にまかれて得をした　同
ロカビリー教えた友をにくむ母　同
妬く妻の推理あたらずとも遠からず　同
童貞と処女が結ばれおめでとう　伊丹市　小川静観堂
七夕の星の運行狂いなく　同
貧乏神掛声ばかりへ耳かさず　同
自信などなくて別れのはなしする　松江市　田中　妖人
無理するなすなと手術の痕うずく　同
脱柵でネクタイを買う癒近し　同
朝顔に水やるだけの父となり　大阪市　宮原　敏子
棚一つ吊るに夫婦の気が合わず　同
平凡を美容院歯科で読みつなぎ　同

（一）大野英雄（二）風柳（三）浄机亭（四）新潟県新津市駅前通り（五）現住所に同じ（六）化学・技術（七）新津局一一一九（八）**雪自慢どしどし雪を川へ捨て**（九）読書（推理小説）・書道（自己流）（一〇）有（一一）昭和十八年の春頃

（4）山田菊人

（一）山田繁樹（二）菊人（三）なし（四）吹田市千里山二八〇（五）大阪市（六）会社役員（七）吹田㊳〇八六九（八）**骸骨が二つじゃらじゃら四疊半**（九）絵画（一〇）有（一一）不明

（5）岸田万彩郎

（一）岸田安之助（二）万彩郎（三）旧　漫洒楼（四）大阪市北区梅田町一九番地（五）大阪市南区（六）自動車部品製造（七）㉞四三八〇・七八九七・七八九八（八）**人のよい父へしっかりものの母**（九）写真・旅行（一〇）有（一一）大正十五年頃

（6）西尾　栞

（一）西尾巌（二）栞（三）百酒洞・水鶏庵（四）大阪市南区西賑町三〇（五）富田林市富田林町一六（六）資曙川食糧工業所代表社員（七）㉕五九六三（八）**温泉や座り羅漢に寝る羅漢**（九）絵画・テニス（一〇）有（一一）昭和六年七月二十五日

あくびまでして長尻のまだ居る気　和歌山県　寺杣　花車
焼き鳥をむさぼりストを批判する　同　同
はからずも女房と意見一致したため息ついても内職の手を止めず　岡山県　福田　祥男
田草とるとこ温泉の客が撮り　同　同
跡取り息子は只今昼寝中　同　護川　梢月
この海は故郷に連らなる足浸し　貝塚市　同　同
ガム噛んでみたが煙草を又つづけ　同　同
写されて写してあかぬ回復期　同　河原みのる
早乙女のスーツケースにハイヒール　兵庫県　同　同
農薬を覚えるだけに気が疲れ　同　同
鴉また悪い相談しているね　同　藤井　章道
反省を寝床ですれば眠くなり　松江市　同　同
結婚という切り札で目をつむり　同　同
美しく生れただけで食うてゆけ　同　白石　良圭（由美改め）
婦人会また温泉へ行く話　大阪市　同　同
地下鉄の切符で生きる人もあり　同　同
金の要る恋とだんだんわかって来　同　同
子を蚊帳へ又ひきもどすママの夜　岡山県　楢原　万女
愛情を一人占めして枕蚊帳　同　同
文化とは太陽熱で風呂が沸き　同　同
ポロシャツの夫に未だある若さ　児島市　伊丹柳瓢子
お師匠が弾けば三味線丸う鳴り　同　同
あほらしい程の儲けでくたびれる　同　同
老眼鏡がピタリ同年兵同志　大阪市　米浪進之助
身に覚えあり奥伝に足を停め　同　同
いい時世三人寄れば飲む話　同　同

北海道一周観光団添乗三句

舌をかむような地名にアイヌの血　竹原市　山内　静水
放牧の山羊へ石狩つきぬ青　同　同
旅はよし連れよしみる酒の味　同　同
勇退も近い月給額になり　大洲市　横田　放人
レディファーストは好きな人にだけ　同　同
堅パンの員数かぞえ水防課　同　同
叱られて見てこれが孤独かと思い　堺市　沢田　美喜
夫婦して水虫に挑戦し　同　同
何も持たずに見舞い来て欲しく　同　同
猫の手も借りたい猫の仔手がかかり　岡山県　杉本たつよ
気兼せぬ嫁は素直に昼寝する　同　同
文化めく田植足袋まで揃えられ　愛媛県　河本南牛史
農繁は髭伸びたまま気にならず　同　同
八十八余命は云わずめでたがり　須崎市　高橋　蟠蛇
夏枯れの店の留守番ちとさびし　同　同
貧乏は知らないような喋りよう　滋賀県　土守　蜻蛉
婆さんの乳房に替えて寝かしつけ　同　同
食べるだけですと云いつつ溜めており　愛媛県　竹田　青園
夏に足袋はく妻子供よう産まず　同　同
張り切って女子大デモの先に立ち　兵庫県　斎藤たけお
耕耘機の音に病人悩まされ　同　同
明日試験と云うに歯医者の待たせ　奈良市　内海　敬太

（7）山川阿茶

（一）山川初子（二）阿茶（三）なし（四）大阪市南区二ツ井戸町二三（五）大阪市東区淡路町二ノ四三（六）医師（七）㉕四五四三（八）**男みな阿呆に見えて売れ残り**（九）邦楽（義太夫・小唄・哥沢）小鳥・花・旧劇（一〇）無（一一）昭和二十八年夏

（8）山田凌甲

（一）山田良行（二）凌甲（三）なし（四）富山市千歳町四一（五）満洲営口（六）医師（七）富山②五二八三（八）**下を見て暮せと上にいるつもり**（九）写真（一〇）あり（雅号みどり。いやいや乍ら夫唱婦随の形）（一一）昭和二十九年五月

（9）後藤梅志

（一）後藤喜四郎（通名房三）（二）梅志（三）鬼子（四）大阪市西成区玉川新町通一の一一（五）茨城県水戸市常盤町（六）UB食品店主（七）宇治電ビル㊱一二四一（八）**元日のどこかで笑う声がする**（九）観世流謡曲（師範）（一〇）有（一一）昭和十年三月

（10）甲斐田櫻里

（一）甲斐田大吉（二）桜里（三）克三（四）熊本市桜町三〇（五）現住所に同じ（六）建築材料販売（七）熊本②一五二六・五八五四

女学生胸のふくらみへ徽章　つけ　同
寒村へ電波に乗ったジャズが来る　貝塚市　向田　三枝
お別れのコール・コーヒは早く溶け　同
通り魔が一そう暗い露地にする　和歌山県　木下　一休
パラソルで日やけを防ぎ安保阻止　同
貧乏ゆすりしいしい専務小言いい　笠間市　松本　忠三
過去帳を開き住職プランたて　同
なめられぬ程度に子供を叱っとく　大阪市　叶岡　史風
スリップの音が都会を夜にする　同
すうどんで選手権試合見て帰り　貝塚市　辰巳忠太朗
風鈴をやたらにつって下宿なり　同
稚児さんへ平安朝の顔を画き　羽曳野市　見本　泉洋
お見合の化粧へ母も若返り　同
ひょろ長くのびたわが子に見下ろされ　宮崎市　野口卯之助
かびの生えそうな話を百歳会　同
夜行汽車夫婦無邪気な肩をよせ　泉大津市　高津　紡毛
胃の痛みただ習慣を喰うている　同
お化粧にくずれを見せぬ女秘書　西宮市　樋口　寿栄
平凡に生きて女に早い老い　同
田植がすんで病人もホッとする　鳥取市　近藤　昭夫
居候を重宝にして農繁期　同
共稼ぎ産制止める程貯まり　大阪市　本多　清人
この頃は寝るにも薬いるという　同
出世せぬ秘訣習ったわけでなし　大洲市　冨永　健朗
スピードに牛反抗の歩みぶり　同
せんべいの味を愛して庶民なり　五条市　尾来　絵見
牛売って無口の父の背が丸い　同
石垣を少し残して古戦場　玉野市　小谷　仙山
数学に弱い頭もホームラン　同
南極で犬死す皮も名も残し　青屋市　里田一ン十
自信あるのが定刻に来てすわり　同
出稼ぎの父の荷物をうばいあい　笠岡市　出原　真奇
想像は御自由ですとそっけなし　同
叱られて子供猫の子返しに来　大阪市　堤　勝三
週刊紙みやげの中と出してくる　同
パラソルが二ついりそうな太りよう　宇部市　神田　豊年
病院のわが子へ会いに晴着着る　同
一級酒酎の気焔に及ばざり　竹原市　杉原　愛鳩
魚釣りのトランジスター株が鳴り　同
土砂降りへ郵便屋さんだけが来る　山口県　藤本　星二
大水の後で町費の酒に酔い　同
人口の過剰再認識する浜辺　枚方市　篠原佐代子
ラジオ大きくしといてアパートの口喧嘩　同
へ理屈も親父を負かす年となり　倉吉市　奥谷　弘朗
近代化大工の音まで変って来　同
好物の豆腐カロリー考えず　倉敷市　小倉美音子
貰われた猫の消息気にかかり　同
手放しでのろける酒がうまいなり　下関市　藤田　雪峰
恋人の持ちものみんなよく似合い　同
かき舟が停電するほど増水し　石川県　高山　清勝

（八）柳の芽馬の屁かぬとこで伸び（九）盆栽・投網（一〇）有（一一）大正五年六月

（11）大山竹二

（一）大山竹治（二）竹二（三）双竹亭（四）神戸市生田区中山手通七の三四（五）神戸市（六）銀行員（七）なし（八）花火黄に空の重心全く西（九）スポーツ一切（一〇）有（一一）大正十二年秋

（12）櫻井六葉

（一）桜井慶二郎（二）六葉（三）なし（四）石川県鶴来町本町二丁目ワ一三六（五）現住所に同じ

コクヨ
便箋

長男誕生

かじられる脛も持たずに親となり　同

冷飯を食べてもせっかち汗をかき　倉敷市　藤岡　萌芽

皮算用だけなら妻も如才なし　同

ほたる火の昔の夢をなつかしむ　大阪市　稲森けい女

あじさいの色こぼれいし退院日　同

コーヒーが欲しいと日本から手紙　桑港市　児玉　不村

腕時計必ず見せて写真撮り　ホノルル市　並木東田楼

ABCも知らず人並み帰化して見　ホノルル市　蓮池　風草

銀行員金に埋まりうどん食べ　大阪市　山田　蛙水

寝不足の眼に焼酎がぶらさがり　松江市　岡崎　祥月

田草とる農婦不足のない生活　松江市　岡崎　雪美

川開き花火と別にビール飲む　岡山県　藤原　秋月

釣れている舟にすまない波をたて　愛媛県　菊池喜与史

五月晴れ笑った声がはね返り　玉島市　井上　旭峯

将来の夢を見ているレース編　西宮市　鵜飼　鮎子

要領がよくて療養まだ続き　羽曳野市　加登章の介

テレビ今佳境うるさいコマーシャル　京都市　大久保和三郎

子をあずけられて子守りのむっかしき　松山市　沖原　光雄

チョッピリと米の値上げも選挙用　笠岡市　谷本鈍愚坊

大臣も地盤のボスに捻られる　豊中市　土井　北桐

長梅雨にかんづめ料理の日曜日　芦屋市　三上　芙路

解雇斗争せめて投書で応援し　大阪市　西本　保夫

君の歌朗々として山の朝　出雲市　森山　壮

手のまめをかくさずぐちも云わぬなり　西宮市　藤田一本歯

人間が恐いと知った日の失意　金沢市　山本　木象

魚群寄す騒ぐ漁舟に夕陽さす　八代市　永松　道雄

焼酎を飲んで元気と友便り　五所河原市　盛　竜蔵

過去なくて未来もなしかわびしいネ　八尾市　吉田　博一

灸あとのないのも祖父の自慢なり　和泉市　末田　晃康

心臓まひよい往生と羨まれ　大阪市　中西兼治郎

襟足に膏薬のあとあり仲居くる　大阪府　橋本　裕邦

全学連やっぱりふるさとよい所　羽曳野市　坂東よしあき

学歴が邪魔になってる職に生き　大阪市　福井　竜昭

盲目のかすみを食って生きる恋　香川県　三井　酔夢

忠告がずばりまともで腹が立ち　小松市　村井　城南

革バンド切れてリーダー過失致死　茨木市　高木繁太郎

登山口に雨雨雨の日の長さ　山形県　菊地　白葩

職安窓口

酒の息なだめ帰すも職安員　大阪市　本村　文福

通り魔に一理あるよな夏姿　布施市　片上　光福

夏の夜はまだ眩しいかサングラス　川西市　佐伯　九紫

おしきせにうなぎも添える土用丑　大阪市　藤冨　淀月

賽銭へ小銭を探すハンドバッグ　布施市　坂上山椒坊

よくしゃべる親の子音痴一人出来　小松市　月田北海坊

女中抵抗瓦斯一ぱいに湯を沸かし　神戸市　吉田　隆史

タクシー代皆勤賞より高くつく　大阪府　佐々木章夫

将棋相手は二人の孫で肩が凝り　河内長野市　森本黒天子

潮花さんへ

ひとり見る月が悲しいものになり　岡山県　若柳花乃子

知らぬ友しょうかいだけでかえり行き　大阪市　西口　竹志

杖ついて選挙も出来る市民権　ハワイ　宮政　周防

お見合・御婚礼の
写真は工藤
肥後橋文交点西電・土二九〇〇

（六）会社重役（七）鶴米六二・五四五（八）賞めてくれる句が人によって違う・それでよいと思っている（八）多過ぎて困る方（一〇）有（一一）大正七年

（13）北川絢一朗

（一）北川絢一朗（二）絢一朗（三）なし（四）京都市中京区夷川通烏丸西入ル（五）滋賀県愛知郡泰荘町目加田（六）優勝カップ・バッジ販売（七）㉓五二五七（八）**逢えた夜の女が障子しめにたち**（九）ひとさまの書画道具の類を拝見すること（一〇）あり（一一）昭和七年六月

（担当・西川　晃）

× × ×

金泥集

課題「山」

選乃葭生麻

次回題「やり手」〆切・九月末日

診療所山が深うて医者が来ず　阿茶
持山の下刈りにゆく農閑期　同
道具建おりんの出になる深い山　同
先生は住込み山の分教場　同　きさ子
山二つ貧しい村を抱きつづけ　同
展けゆく山へマイクも登って来　同
山へ来てぼんちうれしく炊かされる　同
アルバイトしてアルプスへゆくっもり　カネ女
山だけは行くな行くなと父の声　同
ヤッホーを叫んだ頃をなつかしみ　一栄
山の子へ胆を冷やした今日の記事　同
掃除夫を泣かせて花の山が暮れ　万女
遭難の山へきれいな虹が立ち　同
禿山を一つ残され孤児となり　奈良子
夏山のニュースへ母は眼をふさぎ　同
国境を越えて見なおす故郷の山　たつよ
荷になったオーバ取り出す八合目　同
山登りやっぱり歳は争えず　白美
山に来て二人の愛は死を選び　同
方言もこの山峡を境にし　梨花
踏破して山の威厳へ皆無口　同
持山の広さ役所へききにゆき　若菜
山男山の機嫌にさからわず　同
海と山意見まちまち子沢山　清子
見おぼえの山肌見えて降り仕度　同
登山道なめに高く高くなり　美喜
親不孝を詫びる凍死体のメモ　同
吊橋へ来た歌声はみんな止み　春栄
山あいを今バスが行く土煙　同
山かげもブルトーザーで分譲地　知恵
荒縄をめぐらし山の初木の子　同
山で果つ運命星が美しい　都詩子
遭難の山へもう一度行く若さ　同
夕立が来そうかけこむ山の家　徳子
デッキにもせまって来るか山の色　同
山彦のこだまへお茶を運んで来　美舟
夏山のニュースへ吾子の一周忌　同
山の歌心もはずむハイキング　ちあき
夏山に邪恋を捨てるつもりで来　酔夢
草分けてお山の上の墓まつり　美代
故郷の山埋立地へ削ぎ取られ　美音子

出雲支部のこと

尼　緑之助

昭和二年に創立した出雲支部は三十五年の歴史を積み重ねて来た。

支部活動には若干の起伏はあったが、続いて来たことだけは事実である。

創立当時は地方柳壇のぼっ興期で、大社町を初め近隣にグループがぞく生し、その交流も盛んであり、従って競争的な意気込みが高かったと思う。

出雲大社は出雲市の隣接地大社町にあるが、距離から言っても出雲大社は出雲市にあると思われがちである。何れ合併すれば出雲大社市と命名すべきだとも言われる位だから、混同されるのも当然だと思われる。

尾添雷相と二人でよく大社町へ出かけた思い出がなつかしく浮んで来る。その大社も現在では鳴りをひそめているのはさみしい。

扨現在支部を形成しているメムバーは第一期（創生期以後）

原独山、森山荘、加藤虹路

中期、久家代仕男、石橋万古人、野村岬月、佐藤義之

戦後、原章峰、藤原重信、野々村一平、江田白鴎、前田白菊、山本朱紅、竹内李朋、枡楽やすを、竹原運平、板倉白揚。

支部の推進力は不朽洞会員の**原独仙**、**久家代仕男**、**野村岬月**と**私**、運営の幹事役は**原章峰**、**野村岬月**、**竹内李朋**、背後から押し上げるのが**森山壯**。

一環のグループとして平田市に**万古人**、**代仕男**を軸に句会活動がある。

又中央病院のだるま川柳会があったが目下沈黙中。

勿論、前記氏名の他に休火山的な人や初歩の人達もあるが、省略する。

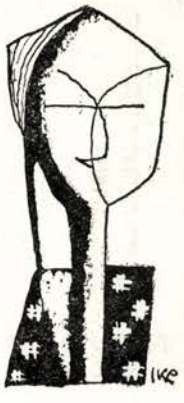
昨年のいつ頃からか句会もとぎれがちとなり、会報「いずも」一寸休止の形を取ったり、少し低調気味が続いたが、最近軌道に乗ったので、又明年の卅五周年記念行事も計画に取りかかり大いに意気込んでいる。

近く運営方針の確立と共にすべて明年の行事に結びつけたいと思っています。

（川雑支部のページ）

ニッサン　セドリック・ダットサン　ブルーバード
兵庫県下特約販売店
尼崎自動車株式會社
専務取締役　若本真彦

句評リレー



岡山市 武部香林
京都市 田中烏雀
西宮市 河相すゝむ
大阪市 高鷲亜鈍

○ **悲しみに勝ったら無口になりました**　蛙眠子

香林—悲しみにうち勝つまでのたたかいが無口にさせたと、いうのだろうか。「勝ったら」のたらに引っかかった。素直に、勝ってとした方が調子よく、句意にも差支えないと思う。実感句であると思うが、悲しみのために、無口になってしまうという、自然な観方もある。云い勝ったあとの淋しさは、自分も経験したが、この句の勝つは克服の克つと見るべきでそうなると少し意味を異にする。デリケートな心境句だけに、わずか十七音に盛り切れなかった感がある。

烏雀—普通ならば明るくなりそうなものを、逆手に無口にしてしまった。そんな場合の無口には一層深刻なものがあって、作者はその感慨を表現したかったのだろうが「たら……なりました」等と言葉調(この流行も色あせているが)でやったので、よそよそしく迫力を著しく殺いだ。その為、何か知ら作り上げた感があって、取材とは逆に真実味に乏しいものになってしまったと云う感じがする。

すゝむ—意識して「克つ」でなく「勝つ」としたのでしょうか。単なる悲しみによる無口でなく、その間の抵抗、葛藤と云った心の動きが、勝ったら無口になりました、の表現になったものと考えます。なりました、で勝つには勝ったが遂に悲しさを克服出来なかった淋しさと云ったものがただよっているのを感じますが、香林さんの云われる様にこの十八字の破調だけでは盛り切れなかったうらみがあるように思えます。

亞鈍—以上でこの句評は尽きている。強いて書けば前記三着の句評に突き当ってしまいそうである。〈勝〉と〈克〉の一字の使い道。〈勝ったら〉の字余りを〈勝って〉の訂正(香林説)賛成。一字一句慎重に扱って欲しい好例。

香林—実感句として一応考えてみた。深い悲しみの境地から、諦らめとか悟りの領域に近づいたときの感情を勝つと表現したものか生か死かという、ヨーロッパ哲学の、ぎりぎりまで苦悩の糸を伸ばし切った成果のものかは判らないが五月号同氏の句

病床の白さがたまらなく淋しからも病気の「悲しみ」と想像される。諦らめといっても簡単に到達はなし得ない場合のその境地に達するや周囲のなぐさめとか、親切なもろもろの声でさえ煩らわしい雑音でしか無くなり、無口の殻にこもっていたという意味と解する。この様な心意を路郎先生も汲みとられたのではないかと思う。だが各々の評にある如く句の構成に不備のある点は否めない。

烏雀—すゝむ氏に指摘されて、文字の使用の慎重について実は見逃がしていたことに気付きましたが、この場合「克」の意味であったのではなかろうか、又香林氏亜鈍氏の説の「勝ったら」を「勝って」にすることは、音律上、すっきりとしてよいが、この「たら」は「漸く克ったと思ったら」の意がつづめられているので、字数に拘泥することなく、原句のままとしたい、又作者を知り、その作例を検討すると一層句が生きることは、香林氏によって、この句が精彩を増すことを感じたが、この一句をのみ凝視してみると、どうも新鮮味に乏しく句の生命力は弱いように思う。

すゝむ—「勝ったら」を「勝って」とすることには烏雀説に賛成。「勝ったら」の気持が下五の「なりました」にもつながって悟りよりも諦めに近い気持を詠ったものと受け取られ、その意味で原句のままがいいように思います。香林さんの作着の作例により一層その感を深くします。余談になりますが十七字短詩特に人間讃詠のかった川柳ではその一句だけでは味い得ないものが、その作着一連の句によって初めてそこにただようニュアンスと云うか綜合された味いの好さが出て来るのではないかと思っています。その意味で各人の句集がもっと出ることを望んでいます。が現状では仲々困難な問題でしょう。柳誌、句報をもっと読めば好いのですが不勉強なので手っ取り早く作者に直接ふれる機会として句会に出来るだけ出席することにしています。句会の是非、功罪論は別として句会をもっと尊重すべきだと思います。

亞鈍—勝つはスポーツその他の勝負ごとなら競輪でも、パチンコ麻雀のように主として外部の出来ごとの場合、克つは、克己、克服など人間内部の戦に向けられた場合に使われるものなれば、「悲しみ」と云う人間内部の感情に克つことだろうから、ここは克つでなければいけない。

たらと—っては、前着の場合は過去完了、後着の場合は過去完了の進行形とみた。そこで悲しみに克ったらと一区切りつけて無口になりました、とするか、悲しみに克ってそのまま(悲しみを押えたままで)無口になると解するかで句意が多少違ってくるようだ。何れにしても心境句故に作者の意図を尊重せねばならない。然し作者が勝を克の間違と許容すれば、克って・・とした方が作者のモチーフが出るのではないかと思われる。

勝ったら、無口になったというイロニイがハッキリ出すぎて不自然であるのは、初めに烏雀氏が、「取材とは逆に真実性に乏しい」と指摘した点と同じ意見になる。

悲しみに打ち克ち打ち克ちして無口になっていった。とつづけて

みると、この句は自然に流れてくるように思うが、どうだろう。

句評の場合、一句立では諸氏のお説のように批評が完全にいかぬ憾みがある、のは同感だ。しかし作者の方は一句位と、手を抜いたり、ゆるがせに出来ないことは当然。

それから、香林氏はこの句に必要以上の思惑をもち過ぎ、些か、作者の感情に溺れたきらいがあるが、句評の立場にたてば、それでは困る。自分丈の感銘に陥入ってしまうからだ。

○

ゲイボーイ赤い財布を出して買い

由美

香林—ゲイバーなる飲み屋が、いつの頃から出現したかは知らない。或青年が「自分はそんな厭らしいとこへは、行った事ありません。大体若い者は遊びにいきませんね」という。

ストリップと同じく年配のおっちゃんの御趣味とか。アプレ商売もここ迄来ると感情喪失、無用の長物だ。単にこのような社会の描写は余り共感も湧かないが今少し批判のメスを入れて欲しいと思う。

烏雀—ゲイボーイの実態については深く知らないが。女性風な好みのボーイ。

それが赤い財布を所持している。それだけでは、当然のことで刺戟に乏しい。新しいものを取材したからと云って、新しい句にはならない。又下五の表現は、過去のもので、それが為、一層陳腐にしてしまっている。新奇な材料を古風な表現にしても、アナクロニズムの面白さは出ない。

すゝむ—ゲイボーイと云う一つの時代の新しい題材なのですから、もっと痛烈な描写であるか、批判を含んだものでなくては何も残らないと思います。このままでは単なるゲイボーイという題詠句にすぎないと思います。

亜鈍—大阪は宗右ェ門町のさる一流バアーに在るそうである。ビール一本倒しても二人で大きく一枚は用意してかからねば面白く遊べぬそうな。

洋装、和装の女形（おやま）がサービスするのである。オカマといったグロ的ないやらしい感じが全然なく、実に女以上の女らしさをもっている。女優では歌舞伎や新派劇の女がつとまらぬように、芸者のお色気などは女形には叶わないのである。そのようなお色気が、首筋から襟元、胸から腰の線まで、危く乱れ流れ焼きつくような瞳に悩殺される、といったタイプは明治時代を復古する男に多いが、しかし現に、流行の兆をみせている芸者ボーイを抱えたバーの新戦術だった。

香林—なる程大阪は宗右ェ門町の一流ゲイボーイともなれば、あっぱれ名人芸が拝めるわけだが、新戦術も僕に話した青年によると、「友達が一人バーにいるが、ちょっといけます」の程度では、寒気がしそうだ。

女性としての作者に無理な注文かも知れないが、せめて名女形の至芸？ を句の上に見られるならば別問題だ。表現に新味を味わえなかった事は烏雀氏と同感。

烏雀—亜鈍氏によってゲイボーイなるものの実態を教えられた。句評から飛んだ拾いものをして有難かった。話がゲイボに集中するが、香林氏の様に潔癖なのもよいが、変化を好む意味から其の存在は面白いと思う、かかるものの似たものは昔からあって名称も違うが、戦後「ノガミのオカマ」等と云っているのには疑問をもっていた。昔は陰間と云って、オカマはそのもの又はその行為の謂であったからオカマと呼ぶと、変に聞こえる。

ゲイボはカゲマとは生態が大分異うと思うが、これがシスターボーイやカゲマともちがった芸夫（？）であっても、この句に対する見方は変らない。

すゝむ—ゲイボーイ生態論になった様ですが、この句だけでは柳多留の江戸考証的な面と軌を一にしたものになると思います。「赤い財布を出して買い」の反対に財布はやはり男物だったと皮肉る手もあるかと思います。何れにしても皆さんの云われる様にゲイボーイの新語だけで句そのものには新味が感じられません。尚香林さんは作者を女性に見ておられるようですが、句からは何れともわかりませんが作者は男性ではなかったかと思います。又余談になりますが雅号の性別に迷わされる場合がよくあるようです。性別明示の要否、方法の問題についてはどうなんでしょうか。

亜鈍—すぐお隣りのすゝむさんに話をもっていくようですが、彼女（彼氏といえば怒りますよ）に男物の財布を持たして皮肉っていけません。そういう手を川柳だからといって用いるのは彼女の実態を知らない皮肉り方で、それは貴方だけの観念に遊ぶ皮肉り方というもの。万一それで川柳にするとすれば、その川柳も観念の遊戯ということになる。警戒すべきことです。再び彼女の生態を述べますが、彼女がお店へ勤めている時だけ女に化けているのと違います。家に居ても、寝ても起きても、銭湯こそ男湯だが美容院に通うし、立居振舞、起居動作凡ては女性の生活をしています。殊に一流のゲイボーイとなれば、女性のもつ高貴属は、指環でも、ネックレス、イヤリングなど、とても内の女房に買ってやれないものを肌身につけているそうです。まして赤い財布ぐらいはヘッチャラというもの。

この句から痛烈な批判とか、描写を要求しなくてもよい。スケッチ程度でその時代に於ける記録としての効果だけで充分です。批判とか、社会時評は読む側から為せばよい。川柳は、川柳自体の中に諷刺、穿ち、などの批判性を持たねばならぬという約束はどこにもない。現象を軽くスケッチして記録するに止めて置くだけでも川柳である。古川柳にはそんな句が多いのと違いますか。

或程、時事吟とか社会吟は時代という大きな壁に書く楽書でしかありませんが、しかし、それはそれとしての役割があるものです。

この句が古川柳的というよりも何世紀先の人から見たら昭和三十五年の古川柳となるでしょう。その為には、斯ういう特殊な存在、人間、言葉など、資料をどんどん提出して置けばよろしい。

私個人としては、しかし斯ういう句には興味が持てない、ということはお断りして置きます。ゲイボーイには少なからず好奇心があるとしても……デス。

（担当・真鍋一瓢）

ヒゲそり後に…
●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン
配合
明色
男性
200円
アストリンゼン

ハワイ支部

写真説明　十四万一千の小学児童を代表してアイク大統領を空港に迎え東西センター促進の一仙袋を贈つた徳門編と代表者。

アラスカ港からマユラへ飛び、更に台湾から沖縄朝鮮と親善旅行を続け、到る所に得意の外交手腕と、独特な笑顔とによつて成果を収めて来たが、今後の旅行の最大関心であつた、日本訪問があの結果に終つた事はどんなにか彼を失望させた事であろう。

然しその失望のモヤモヤした気持も、この日ハワイの土を踏み、その和やかな気候とアロハ精神に充ちた官民の大歓迎を受けた事によつて吹飛んでしまつたのであろう。大統領はいつもより一層晴れやいだ、ニコニコ顔で一般の歓迎を受けた。

空港での歓迎プログは、凡てが溢りなく運められたが、その中にハワイ東西文化センター（当地ハワイ大学内に新設される東西文化思想の交流を計る施設で先頃中央議会で三千万弗の予算通過、建設基金へ寄附する目的で、ハワイ全島十四万一千名からなる小学校生徒達が集めた一仙献金の一部をそれら学童の代表として各国人系（米国、日本、比律賓、中国、朝鮮）から選ばれた、六人の子供の手から大統領に贈呈する一シーンがあつた。

僕はこの光景を当夜テレビで見て感じた事であるが、さることの式ばつた知事の歓迎挨拶や、閲兵式などの何れにも優つて、大統領の旅情を慰めたに違いないと思つた。

周知の通り、ハワイは水平の宿願が叶つて、昨年五十番目の州の仲間入が出来、一躍檜舞台の脚光を浴びたわけだが、特に吾々住民が高調しかつ誇りとする点は、此処に住んで居る六十余万の各国人種が、何の偏見も排外もなく、協調融和の内に生活して居ると言う事で、この度東西文化センター建設基金の贈呈式に五人の各国人系学童が選ばれたと言う事も、ハワイに於ける各国人種共存共栄の活きた実例を米国内は勿論、世界に向つて示した事になつたと思う。

殊に吾々日系人を喜ばした事はこの学童六人を代表して、大統領に贈花の挨拶を述べたのが、徳門アネット栄子ちゃんと言う九才になる日系少女で、テレビで見た彼女が少しも憶する所なく、〝ミスター、プレシデント〟と可愛いい声を張り上げて、堂々とやつてのけたのは何とも言えない感激の場面で、僕は実に涙の出る程嬉しかつた。

献金の入つた袋の贈呈が終るとアイク大統領は、あの童顔に溢るる許りの愛情を注らせて、まずアネットちゃんと握手して礼を述べ続いて整列して居る代表一人々々の頭を撫でたり、握手をしたりその上に優しい言葉をかけて彼等の労を犒つた美しい場面は、観衆の感激を一段と高まらせた。

数日後アイク大統領はハワイでの休養を終えて、華府に帰還されると直ちに、アネットちゃんに署名入りの礼状を送つてよこしたと言う記事を読んだが、米国の伝統である民主々義は、かかる場合に作らず巧まず、極めて自然に実行されて居り、ややもすれば物質万能の様に見える米国社会の各層には、まだまだその底を貫く自由平等の清い思想が流れて居て、それが米国今日の偉大をなして居るのであると思う。

布哇の誇り

築山快夢起

去る六月廿日東亜への親善旅行を終えて帰つて来た、アイゼンハワー大統領を迎えた、ホノルル空港の光景――その日は朝からの快晴で南国の太陽はサンサンと輝きコオラウ山脈から吹きおろす風も心地よく、誠にアイク日和とも言うべき申分のない日であつた。

三つの記念

羽佐間柳葉

麻生路郎先生主宰の川柳雑誌が、第四百号を迎えた事をお祝いするにあたり、創刊当時の大正十三年今から丁度三十七年以前を追想して見たいと思う。何事に依らず創業に伴う困難は付き者であるが、麻生先生が世の難事業中の難と言われる雑誌経営の困難を見事一服して今日の隆盛を見るに至つた事は、師が不くつの勇気と忍耐の賜であると言う事以外に言うべき言葉はない。僕は布哇支部の一人として四百号の発刊を祝うと共に、麻生先生の御健康を念願して止まない者である。

今年は川柳雑誌の記念号発刊の外に、日米修好通商百年祭と言う年でもあり、又布哇でも第一回官約移民の米布より七十五年になる、その記念祭を行うと言う二つの目出度い年でもある。歴史を一世紀の昔に遡って当時を少し覗いて見よう。一八六〇年といえば米国では南北戦争の始まる一年前、日本では万延元年日本歴史の近代史に有名な桜田門外の変のあつた年。「落花粉々雪粉々」の詩で名高い時の大老井伊掃部頭直弼が、幕閣の俗論派を斥け断乎日米修好通商の道を開き、その批准書交換の為に遣米使節として時の外国奉行新見豊前守副使村垣淡路守等の一行が首府ワシントンに乗り込み、時の大統領ブカナンに謁見して通商条約批准書を取交してから今年が丁度百年になる。百年前遣米使等の心の中では物質的文明は彼等に遠く及ばざるも、精神的文明は日出ずる国の武士道の華、我等に勝る者はないと誇らしく、頭にチョン髷を頂き、腰には家重代の自慢の大小を手挟み、肩怒らして首都ワシントン市中を闊歩した姿こそ当時の米国人の眼には如何に珍妙に映りし事か微笑ましき限りなりと言いたいようである。

布哇では所謂元年者の上陸は別として第一回官約移民として一八八五年明治十八年二月八日東京市号にて来布してから今年が七十五年祭を催すと言う目出度い意義ある年に当る。

今や布哇の日系人の各界への進出と活躍は、正に刮目すべき者がある。米国々会下院議員を始め州大審院長、州裁判所の判検事、各省の局長、上下両院議員、又は大学教授から医師弁護士実業界に至る迄、各界各層に亘り今や正に人材百花爛漫とも言うべき壮観である。

然し今日この日系人の絢爛たる生活を見るにあたり、過去七十五年前の移民哀話草分け同胞の辿りし茨の道を想起せねばならない。子女の教育に己を犠牲として悔いなかつた先覚者達の偉大なる功績に対してはこの記念祭を祝うにあたり、草分け同胞先亡者の霊に満腔の感謝を捧げると共に又自己と言う者を反省して見るべき時ではあるまいか。

ハワイ官約移民七十五周年記念

古川魔花麗

ハワイに日本人が移住した歴史は可成り古く、西暦一二七〇年（文永七年）から始まつており、ハワイの日本人史実研究者は移住状態により左の如く分類しております。

一、漂着時代（一二七〇年）
二、元年者時代（一八六八年）
三、官約時代（一八八五年）
四、私約時代（一八九四年）
五、自由時代（一九〇〇年）
六、呼寄時代（一九〇八年）
七、禁止時代（一九二四年）
八、戦後時代（一九四一年）

漂着時代から今年まで、六百九十年の歴史を持つておることになります。この間に文献として伝つておるものだけを記述しても優に一本をなすだけの材料があります。

今年は前項第三番目の官約移民が来布して丁度七十五周年に相当しますので、これを記念して官約移民七十五周年記念祭を盛大に催すことになり、高松宮様御夫妻を招待し、日本政府は特に記念切手を発行するなど、ハワイ日系人にとっては最も記念されるべき年であります。

ハワイ日本人史の内で最も話題に富んで居るのは私約時代と呼寄時代ですが、これは又の機会に譲り今回は官約移民時代に就いて書いて見ましょう。

官約移民は一八八五年二月第一回船東京市号で移民九百四十八名を移住させたのを初めとして引続き明治二十七年三月三池丸第二十七回船を最終として日本人九千三十二人が渡航しております。

官約移民は一ヵ月十五弗の賃金で二十六日働き、三年の契約を結んで渡航したもので渡航費は雇主の負担で、労働者は賃金の内より一割五分を差引かれ、万一の場合の帰国旅費として積立てさせられたものであります。官約時代の日本人社界の出来事としては、ハワイ憲法改正による参政権運動、王朝革命に日本政府軍艦派遣等がありますが中でも日本皇室とハワイ王朝との間の秘話は実に興味あるものと思います。

一八八一年（明治十一年）時のハワイ国王カラカウアが世界周遊の途次日本に立ち寄った時の話であります。或る日カラカウア国王は何人にも知らせず、唯一人微行にて宮城を訪い密々に天皇陛下との謁見を乞い、嘗てはハワイ王嗣となるべき王姪カイウラニ姫と山階宮定麿王との婚姻話を持ちかけたのですが、日本政府もこの話には全く驚き種々協議の結果日本政府は後に体よく之れを謝絶しました。

当時カイウラニ女王は僅か六才の幼女であったのですが、当時のローマンスの美しきヒロインであった王女は明治三十二年三月六日、芳紀僅かに二十四才で蕾のまま散り長えに世人にその薄倖を嘆かれたものであります。

今にして思えばこの婚姻話が成功して居たら世界地図の上でハワイの色が塗り替えられていたかも知れないでしょう。

アンテナの町

ホノルル

市岡曉舟

昨年米国で五十番目の州に昇格した布哇の人口六十二万五千と言うのが最近発表された数字で、この外オアフ島（ホノルル市所在）には駐在軍人及び家族約十二万五千が住んで居るので総計七十五万内外のものが泣いたり笑ったりして暮して居ると言うのが、その実状であります。

布哇は世界中のあらゆる人種が住んで居り、そこには何の摩擦も偏見もなく、見かたによっては人種の展覧会のようでもあり、また各国人種のメルティングポットとも言われて居る位です。

この七十五万の各国人を統轄する州政府の機構は、すべてホノルル市に集って居り、市の人口が約三十五万ですから、日本の広島市位と見て間違なく、この緑の町、椰子の町、フラの町、それに最近にわかに目立って来たのが、アンテナなんですから、アンテナの町とも言えましょう。

ホノルルには民間経営で娯楽本位のラジオ放送局が十局もあり、この外に三つのテレビ放送局を持って居ます、ラジオの方は日本語番組で人気を呼んでるのが一局、日本語放送を数時間やってるのが四局、テレビの方は毎週日曜だけ日本語番組を二三時間放写しているのが二局あります。

話が横道に入りますが、最近のホノルルは各方面に滲って面目を一新しつつあり、その中で最も注目されているのが都市計画の線に沿った建物の取壊しと、山手幹線の大工事でありまして、工事の進行につれ附近住民を驚かしているのが、住宅不足問題である。この住宅不足の急に応じる為、ここ四五年市内各所に新築されて居ります住宅やアパートの数は驚くべき数字に達して居り、中でも大アパートやホテル建築は大抵貴本家の共同出資によって着手され、有名なワイキキを始めとして、市内の空地と言う空地は勿論、郊外の崖や丘地の急勾配の地所に至るまでブルドザーやハンマーの騒音は毎日絶え間なく聞えて居ます。中にも市内アラモアナに完成を急いで居る二商業用建物などはホノルルとしては最高の二十五階建で今その十八階目を終ろうとして居ます。

この様に住宅が新築され、アパートや高層建築が完成される毎に、その屋上には必ずと言っていい位、数本のアンテナが立てられて行くので、全体を合せて、その数幾万か、流石ホノルルの都も今やその屋上はアンテナに蓋われてしまった観があります。

布哇では今夏、官約移民渡航七十五年を記念して盛大な祝賀行事が計画されていますが、七十五年の昔、行李一つで遙々渡航して来た草分組の生存者が残って居るとして、彼等がその第一歩を印した当時の半開地ホノルルを回顧し、之を今日の隔世的大発展を遂げた現在と比較して見る時、その感慨は如何ばかりでありましょうか。

あしあと

三輪峰円

殆んど半生をかけて洋蘭栽培に生きて来た自分の過去を今静かにふり返って見ると、そこに精神的にも物質的にも可なりに深刻な無理を重ねて来る。

多くの園芸植物中で播種発芽の最も六かしいとされている洋蘭種子の無菌培養に手を染めたのである。現在では園芸の一部門として布哇大学あたりでも洋蘭の播種法から栽培に至るまで教えられているから別に問題はないけれども、その当時は日英両語ともに吾々素人にむく参考書とてはなくナドソン博士の著書を唯一の手引きに四苦八苦のあとで難解の化学用語などは薬剤士について教わりながら培養基調製に必要な薬品の数々それに小型計量器三角瓶から殺菌用の蒸熱器に到るまで一と通り整えるにも当時としては無理な出費であった。さて培養基は一応出来上ったとしてもこれの酸度が適正でない場合には菌の種子は決して発芽しない、故に酸度の調正と言うことも目に見えぬ大切な問題であった。斯うして六ケしい手順を経て曲りなりにも発芽に成功した後にも更に第二の関門が湧いて来た、優良株を作るには優良なる親木を持つことである。さて是等の親木を英国、日本また比律賓など外国から入れる場合には米国農林省発給の輸入許可証を得る為め輸入種物を収容する隔離室の設備が規定されている、当時の日系人としては他島は知らずホノルルでは第一号であった。具さに味った苦渋も現在では懐しい思い出の一つである。

半世紀と言う永い間に一度や二度の母国を訪うことは極めて当然のことであるのに敢えてそれをしようともせず蘭と共にと言う一念に凝り固まっていた自分であった。

そんな自分が恰も神の黙示でもあるかのように、頑くなにまで守りつづけて来た多年愛培蓄積した洋蘭全部を即時に処分して母国訪問を決意したのである。何たる心境の変化まさに百八十度の転換である、老いたる者の最後の希望と言うには余りに淋しい現実ではある。

家族や知己友人と別れて一時的にもせよ長い年月住み馴れた土地から離れると言うことはほんとうにうら淋しい、況してや夜半の別離と言うことは一層にわびしいものである。

暗い感じのグァムの中継空港を離れてからは今までの緊張した気持ちも弛んでかぐっすり寝こんでしまった、目が醒めた時は既に朝である。心なしか海の色までが昨日とはちがって見える。未だ陸地は見えない。突然、マウントフジと呼びかける機長の声に、機首左側の窓に目をむけると、霊峰冨士の姿が朝明けの空に鮮やかに浮び上っている。

ああ何と言う感激、これこそ過去五十年来夢寝の間にも忘れ得ざりし懐かしい母国の姿である。腹の底から熱いものが止めどなくこみ上げて来る。

どっしりと冨士は昔のままであり

うどんを切って呉れ

京都支部　田中烏雀

○

うどんを喰べる時何か知ら腹が立つ。考えて見ると、これは長さにある。何故こう長いままなのかどうも喰べ憎い。

箸でつまんで一尺程高くさし上げて、上手に口へ運ばねばならぬ。上げ方にコツがあって、上げてる内に手はだるくなるし、うどんに気をとられると、手がお留守になって、箸の調子が狂いつるつると逃がしてしまう。

うまく上げても手がぶるぶる震って、口のはたやら鼻の先やら、下手して眼へでも露が落ちたら事だ。

そこで高く上げずに、かぶりつくと、その熱い事、つるつると吸い込むには相当技術を要する、間違って気管へ滑り込ましたりしたら救急車を呼ばねばならん。

そうでなくとも、うどんの尻尾が口辺でピチッとはねて顔中へ露が飛ぶ。一張ウラのズボンを汚したり、折角月賦の洗濯機で洗って貰った白い白いシャツに、はねが浸んで、兇妻に叱られんならん。

ざるそばと言うの。あれの出汁茶碗へ入れる時の苦心。口へ入れるよりむつかしい、口は口の方を持って行けるが、茶碗へはうまく命中せぬ、外側へひっつくやら、卓へ落ちるやら。漸く入れると汁があふれ出る、摘まんだそばは滅らすわけに参らぬのだから何とも仕末が悪いことである。急いで頬張ったら鼻がひんまがる程、わさびの奇襲を受ける。

こりゃもう処置なしですよ。

先日も百貨店の食堂で、同じ卓に三人の子供を連れた、しんどい家庭らしい若い母親。抱いている子は、まだ乳も離れてない位。大きい方の女の子も、まだ学校には上っていまい。その弟と総勢四人にザル三ツ母親は末子のお余りを予期して注文がしてない。苦しい家計から最低で腹のふくれるものを注文したのは解る。

私の若い頃の家庭を思い出してホロッとした。見ていると、姉の子はどうにか喰べられそうだが弟がいけない。どうにも扱いかねている。「そんなことしたらあかへんがな」と母親のヒス声が私の耳まで痛く響く。二人が扱いかね。こぼしたり、卓に落ちたのを手で摘まんだり（仲々摘まめませんよ）

「そんな汚いことしたらいかん」とどなる、が、家では勿体ないから拾わしているだろう。子供に取っては全く地獄のせめ苦だ。

喰べたいのに、この難行苦行。私は見ていて公憤を感じたネ。

なぜ世間は麺類を長いまま出すのを許容しているのか。もっと喰べよく切ったらどうだろう。

で、いろいろな人に私のうどん切断説を聞いて貰ったのだが。

うどんは長いのがあたり前なのだから、これは切っては味がない、気分が出ない、喰べ憎い処に興味があり、矢張りつるつるつるパチッとやる処がよいのだと仲々譲らない。

一つの定型となってしまったことは、それから脱却するのは仲々むつかしい。

川柳にも型があって「型に篏めようとする指導者」があり、又初心者は早く上達する為コツを求めて、三要素であるとか常套語をおぼえて型に篏って行く。

そんな畑にいながら、型にはまりはせぬかと懼れている。

川柳の型にはまらん川柳を作る、そんな阿呆なことがあるかと叱られそうだが。

定型的な臭いのする句を見ると、全くつまらなく感じて嫌気がさすのは、豈私一人のみならんや。京都支部の句会に見える凡その方々は同感だと思う。

○

不朽洞京都カップ

去年七月の支部例会が丁度百回であったので、一寸一杯飲むと洩らした処、路郎先生からはお酒を頂くし、不朽洞からはカップを頂いた。

で、これを毎月、持廻りで競吟して来ました。その一年を回顧して、獲得者と吟詠を御披露致しましょう。

第一回　布部氏
骨董屋百年ほどは懸値する　幸男

第二回　山本氏
父の手品は鼻のあぶらを　礫

此処でつけ

第三回　佐野氏
それぞれの掟の上に屋根がある　海三

第四回　山本氏
怒り消えゆく放尿の闇がある　礫

第五回　村田氏
逆なでをして呆ける顔出来上る　紫蘭

第六回　青柳氏
失敗がつづき畳の目に喰入る　山紫楼

第七回　渡辺氏
天燃ゆる人等おろかに争えり　極堂

第八回　布部氏
雑草のいのち西陽を吸いつくし　幸男

第九回　村田氏
お茶漬に女は明日の事言わず　紫蘭

第十回　所氏
丁度叱られそうな時間に帰って来　ゆきら

第十一回　平岩氏
お茶碗をうつむけて輪が「出来た」「出来た」司郎

第十二回　山本氏
小市民の脇で小型のラジオ鳴る　礫

第十三回　中尾氏
働きにゆく少年が市電待つ　藻介

川柳雑誌社阿倍野支部のページ

センス

金井文秋

うちの娘が三人何れも生花を習っているのだが、それをながめてつくづく思う事は、同じ未生流でありながら師匠が変る為か、一人はほとんど剣山を使って盛花を主としている為、美しいが雑然としている、一人は形を主として流儀にかなっている、あと一人は同じ形を主体としていながら、なんとなく新鮮味を感じる材料の選び方をしているのだ、これで思う事は習う者の腕の差ではなく、流儀の差でもない、つまり教える者のセンスの差であると、

材料の選び方と云う事を川柳で云うと課題の選び方などにも通じる、めったに使わない新しい辞書からも消えているものや、老人が使っても若いものが使わないものなど教えたてると随分ある、例えば逢引と云う題で作句をすれば、どうしても周囲には内証でこっそり逢う潤を楽しんだ時代の匂いが抜けきれない、現在もこんなケースがあるにはあるが、逢引がランデブーとなりさらにデイトと変っている今日の状態から見て、同じ題を出すならデイトで出してもらわないと、どうしても古い句の繰返しのように思えてしかたがない。

題の事でもう一つ考えてほしいのは季節的に同じ題が繰返し繰返し出てくるのがある。夜店・花火・裸・湯上りなども一例である。これも数年間あいだが開いておればまたその時の感覚で句も作れるが毎年のようにくれば全くやりきれない。名詞、動詞を取りまぜてやればいくらでもあるはずである。繰返しや焼直しの句を封じる意味でも題の選び方にセンスをもってほしいものです。

昔からある題で永久に古くならない題もある。十代とか、子供とか、なら何時の世にも居るし、時代的に社会情勢からだんだん生活も変って行くからである、それでも年令的に作家のセンスがなくなってしまえばその時その時の新しい句が作れなくなってくる。つまり十代の題が出れば現在の十代を作らなければならないのに、今の十代の心理が理解できないので自分の十代の頃の記憶を句にする為に六十才の人なら四十年以上もセンスがずれてしまうのだ。それを案外自分で気付かない作家がいるからさびしいものだ。

新語の流行も実に目まぐるしいやたらに使うのも考えものだが、あまり敬遠するのもよくない、それぞれ時代感覚を持っているからだ、日本語化して行くものもかなりある、そんなものでも使い方を誤るとセンスがなくなってしまう。大正末期だったか耳かくしと云う髪形が大流行した事がある。今のパーマネントの前身のようなものだが、当時の句に、

母さんでないママさんの耳かくし　と云うのがある。当時耳かくしと同じように、パパやママは尖端を行った言葉であった。現在では職人の子から百姓の子まで、パパママを使っているのはザラにある。当時こそママと母の差がはっきり別れていたからこの句も生きているが、今頃になってママと母の差を取り上げるとしたらそれだけセンスがずれていると云われても仕方のない話である。

庶民天国

――阿倍野の人々――

不二田一三夫

名門「阿倍野支部」は、柳界最高の人気作家須崎豆秋氏の体臭がそのまま、阿倍野のカラーになっているようである。

大先輩諸氏に、「先生」とよぶと、みんなイヤな顔をする。だから「豆秋さん」「小松園さん」と〝さんづけ〟でよぶ無礼を敢えてしているわけである。ボクなんかこのカラーに惚れて、阿倍野支部へ入れてもらったのだった。

須崎豆秋・菊沢小松園・松江梅里・小川恒男・新川博也・山本葉光とならぶ巨砲に、木口賀峰・木村十悟・伊達堰子・金井文秋とそろう鋭鋒、そこへ河井庸佑・加藤繁雄・今西生蕾の新鋭三羽烏。

とにかく14人という不朽洞会員を擁して川柳雑誌社の一角にあることはたしかに天下の偉観であり、かてて選者が6人という壮観はけんらんそのものである。

評論家高鷲亜鈍氏の存在も大きく、支部の結束ますます固く、作句態度いよいよ鋭どし。と、まあいうところである。

辻川喜仙氏は阿倍野支部でも古参株の人ではあるが、不朽洞会には、もうすこし勉強してからと、老令にムチを打つ気骨ある人だ。

久米奈良子さんは実力もあり、近作柳樽のトップをとれば不朽洞会入りをほのめかす好作家でもある。柳歴も六、七年という油の乗ったとこで、書道の先生であり、梅里氏と共に達筆の双璧でもある。

坂東若芽さんは療養中の人ではあるが、ズブ素人（しろうと）の人、何人かを柳界に送っている熱心な川柳愛好家である。出ては消える勧誘のむずかしさにもめげず、山椒坊・鎮海・美智子・光福諸氏を育て上げた努力は高く買いたい。

坂上山椒坊氏は柳歴こそまだ一年そこそこではあるが、ときどき名句を吐いて阿倍野の先輩連をアッといわせている将来性のある人である。

春田鎮海氏もまだ一年未満の人ではあるが、その作風のフレッシュなことは先輩の注目するところであり、若芽さんや山椒坊氏と共に異彩を放つ人である。

巨星阿倍野に、これら新星群像ひしめくところ、阿倍野支部に永遠の若さを泉と湧かすことであろう。

最近顔を見せる人に**清水義介氏**がある。三四十年前の清木卯三という柳号を古い人ならご存知かとおもうが、再出発へ熱心に句筌と取り組む姿にはジーンとくるものがあり、柳道のけわしさを再認識させられたことである。

入門講座

研究題「石」

清水白柳

今回は四百号にのるので張り切って投句をされたことと思いますので、私も張り切って居ります。題の石を連想してみますと余りにも広いのでどこに焦点をしぼったらよいのか迷われた方も少なくないと思いました。だれしもが一応考えられますものに、庭石、石灯籠、石亘、石段などがあります。そのうちから抜いてみました。

1無雑作に並んだ石へ庭の生き　R
2どこが良いのかこんな庭の石　R
3何となく詩情豊かな庭の石　H
4石一つ庭を美しいものにする　S
5心おきなく庭石も売り払い　美舟
6庭石もほめて旧家へ話しつけ　保夫
7石の向き自説譲らぬ老庭師　八九寸

1から4迄の句は庭石があるというだけのことでしかないのは作句する時の心構えにすきがあるからでしょう。5は売る方の立場を6は買方の心理を詠んで居られるがやや物足りないものがあります。7は老庭師が生きていると思いました。

1苦ついて石燈籠に泊がつき　R
2苔むした石が時代を意識させ　H
3苔だけの石を碁敵賞めて去に　T

1は説明句で泊は箔です。2も時代を感じさせるという説明句、3はあまりにも古い語いと着想で頂けません。

1盤石でなかった歴史城の石　S
2秀吉の威光をしのぶ城の石　S
3お上りへ先ず第一は袂石　蘭
4石垣の冬眠春の陽を浴びて　美舟
5石垣の割れから覗く露の草　T
6垣の石まで計算に入れ売家デス　静観堂

1は説明句で泊は箔です。2も時代を感じさせるという説明句、3はあまりにも古い語いと着想で頂けません。4は冬眠という語に何かを暗示させているのですが成功した句とは言えません。5はそれだけの句で訴える何物も持って居らないようです。6は住宅地の風物を詠んでいますが作り放したような感じがします。

1石段の前で子供おんぶされ　S
2石段を上れば琴平別世界　E
3石階段足はとぼとぼ遍路笠　K
4石段の数を忘れて息の切れ　柳瓢子

1は石段を上るために子を負うたのでしょうが、そうでない場合も考えられます。2はその通りで琴平の石段は千数百段あるという添書きもありましたが句は平凡です。3はとぼとぼという処に着眼されたのでしょうが、それがこの句の缺点になって居ます。4は成功した句で最初は元気よく数をよんで居ったが疲れてくると数どころではなくなったという面白さがよく出ています。

1嬢はんに漬物石は重たすぎ　T
2漬物の石にも亡妻の息吹する　I
3漬物の石を軽そに母はのけ　峻艸
4漬物の重石へドライブ約束し　保夫

1はそのままの事で失敗ですが、3の句は、手なれた母の仕草を軽そにと読んでいるのがよいと思いました、2の句は意気込みすぎてそらぞらしい句になってしまいました、4の句は若さというものを感じさせられるのがよいと考えられます。ドライブと漬物石もウイットがあると思いました。

1路傍の石自分も蹴ってみたくなり　S
2ほろ酔いの楽しさ小石を一つ蹴り　T
3自己嫌悪自嘲の石を蹴りとばし　S
4石蹴っておさまる位いの怒りなら　朝太
5罪のない石やみくそに蹴飛ばされ　平々
6いしけりの石は子供のたからもの　弘村
7小石カチンと蹴ったら新らの下駄が脱げ　静観堂

1の句よりも2の方が楽しさを感じさせますが、作りすぎたようです、3は重くるしい感じを持っているのが余りにも目立ちすぎて失敗しています。4は意余って舌足らずのような句になっているようです。もう少し深味をもつ表現にするとよい句になりそうです。5も詠まれている気持ちは判るのですが、練習不足とでもいいますかこの句も表現の方法に難があるようです。6はよい着想ですが、たからものというのは考えさせられます。7は古い着想ですが先ずまずというところでしょうか。

1水面に石横投げて嬉しがり　K
2石投げてコントロールを試してる　A
3大池の氷りが石を投げさせる　S
4石投げて石投げて孤独の何思う　R
5泣きに出た河原で石を投げて見る　K
6石投げて失恋の日の野が広し　秋月
7水溜り次への石へ深呼吸　平々
8手術後のこわごわ石を投げてみる　一鶴
9子供心にデモの石合戦　Y
10デモ隊は当らずもよき石を投げ　弘村

1は横投げが面白いと思いましたが横投げという語が少し消化不良のようです。2はコントロールを石で試すのが不自然のような気がしました、3は時季的にずれがあるので損です。4は意欲的な点はよいのですが上すべりしていると言えます。5はわざとらしさが目につきすぎて失敗したようです。6は失恋の日に作りすぎた感がありますが、野が広しと結んだところにこの句の成功のポイントがあると言えます。7も良いと思います。その姿まで描いていますが、上五の水溜りがやや難点と言えるようです。8は病後の心理をよくつかんで居て佳句と言えます。9のデモのは少しうがちすぎた感があります。10は時事を読んだのですが、今日の川柳であって、この句が発表される頃には古くなっているかも知れません。

1おにぎりに石白い歯がつつましく　H
2小さくもかたき石にて歯をいため　K
3石噛んだ不機嫌猫にまで

あたり　I

4 かみ当てし小石に妻が恐縮す　周甫

御飯や米に入っているのは砂とは言わないで石といいならわされているようです。1の句はつつましくとすましこんで居る句ですがそれだけに終ってしまいました。2は小さい石で歯をいためたと理屈だけになっているようです。3は常套的な句です。こうした処から抜け出る努力を望んで居ります。4は真っ正面から取組んで居りますが、成功しているとは言えないようです。

朝寝した硯汁に石混り　A

この場合は御飯と違って石とは言わないで砂と言いますが、句そのものも良いとは言えません。

碁石もてそっとおはじきしている子　K

初孫のおもちゃになっている碁石　B

まだこの他にも碁石の句がありましたが、どの句も平淡すぎて問題になりませんでした。

石数を誇る時計がよく狂い　K

三代は楽に食えそな指の宝石　H

宝石の一つもないが家内無事　S

宝石も石のうちに入るのでしょうが句そのものにもっと真剣さがなければいけないと感じさせられました。じっと見つめることですが、着想だけを拡げて深さを忘れてはならないと思います。

1 御先祖の石碑の苔を自慢にし　S

2 この石で幾価と石工と墓地めぐる　K

3 刻む字によって値打の違う石　朝太

1の句は平凡です。2の句は余りにも現実を直写しすぎて句とは言えない姿になったようです。3は墓石とは限りませんが面白いものを感じさせられます。少し理屈っぽいようなのが難といえば難ですが、

ダムになる滝八丁の石拾い　S

曽遊の地の思出を秘める石　K

都会への土産は磯の香の小石　保夫

石を拾ってきたことの報告では句として認められないと言われても致し方がないでしょう。都会への土産といった説明も気になりますがこの三句のうちでは、まあまあといったところです。

腰おろした石小さくて尻痛し　S

道ばたの石へ背中の荷をおろし　啖艸

先の句はくすぐりがすぎて失敗しています。後の句にどうやら川柳味を見つけることが出来るようです。

張りぼての石を演技で重く見せ　I

芝居を説明しているだけで句に余情がありません。次の句のように芝居気たっぷりなのもまた面白いと思います。

包装紙へ石を包んで置く無邪気　秋月

固くなりすぎて格言のようになったのに

たゆまざる流れに石の角がとれ　S

激流にもまれた石は角がとれ　K

がありましたが、句としては取りあげるわけには行かないようです。

石だけで生活が出来る北木島　周甫

下敷きにならへんやろか石切場　生薑

北木石といえば一流の石でその石の出る北木島を詠んで居られますが一寸専門的になるので判りにくい点もあるのではないかと思います。後の句はだれにでも判る句でありますが、平明すぎるようです。

雪国の文化を笑う屋根の石　啖艸

もう大分少なくなったと思いますが北国へ行きますと板屋根の上に石を並べてあったものですが、文化を笑うということは余りにも非情な感がしました、考えてみたいことであります。

査石のへこみも旧家らしくわび　敏子

よく見つめられて居りますが深味のないのが難点です。最後のわびは、わびさびのわびでありますが、やっとこれだけでこの句は救われて居るといえます。

崖削ればいろんな石が世に出たり　静観堂

土取り場などで見うける情景を描いているだけでなく、いろんな石というところに暗示をふくませて居られると思いますが、道句めいている点に手放しで賞められないものがあると思います。

力石村の祭りにわきかえり　舟遊

句としては一応出来て居りますが陳腐な着想でありますし、表現も平凡さを免れません、平淡な描写だけでなくもっと深いものを期待したいと思います。

跳ねられてガラスを割った罪な石　豊年

偶然の出来ごとをとらえて成功していると思えます、跳ねられた石が人生の一断面を描き出していると思える句であります、表現の方法も軽いタッチでよくまとまって居ます。

石にかじりついても癒らねば癒らねば　一鶴

天然現象の石を詠まないで、石を詠んだ句のなかでは成功している句であります、この句の他に、石頭という頑固さを詠んだものや石橋を叩くといったのもありましたが、採り上げる句がなかったのは残念でした。

爆心地石に残りし人の影　K

と原爆の悲惨さを詠んで居られますが、この句からはその惨状を訴えるものを感じられませんでした、そのことをそのままに描いただけで、作者の心のうちにあるものが表現されて居ないのです。

堪えぬいて来てあっ気ない土台石　H

何かを持って居そうで、何度も味わってみましたが、作者の意図するところが、つかめませんでした、それは、あっ気ないという語の持っているものが判らないからです。堪えぬいて来て、でありますから、家をこわしたあとに残った土台石が簡単におこされるのを見て、あっ気ないと感じられたのでしょうか、考え直してみたいと思う句であります。

石ころで球は意外なところへとび　粉淵

句の表面は草野球かキャッチボールか何かで石ころに当った球がとんでもない処へ転り、うろうろしているということなのですが、球の当った石ころが人生の一つの節と考えますと、意外なところへとんだのが生活の転機ということになります。そうしたところに川柳の味わいを感じて行きたいと思いました。次回を楽しみに以上で終ります。

○

研究題「塵」
〆切　九月十五日
宛先　大阪市天王寺区上之宮町一六　清水白柳

写真前列左から・梅志・粉州・唯義・言也・白柳・角鹿・大路・
中列・葉平・竜昭・凡路・慎太郎・年風・玲人・晃・満潮
後列・良・利男・兼治郎・清人・明子・すゝむ

にしなり柳人群像

A・N生

川柳雑誌の数多くの支部の中で最も実質的な活動をしている支部の一つとして**にしなり**を挙げることに異議を称える人はあるまい。アナクロニズムとも云うべき柳壇セクト主義の中にあって此の支部は大いに開放的で**川柳文学・ふあうすと・番傘・天守閣**と各柳社の古豪、或いはどの柳社にも籍をおかない**葉平、六竜子**氏等ベテランの参加もあって絢爛多彩な句会のメンバーを構成している。所属を異にする作家達が互いに鎬をけずり心魂を傾けて課題と取組む状は当に作句道場と称するに適わしいものである。玉造支部長**清水白柳**氏・アベノ支部長**金井文秋**氏の来援は**西成支部**に重量感を加え好敵手**明和支部**の若手新進作家達が大挙出動して**にしなり**に挑みかかって来るのも、句会に絶えず清新の雰囲気をもたらすもので、まことに貴重な存在である。**にしなり**の作家はあくまでも自守性を保ちながら、吸収すべきものは吸収して自からの内容を一つずつ堅実に深めていっている。

後藤梅志

こぼれては咲きこぼれては
咲き朝顔の
明暗をつくり　能面うなだれる

真剣に生き真剣に作句する梅志には、安易な妥協を許さぬきびしさがある。これが氏の長所ともなり欠点ともなっている。従来の概念的な川柳がもつ低俗性にあきたらず、深く人間性に根ざした芸術味豊かな作品を目指して精進する氏は、倦むことを知らぬ熱と意志の人である。已に還暦を過ぎているにかかわらず旺盛な気力と実行力をもって支部長としての責任を充分に果している。

魚住満潮

千円札を通天閣の灯にすかし
別れ話し関西線の終が行く

路郎門下では最も古参のグループに属する人であるが、句に些かの疲れも見せず常に意欲的な作品を発表している、「後世に遺す一句」を念願に孜孜として撓まぬ努力の人である。平素は非常に謙虚な人柄であるが、こと作句の問題に及ぶと断乎として自説を枉げぬ強さをもっている。

石倉旅風

再会に互いの距離を知っただけ
拾い屋が淡淡としてもって行き

前の句は昨年度大阪市**市長賞**受賞作品。後の句は**堀口塊人**氏が激賞されたもの。柳歴三十年に及ぶベテランであるが「初心忘るべからず」の精神に徹している。万事控え目だからその存在は余り目立たぬが、作品はいぶし銀のような渋い光りを放っている。

本多柳志

ニッポンの政治あちらへ聞きに行き
何一つ買うても婚期覗かれる

前の句は大阪市**市長賞**受賞作品。最も川柳の伝統を良く身につけた人である。敢て奇に走らず、伝統の中に今日的なるものを表現して行こうとする本格派の作家で才気縦横豊かな経験を活かして鋭どい諷刺作品をものする。

平澤保美

夕立へポッンと残る三輪車
子も妻もテレビに奪られそうな夜

抒情的な作品をもって輝やかしいスタートを切った新人。良き父であり夫である氏の人間性が一句一句に泌みでている。現在はややスランプの状態らしいが、それは大きな飛躍を遂げるための一時的な停滞であろう。

欄蘭

お茶がわりですとビールでもてなされ
親心だして利息は負けてやり

不朽洞会員としては最も柳歴の浅い層に属する人である。飾り気のない好青年。線の太い性格から作品も亦至極おおらかで悪く言えばぶっきら棒であるが、そこに小手先の技巧に捉われぬ良さがあり未完成の魅力がある。

西川晃

親の血が無事な男にしておかず

この作品は前年度**路郎賞**作品。**釜ケ崎風景**を根気よく発表しているユニークな存在。

以上七人が不朽洞会員で其の他では、女流に近作柳樽で活躍している**宮原敏子**氏がいる。もう一人の**岡田歌子**氏は好作家であるが花嫁修行のために句作から一歩退いたのは惜しい。久保田鉄工所の川柳部を指導している**岸川漣・本多清人・伊集院良**氏のトリオは相変らずの健吟であり、**中川利男・福井竜昭**氏の消防局コンビは入会して間もないが、次第に頭角をあらわして来た。**中田五色**氏は冠句の経験をもち技巧にすぐれた人。梅志氏の愛孫**慎太郎**君も時時傑作を発表して古豪連を驚かせている。以上の他に支部とは直接の関係はないが、川雑前理事長**土井文蝶**氏及び**吾郷玲人**氏も亦**にしなり**としては書落してはならぬ因縁の深い人達である。文蝶氏は現在病気療養中であるが、一日も早く昔日の豪快な氏に戻ってほしい。氏の一句をもって此の稿の結びとする。

我も亦凡愚の一人酒の酔

路郎先生の古稀のお祝いに杏林川柳会の事を書いた処、大変面白かったとのお言葉を頂いたので何やらの一つおぼえで杏林川柳会その後を書かせて貰った。

杏林川柳会その後

山川阿茶記

川柳人のグループだから愉快な人々の集りであって何の不息議はないけれど、杏林川柳会は底ぬけのお人好し、底ぬけの愉快な人々の集りである。

昭和二十四年二月十七日に第一回の句会をもってから本年七月で百三十七回、只の一度も休んだ事がないと云う記録をもっている。現会員は生々庵、一哲、瑞川、珊枝郎、路文、太希志、一伸、石南、小石、阿茶の十名。中退十六名、物故会員三名。

昨年八月満十周年記念祝賀句会を開き、十年選手の一哲氏に生々庵が何枚も書き潰してやっと出来上った肉筆の左の表彰状と記念品として金盃三つ重ね一組を贈った。

表彰状

貴下は本会創立当時より今日に至る十カ年に亘り殆ど毎回出席致され、その出席率は本会の最高記録を示し従って貴下の精進努力は美事な結実となり、当初に於いては川柳作句もあれで何とか物になるやろうかと会員一同危懐の念にかられていたやの噂さえありましたのに、近年頻々と優秀入選し進歩の跡驚異すべきものがあります。之れ貴下の敢闘精神に拠るものであり以て範となすべきものと信じます。本会は茲に創立記念会を催すに当り金盃一組を呈しその労を表彰するものであります。

列席された路郎先生が立たれ、本会は医者ばかりの会である事、十年間一回の休みもなかった事、夜おそくの集まりである事、抜けたら抜金を取られる事、物になるやろかと云う噂さえあったやにと云うような表彰状を出す会も亦嬉々としてこれを受け取ると云うような和やかな会は、おそらく日本国中何処にもないだろうと思う。抜けた句は五一〇七句だけれどこの五倍の句は見せて貰ったであろうと語られた。

一哲は金盃を貰ったばっかりに九月は句会を引き受け大盤振舞をする事になり、金盃三つ重ねだと云って、清酒金盃三本でゴマかされギャフンと云わされたお礼やら仕返しをしたいとあって、阿茶の智恵を借り「兼題」表彰の天地人に賞品としてパール、ルビー、エメラルドと云う豪華な宝石を出す事にした。

記念句会の時に生みの親育ての親の生々庵に感謝状を贈らぬとはと無名林に痛い処をつかれてあるので、おくればせながら感謝状を瑞川に作って貰う事にした。弁解がましい事ながら記念句会は生々庵が主になり小石、阿茶が助手をして秘密裡にお膳立てをした。生々庵にその気はあったかなかったかは知らぬが相手がボンヤリの阿茶の事とて無名林に云われる迄気がつかなかった次第で大味噌だった。瑞川から阿茶へ「聞いてくれや悪かったら云うてくれや」とボーイソプラノで電話がかかる。阿茶はボロボロ涙をこぼして受話機を持っていた。これを神戸迄行ってプロにかかせたら金弐千円也とられたそうである。

感謝状

大阪市南区医師会文化部川柳同好会が川柳雑誌社主幹麻生路郎先生を師として発会してから満十年になります。其の間貴方は愛妻小石女史と共に主催者、指導者、世話役、褒め役、貶し役、勘定役、御馳走役さては抜金制創始者、小使等々の大役を一手に引き受けて文字通り十年一日の如く涙ぐましい御世話をして頂いて今日曲りなりにも川柳らしいものを作り得るようになった私達を育て上げて頂いた母の如き慈愛溢るる御愛情と御庇護に対して、満腔の敬意と感謝の意とを表するものであります。何分にも私達は川柳に対しては寄せ集めの瓦楽苦多者ばかりこんな料物が物に成るだろうかと尻込みをしていた者共で、其の尻を敲いて頂いたり餌で釣って頂いたりしてやっと捻り出した句を川柳雑誌や新聞にまで載せて貰い、電車のポスターにまで印刷して貰うようになったのは路郎先生の御薫陶もさることながら、貴方の愛情と努力なくしては到底不可能な事であります。十年の永い間には家出をした者、サボる者、作句をよそに派手な馬鹿噺ばかりする如何わしい者、酒ばかり飲んで勉強しない者、帰りは良い所へ行こうと策戦を練る者、男を阿呆と見たのが一生の不覚と口惜しがっている者などもありましたが、稀に見る大抱容力と寛仁なる御態度とで、御目こぼし下さって長い間御世話をして頂きました。ほんとうに有難う御座いました。この私達の限りない感謝の意を表するため私達は粉骨砕身斯道に精進しせめて一句でも、後世に遺る名句を作るように心懸け御鴻恩の万分の一に酬い度い覚悟であります。茲に記念として安物ですがよく書けるボールペンを御贈りして感謝の微意の一端を表し度いと存じます。何卒益々御清健に御幸福に我が川柳会の為に御精進下されこのペンがボロボロになるまで、御使用になり多くの名句を創作されんことを心からお祈りすると共に、尚何時何時までも私達を御鞭撻下され且つお世話をして頂く事をお願いして茲に私達の深甚なる感謝の意を表するものであります。

当日読んで頂いた路郎先生受ける生々庵贈る会員一同の眼にも光るものがあった。その後は例によって悪態のつき放題飲むわ喰うわのいつもの楽しい句会、なお賞品の宝石は磨くようにと白ピンク、緑の歯磨でゴマかされた。

十年を小児科育ての親として　阿茶

本年川柳祭の特別課題「学生」に阿茶が二席に入った。まぐれにしろ芽出度い事だが楯がとれなかったのだから残念会をしてやろうと景気よく花火代りにシャンパンを抜くやら特級酒がとどくやらビールの泡が飛び散るやら褒美に貰ったグラスで乾杯。何の事はない阿茶を出汁に機嫌よくメートルを上げたとは、めでたしめでたし。

患者には見られとうないはずしよう
乾杯へシャンパン滴ほど貰い
残念会花火代りに抜くシャンパン　阿茶

★南海電鉄川柳部★

四百号と言えば、実に三十三年四箇月の年月が流れており今更ながらその偉大さに驚かされるのであるが、わが南海電鉄川柳部の例会も詳かでないが、恐らくそれ位の歴史を有し、支部として先生のお教えをお願いしたのも、他の支部よりは古く伝統に輝いているのであります。そして当時は南海句会と言えば実に七十名位が集り実に盛大であったと先輩諸兄から伝えられています。

私の方の会の特色と言えば、毎月毎月麻生路郎先生のお選しをお願いして直接御熱心な御指導をいただいており他支部の羨望の的だと信じて疑いません。そして先生には鉄道に関係のあるものを選んで出題し、その選をお願いしています。又最近は会社が毎月発行する社内誌「親和」に先生の御選評をいただき発表しており、これがもとで社内に川柳熱の高まりつつあることは先生の御選評が当を得て、人をひきつける力の強さを知らされます。然しながら古の盛大に比し、現状は句会出席者も少く幹事として大いに頭を痛めているのであります。場所も難波に近くめぐまれておりますのでみなさんの当支部への御後援をお願い致します。次に最近の先生の選をいただきました三才のみ御紹介さしていただきます。

「ターミナル」

ターミナルポストなかなか見付からず　貴山

ターミナル支店の方がよくはやり　貴山

ターミナルここで別れるコーヒにし　宏子

ターミナル日蓮宗へ眼もくれず　路郎先生

「ブレーキ」

ブレーキは専務が握り会社無事　好郎

ブレーキの効かぬ気性へ気を使い　武助

ブレーキの役にまわって嫌われる　和郎

小遣があるのでブレーキ掛からない　路郎先生

「沿線」

通勤もたのし風車がくるくると　梅志

沿線に住んで疎遠をなじられる　武助

沿線のよしみで悪酔見すてかね　宏子

沿線と聞いたに峠一つ越し　路郎先生

「学割」

新調の背広で学割証明書　南宗

学割へ働く子等の目がとがり　圭水

苦労して学割の味知らぬまま　徹也

学割曰くこのポストンも借物や　路郎先生

「入場券」

前売券値段を聞いておじけつき　新石

入場券位で済まぬ義理があり　雄声

入場券買って待つみの弱さ知り　泉秋

見送りの母が入場券落し　路郎先生

「只乗り」

無賃乗車外の景色が目に入らず　貴山

只乗りでないと見せたい捜しよう　好郎

悪い事したとは只乗り思ってず　圭水

家出して薩摩の守で上京し　路郎先生

「不通」

宿六は不通の筈のに帰ってき　みなつき

原因は鼠と分る不通です　圭水

不通箇所徒歩連絡に靴を提げ　句念坊

不通だと聞かされ母は眠らない　路郎先生

★備前支部★

永松東岸

路郎先生の第四句碑

古くとも僕には仁義礼智信

のもとに結束し支部創立以来すでに十数年を経のんびり毎月の句会を楽しみ句報の発行も百二十号に達しています。新人もますます増加の傾向にありますがそれら新人の句やあまり川雑に発表されていない古い柳人の最近の句会での句の一部を発表いたしまして支部の動静をお知らせ申し上げたいと思います。

○

目賀芳月

春風に去勢されてる牛もあり

年季あけ深呼吸して世に挑み

三分の踊りにお揃い作らされ

初孫が笑え笑えと生れて来

横山一声

かんな屑へ一句浮んだ筆を噛み

人違いしたので煙草の灯を借りる

どてら着て歩けば宿の名で呼ばれ

支払いのたしかな家へ初荷出し

西山幸仙

恋人を長い目で見る親心

母の日も学資を稼ぐ母楽し

遠慮して飲んで目出度い荷をとどけ

裏表干した布団のあたたかさ

楢原竜泉

仲人は苗をとる手を見逃さず

煙草の火借りて縁談話し込み

雲仙に登り李ラインにらみつけ

白い歯の見える河童がよく泳ぎ

森本正州

親友の靴を提げてる三次会

親友と同じ女の子が生れ

親友に叱られました二日酔い

前触れもなかった朝の銀世界

喜多村草二

港の灯ゆれて連絡船が着き

松の内妻も御機嫌よく笑い

社交性ないのが真実持って居り

酔加減の答へ酔っぱい顔を見せ

藤原秋月

祝盃へ面白い程酒が売れ

入院もこっそりうどん喰いに行き

借金へ記憶喪失症発作

親馬鹿へ迷惑すると綴り方

楢原万女

火事などはないと思えど寄附しとく

花の香を入れて夕餉を差し向い

松並木下に下にが聞えそう

恩人は助けた事をもう忘れ

永松あやめ

洗い髪鏡の中の白髪抜く

我が癖が見本のように子にうつり

月の裏側の話つんぼに手間がいり

我慢した涙が母の前で出る

○

以上支部の中堅として期待している面々です。諸先輩の御指導御鞭撻を心より願って居ります。

★淀川支部★

木村水堂

大正十三年に第一号を創刊した川柳雑誌が茲に四百号を迎えた。麻生路郎先生が心血をそそいで来た幾十星霜のたゆまぬ努力の結晶である。古きが故に価値があるのではなく、その年輪に相応しい内容を具えているから尊いのである。この光輝ある（川雑）の支部である（淀川）も八十九号を数えるようになつた。

（淀川）の生みの親である武部香林氏が三月二十六日高槻邸逝、同夫人、友淵貴山、八木肇天郎、松江梅里、中島小石、坂田東洋男、平田三十郎、早川清生、小島さぎす、村上和楽の諸氏に見送られて大阪駅より郷里岡山へ出発されてもう半年になる。

香林、若菜ご夫妻の帰郷に際して、

香林御夫妻が帰郷せられる日がきました。実にお名残り惜しいことである。数十里離れていても我々川柳の道を共にするものには心の通うものがあると信じます。（花村）

香林さんが内助外助の功うるわしい夫人と共に大阪を去られるのは淋しい限りだが、川柳というえにしにつながる幸いは、安住の地を得られて今後も川柳やその他いろいろな面を通じて御活躍御指導あらんことを心から祈る。（清生）

お別れする事は淋しゅうございますがご夫妻にとってより良いお幸せの道であるならば私達喜んでお送り致し度く存じます。（灯子）

無力な私に、仕事へも生活についても、また作句へも力を貸して下さった香林さんが岡山に帰られる事はなんと淋しい事か。岡山の街はきっと静かに香林さんの悠々ご自適の日を包む事でしょう。（さぎす）

永い間御教育下さいまして有難うございました。帰郷される事は誠に淋しく思います。私も川柳の楽しさがわかって参りました。これからもがんばる心算で居ります。（涼秀）

ご帰郷により支部を去られる事は言葉に云い表わされぬ寂しさで一杯です。だが残された教訓を胸にこれからも川柳の道を一歩一歩進んで行きたいと思います。（敏明）

淀川支部生みの親として今日まで長きにわたり尽されたご夫妻のご功績に対し感謝の意を表するとともに御多幸を祈る次第である。（東洋男）

病を得て急に帰郷される事になった、私にとっても慈父を失うようで惜別の感に耐え得ませんどうか充分お身体を大切に。（三十郎）

以上のように支部全員が心から愛惜したものである。しかし支部の我々は祇らに愛惜に浸つては居れないのである。

淀川支部を守りそして前進さすことが帰郷された香林氏への最大の餞けであり、それが残つたものの責務でもある。

そしてこの（淀川）の貧しい努力がわが川柳雑誌の明日への遥しい前進に直結しているのである。記念すべき四百号の本誌をかりて淀川句報一号より八十三号迄の香林氏の俳吟を抜萃掲載して今後の指針とする次第である。

○

武部香林

寒むがりへ春よ春よと柳の芽
大阪の手紙湯末と書いてなし
罪の子と知らずニッコリ涎れ掛
ちょうどよいとこへ豆腐屋売りに来る
夜店の灯ここにも平和とり戻し
底冷えに麦は大空向いて佇ち
退院は座るところへ座ってみ
月の出たことも気付かぬターミナル
落選をして広過ぎる奥座敷
畔道の野菊に見入る老夫婦
おぼろ月誰も見ていぬ夕桜
二人三脚勝とうとすればけつまずき
くっつけるとこわが家のほかになし
マスコミに押しまくられている凡夫

日本一の川柳町 ★弓削支部★

直原七面山

恩師路郎先生の限りなき御援助によって、日本一の川柳町として全国にその名をとどろかせた川雑弓削支部を私が引き継いでから、早や五カ年と八カ月が夢のように過ぎ去って参りました。

しかし順風に帆を上げて躍進に次ぐ躍進をつづけて来ました当支部にも、心なき人々によつて一時分裂騒ぎなどがあり、どうなるものかと心配もされましたが、師をしたう人々の努力によつてさしたることもなく、他支部同様支部結成以来二十年の令を数え得ましたことは、この上ない喜ばしいことだと思っております。

現在支部員は約四十数名を数えられますが、なに分会員が各地に散在しているために、毎月の例会を当地で開き得ない憾みがありますが、これも近く解決されるものと思っております。

全町民のこよなき要望によって建立されました弓削駅頭の〃俺に似よ俺に似るなと子を思い〃の路郎先生の句碑も、春秋の雨にたたかれ風にさらされ、雪にとざされ落葉に埋もれてここに二十年。ようやく句碑も苔むして参りましたが、ともに先生の教えもまた、心ある人々の胸深く浸み込んで、末長く人々に〃生きることの喜び〃をつちかって行くものと、私は心から信じています。

私達は川柳王国岡山の各地にある川雑支部ときんみつな連絡を保ち、全会員の力を結集して、現代川柳の本質を究め、より広く大衆に愛せられ、より深い親しみを持って庶民に大歓迎されるような、摘めどもつきぬ情緒を持ち、犯し難い高雅な匂いをもった、しかも現代感覚にみちた新しい川柳作品の樹立を達成するために邁進に邁進を重ねて行く事を誓い合っております。

この目的を完遂し得て川雑弓削支部が川柳王国岡山に君臨することの出来ますよう私達はがん張り抜く覚悟をしておりますので、柳友各位のこの上ともの御声援を賜り度いものと思っております。

川柳は誰が為めに存在するのであろう
　川柳はあなたの為めに存在するのです
川柳は誰が為めに作るのであろう
　川柳はあなた自身の為めに作るのです
川柳は悲哀であろうか
　否、川柳は喜びである
川柳は斗いであろうか
　否川柳は平和である
川柳は生活の糧であろうか
　否、川柳は心の糧である
川柳の色は赤であろうか
　否、川柳の色は紫色である
句は作るものであろうか
　否、句は身体の外にあふれ出るもの
句は人を詠むものであろうか
　否、句はあなた自身を詠むものである。

そして川柳は我々にこの世の天国を与えるものである。

一路集

思いやり

若本多久志選

すて犬に思いやりある子でよう肥えず　弘村
産院で夫も腹がいとうなり　万女
受験の子替ってやりたい午前二時　不村
身ごもってからを亭主の思いやり　蘭
思いやりあって社長は座を外し　蘭
へんな処へ気を回された思いやり　雄声
もうそれでよいかとやさしい思いやり　卯之助
子の旅へ成田不動の守り札　竜蔵
思いやり心と別に蚊をはたく　徹也
受験の子へ鉛筆の芯そろえ　豊年
うたたねへそっとかけてる親の愛　柳瓢子
思いやりちと迷惑な姉女房　紡毛
残業の夫へ炭をついで待ち　峻艸
急停車無事にわたれよ孕み犬　博一
思いやりが身に泌む頃に母が亡し　藤波
思いやりもうこの辺で昼にする　蜻蛉
思いやり又いかさまを摑まされ　井蛙
グローブを入れて我子の棺を出し　忠三
思いやりかけて男の下心　光福
花曇りツバメの宿の棚をつけ　山椒坊
捨て猫よお前もお腹すいたやろ　山椒坊
米持ってやりと母親さりげなく　養流
思いやり素直に云える年齢になり　繁太郎
果物の外に小銭も置く社長　圭井堂
思いやり口に出せない男なり　秀峰
子の好きな記念切手を列で買い　淀月
飲み過ぎと思えど背を撫でてやり　敏子
思いやりこころで二人だけ残し　健朗
思いやりすぎて噂がたちはじめ　兼治郎
寝たふりもして病人の思いやり　たもつ
こまごまと揃えて母の思いやり　宗太郎
氷のうを変えて食べたいものをきき　隆史
思いやり子供は肩を叩きに来　雪美
決断がつかないままの思いやり　代仕男
思いやり人一倍で金がなし　旭峰
思いやり私を解ってくれていず　暁明
思いやり叱って金を出してやり　孝風
食べさせて持たせて帰す思いやり　生薑
煙草の火刑事手錠へつけてやり　十九平
思いやりいやらしいとは他人の目　永香
窓口へ来て思いやり名も告げず　古心
思いやりある上役へ花も替え　美音子
思いやり親馬子馬へ歩を合せ　実男
席ゆずる心僕にも老母があり　恵二朗
思いやり口ではきついことを云い　圭水
思いやりいつか忘れぬ人になり　雪峰
取っとけと笑って呉れた思いやり　ひか平

秀

下戸同志注ぐまねだけの思いやり　兼治郎

空箱

冨岡淡舟選

空箱で一と風呂わかす荷がとどき　柳瓢子
魚屋の空箱うろこ陽に光り　卯之助
空箱を無言で折ってるいじらしさ　紡毛
瓶敷をピース光で編み間借　八九寸
入荷したように空箱積んで置き　白葩
空箱へペンキを塗ったポチの家　山椒坊
空箱へ人形寝かせて独り言　九呂平
空箱だと言うに息子の承知せず　忠三
何時までも無いと菓子箱たかれる　養流
空箱へ日よけのへちま窓へ植え　圭井堂
空箱を送れと商魂抜け目なし　秀峯
井池の景気空箱積みかさね　淀月
空箱に咲く朝顔の赤みどり　山壮
空箱で煙草をたかるテクニック　兼治郎
空箱に秘めた娘の淡き恋　裕邦
開店の虚勢空箱も並べとき　晃康
空箱が御殿にもなる子の世界　酔夢
空箱に封してカンパまわって来　忠太朗
くじ当てるつもり空箱ためてみる　静観堂
空箱へ主婦が知恵出す台所　竜昭
空箱にしてもロンドンのは違い　ひか平
空箱をつぶして宿題小半日　雪峰
交際の広さ空箱たまること　圭水
思いつき夫人空箱利用法　雄声
空箱の裏にテレビの夢を持ち　花車
空箱を積んで魚河岸昼静か　孝風
貧しさのつい空箱を蹴って見る　旭峰
空箱も欲しい時には見当らず　粉洲
捨てるには惜しい空箱しまっとき　蘭
あげ底の空箱再度の用つとめ　弘村
空箱を並べて見せて店繁昌　佐代子
商魂は空箱へまでくじをつけ　弘道
もしやと思う欲が空箱をけり　同
しぶちんの中元空箱かと思い　秋月
空箱が少女の夜を作ってる　鮎子
薬局へ空箱持って来た使い　峻艸
何時のまに空箱となる子沢山　北海坊
この箱が空いたらほしい子の願い　光郎
有り合せの箱へ地玉子詰めてくれ　敏子
新薬の空を淋しい目で数え　実男
開店へここら空箱積んでおく　暁明
空箱を開ければ鼠の仔が五匹　不村
ニコヨンの椅子は空箱昼の飯　周甫
空箱で猫可愛がる夫婦仲　市郎
空箱を集めて左遷の荷をまとめ　井蛙
空箱に未練が残りけり返し　定月
空箱の嵩へ税吏の眼が光り　藤波
空箱が今直ぐはしいクイズ聴く　保夫
空箱の筈が鳩まで出た手品　徹也
石鹸の空箱小物入れになり　蛙水
能無しがマッチの空箱など集め　弘朗
空箱を捨てるに惜しい美しさ　和三郎
空箱へ腰おろしてる辻易者　十九平
化粧品の空箱で映画見て戻り　雪美
空箱のレッテルを張る趣味をもち　祥月
空箱を貯めて女患はひとりもの　むじな
税関の目に空箱が怪しまれ　進之助
空箱をもしやと拾うモク拾い　庸佑
お婆ちゃんに云えば空箱出してくれ　蜻蛉
空箱へ会費無造作に重ね　昌男

佳

空箱を捨ててマダムの火を貰い　宗太郎
空箱を送ってベッド夢を持ち　一鶴
空箱で勉強をした父頑固　文庫
空箱へメモをしているよい話　豊年
空箱のレッテル故郷の匂いする　竜蔵
もらい風呂空箱一つさげて行き　恵二朗
空箱の埃り払って茶をすすめ　代仕男
ままごとが無理に菓子箱空けさせる　美音子
衣裳箱中味は質屋の庫で寝る　生薑

人

空箱へ田舎の味覚詰めてやり　古心

地

空箱があって覚悟の死とされる　一鶴

天

空箱を船にも汽車にもして遊び　平凡

道ぐさ

野村味平選

道ぐさが花をいっぱいつんで来る　鮎子
道ぐさのとこから届いた忘れものランドセルもう道ぐさの味を知り　弘村
道ぐさをして晩飯を喰いはぐれ　弘道
不村

道ぐさをせずにと先生くりかえし　周甫
道ぐさの好きな夫で骨が折れ　万女
道ぐさをして特ダネを拾って来　同
あれ以来道ぐさしない父になり　蘭
道ぐさを食って空果を狙われる　市郎
道ぐさをするなと女将如才なし　花車
道ぐさを客はのんびり待って居り　平々
道ぐさもして人生の面白し　雄声
まっすぐに帰ってくれば妻は留守　畯艸
たまの道ぐさ先生に見つけられ　同
道ぐさもなく只のんのんと平社員　北海坊
道ぐさを既うてくれた母想う　藤波
集金に出てパチンコ屋でスラれ　同
道ぐさへ怖いニュースを聞いた母　保夫
道ぐさをのびのび保姆がさせてくれ　同
道ぐさもせずに不都合戻って来　博一
道ぐさの累犯専務も笑うだけ　八九寸
野球戦見てた道ぐさ口すべり　同
へらず口きいて道ぐさ腹が減り　豊年
道ぐさを保姆さんわざわざ諭しに来　秋月
道ぐさにならった趣味で食いつなぐ　徹也
道ぐさの証拠手にして先生が　一男
道ぐさのしゃがんで見てる蟋の群　卯之助
中老にして道ぐさの味を知り　九呂平
単車新調道ぐさ遅刻くせになり　隆夫
道ぐさをする気で家を早く出る　蜻蛉
校門を出て道ぐさの伴れが出来　同
道ぐさがすぎてバスに乗りおくれ　同
道ぐさのパチンコじやらじやらよく這入り　同
大腸が勝ってお使い忌い出し　宗太郎
立ち話出前が声をかけてゆき　同
ハイキング道ぐさ取って遅くなり　定月
人生の道ぐさ療養所のベッド　花美
釣れますかと道ぐさが覗いて居　忠三
道ぐさに弁当箱を忘れて来　同
道ぐさもなく停年来て仕舞い　白葩
道ぐさをうまく仕事になすりつけ　光福
道ぐさの言訳兄が智恵を出し　山椒坊
道ぐさと諦めやはり別れる気　養流
早よう帰えりと言えばおつさんほつといて　同

道ぐさも予定プランに入れて発ち　繁太郎
道ぐさをかばって呉れた俄か雨　圭井堂
道ぐさの子もデモ隊についてゆき　たけお
道ぐさは泥んこのまま戻って来　同
見学と言う名目で道ぐさし　秀峰
満ち足りぬ折詰屋台で飲み直し　光郎
道ぐさは女医も土筆を摘んで春　同
人生に道ぐさ鉄窓の不味い飯　同
花道の子夜道ぐさしたい顔　淀月
案の定道ぐさ香具師の輪にまじり　同
道ぐさをしていたように嫁きおくれ　健朗
道ぐさの夜道楽しい君と僕　壮
道ぐさのマッチを妻に指摘され　敏子
道ぐさの子が居り風呂の済まぬ母　同
道ぐさをせよとネオンの灯が赤い　清人
道ぐさをしたばっかりに雨に逢い　同
道ぐさの中の一人が飴を出し　可生
道ぐさと道ぐさ道ぐさで出合い　兼治郎
道ぐさをさせるのれんに灯がともり　裕邦
道ぐさの証拠土産から足がつき　たもつ
道ぐさをさがしに出た子道ぐさし　晃康
道ぐさをくった人生古稀近し　酔夢
父ちゃんの道ぐさいつものバーに居り　忠太朗
道ぐさが息を切らして帰って来　どんなく
斗病十年道ぐさなどと言うとれず　一鶴
捨犬を抱いて道ぐさ遅刻する　同
道ぐさが日焼の類ですぐに知れ　竜昭
道ぐさの助言で王将危機を抜け　井蛙
道ぐさで拾った話かくしとき　文庫
デパートを一廻りして妻帰り　同
釣れぬ釣り見て道ぐさが長くなり　同
道ぐさのちげくを趣味の易で食い　生萱
道ぐさの墓場で摘んだまんじゅしやげ　同
信念へ道ぐさ食わず突っ走る　旭峯
道ぐさの証拠の玉が転がり出　蛙水
縄のれん道ぐさ同志意気が合い　佐代子
道草の意地は踏まれたままを咲き　和三郎
道ぐさのテンビの肩を叩かれる　同
人生の道ぐさですと病み続け　光子
道ぐさをする気の友を待ち合せ　代仕男

道ぐさへ始末のベルが慌ただし　同
長すぎた道ぐさ五十の年数え　永香
道ぐさを食って出世の時期が逃げ　古心
言訳は図書館だわとお姉ちゃん　粉洲
叱られる覚悟みちぐさ腰をすえ　弘朗
長男の道ぐさ親が達者すぎ　十九平
道ぐさへ補導委員の目が光り　同
すねた子の道ぐさ一人下校する　同
父ちゃんの道ぐさ古道具屋を漁り　同
紙芝居来て道ぐさの連れが増え　同
道ぐさを促すように愛の鐘　美音子
道ぐさをさせたビエロは雨に散り　同
救急車まだ帰らない子を案じ　進之助
道ぐさをかんじょにいれて用に出し　庸佑
学校の帰りにのぞく貸本屋　祥月
道ぐさはビヤガーデンに用が出来　同
道ぐさをくって母親手こずらせ　雪美
道ぐさをしない子供がかげ口し　むじな
道ぐさをして人生の裏を知り　美舟
べったんをして来て学校に遅れ　孝風
道ぐさをした想い出がある散歩道　雪峰
とっぷりと暮れて道ぐさ恐くなり　同
道ぐさも楽し拾うて来た小犬　同
ほっといて欲しい道ぐさ気がめいり　同
療養という道草を苦うたべ　恵二朗
パチンコで往診鞄見つけられ　同
道ぐさの味をおぼえた倦怠期　同
道ぐさのお蔭で事故をまぬがれる　同
道ぐさへ話しかけてる誘拐魔　実男
道ぐさはカバンを置いたこと忘れ　同
戔楽に酒が出るのと妻怒り　同
喰水へ道ぐさ水を飲みに来る　ひか平

佳

道ぐさもしてねんやりとほつとかれ　庸佑
道ぐさッ子と通天閣と暮れそめる　勇
道ぐさをしてまんねと飲んでいる　秋月
道草の体験生かす椅子につき　暁明
道ぐさの下駄にふまれた雨がえる　徹也
先生も道ぐさをする祭り酒　竜蔵
道ぐさをしながら急がぬ旅たのし　蜻蛉

子にジュース飲ませた事も皆喋り　宗太郎
人生の道ぐさシベリヤまで引かれ　養流
出張の道ぐさ故郷をのぞいて来　圭井堂
まっすぐに帰えれぬ花が咲きみだれ　兼治郎
道ぐさも食わず施設の子は戻り　十九平
道ぐさを叱れば学校いやと言う　雪峰

人

道ぐさの女にリードされて居り　圭水

地

道ぐさは月がとっても青いから　昌男

天

道ぐさをしなやと水買いにやり　花美

軸

道ぐさででっかい嘘をつかまされ

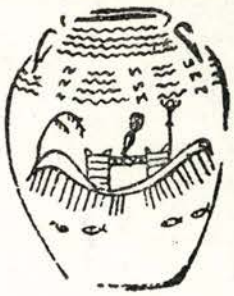
殘暑御伺

長野文庫
今治市神明町

川柳雑誌
祝・四〇〇号記念
長野文庫

川柳雑誌
祝・四〇〇号記念

川柳雑誌社
岡山支部



彌次馬の世に

浜寺支部
吉田圭井堂

世の中に評論家と云う名の弥次馬が沢山いる。政治に経済に外交に文学美術音楽に芸能に中でも社会評論家と云う弥次馬に至っては、無責任も甚だしい事を放言して飯を食っている。元々評論家と称する弥次馬に責任を持てと云うのが間違っているんだが、何か大きな問題が起るとジャーナリストはその尻を追い廻して記事をとる、弥次馬は得々と放言する、恰も火事場に集った弥次馬からピックアップして意見を求めているようなもので、

「風が北から吹いているのに西からホースを向けているから益々大きくなるのは当り前だ、どうも近頃の消防は火を消す術を知らんから困ると云うのもホースを持っている時間に割増金がつくから、出来るだけ長くかかる方が利益だからなんだ」

と弥次る、実際は足場が悪くてホースの突っ込みようがないなんて事は、どうでもよいのだ、これが無責任の評論家の心理なのだ。広辞苑によると評論とは事物の価値善悪などを批評し論ずることとあり、弥次とは自分に関係のない事を人の後についてわけもなく騒ぎ廻ることとあるが、比叡山で満員のバスが転落した有名な評論家と称する弥次馬は、一斉にバス会社の運営に運転者の就労に陸運局の車検に有料道路の勾配に攻撃が集中される、その連中も皆一通り開通前に試乗しているが、事前に警告をした者が一人もいない、どんな大きな事件があっても、ものの一週間も経つとけろりと忘れて又次の問題が起るのを待っている、関東の震災があってから随分歳月を経ているが、有名な地震国だけにもうそろそろ次が来そうな時分だが、誰一人その対策を練ろうとしていない、力学上大丈夫とかで地下三四階地上十何階かの大ビルでも昔のようなデッカイ鉄材を使わず、細い細いアングルを組立てて骨にしているあの丈夫な鉄骨を使っていた旧丸ビルが、関東の震災ではヒナ餅のようにいびつになった事を考えると今の建築は危くて仕方がないが、誰一人不安がっている者もない、万一大震災か何かで大きな惨事が起ると待ってましたとばかり各弥次馬は一斉に咆哮することだろう。それで結構飯が食えるのだから将に世は大平である。

優秀な人材を社会に送り出して国家百年の基礎を築くべき筈の大学が、盛んに此の弥次馬を製造しているし、政治家は国家百年の大計は愚か今日一日の政も祿にせず、昼飯が済んでも晩飯の準備もせずに遊び廻っている。野党は野党で万年野党の気楽さから評論家と称する弥次馬を煽てて破れ太鼓を叩き廻っている。

我々国民はもう弥次馬にはこりごりだ。昭和この方年々弥次馬が増え過ぎて遂に弥次馬の優たる軍隊に煽てられ一億一心皆馬鹿を見たそのお先棒をかついだ教師に煽てられて、我々の子弟は戦場に送られその露と消えて行った。割当てを送り出して後に残ったその教師はその勤務年限も含めて恩給にありついているばかりか今度は民主教育とかの名にかくれて勤評絶対反対安保絶対反対のと我々の子弟を戦場に送った同じ人間が第一線で叫んでいる。そんな無責任な連中に教育されているものだから近頃の若者の無軌道と来れば話にならぬ、法治国家であり乍ら遵法精神のかけらも学校では教えず、当局の道徳講習すら組織の力をかりてぶちこわし。全然道徳なんて教えていないものだから、社会の秩序を乱し破廉恥な行いを平気でやる、目下全学連で筋金入りの活動をしている連中が、嚮て日教組の中核体となり又は全国地方教育の第一線に配置されて、子弟の教育に当る、現在々学中の大中小学生も嚮ては国法を軽ろんじ道徳の道も身につけぬ人間として卒業し、国の各層に実権を握る身となるその結果は自明の理だ。

一体学校で教師は何を教えている。象牙の塔を出たトタン非行学生の統御も出来ず、白昼の放火暴行を手を拱いて傍観するだけでなく、卒先してその非行を政治の貧困の故にする。教師に指導する力も押える力もなく、本人に自省の念も道義心もなければ、無軌道になるのも当り前だ。ソコへ評論家と称する弥次馬は物事の価値や善悪を批評する力がなく、人の後ろについて吠え立てているばかりだ、何の圧力団体も持たぬ我々大多数の民衆は、箸の倒れ工合まで法規に引っかかり身じろぎも出来ないが、多数の暴力には建造物の破壊も放火も見のがし裁判所が仮執行すら出来ない。これを取材する新聞社も下手に正論を吐き攻撃しようものなら忽ち大組織に物を云わせて一挙に幾十万部の新聞がボイコットされることを恐れて、これに迎合こそすれ警告も苦言も呈し得ない。実に情けない営利紙かなと云いたくなる、矢張りこれも完全な弥次馬紙だ。

ソコへ来ると同じ営業誌には違いないが、我が川柳雑誌は主宰路郎先生が此の世に健在の限り「古くとも僕には仁義礼智信」通り世に阿ねたり時流に迎合したりせず、厳然と節を曲げず我が道を行ってくれるので有難い。然しようしたもので誌齢四百号を迎えながら発行部数幾十万を聞かぬのは甚だ残念だ。水清ければの古言通り、されど群雀の一鶴として本誌が如何に権威があるかは天下周知の通りだが、今後共微力を合せて弥次馬誌でない本誌をもり立てて行こう。

西宮地区柳界展望

――西宮支部

川雑発祥の地鳴尾を控える阪神間の川柳界は最近とみに活気を呈している。各句会幹事の熱心さに若い気鋭の作家を輩出し、常に新しい境地を開拓しつつ、いのちある句の創造に鎬を削っている。ここに各句会の概要を簡単に紹介し今後尚一層発展のための御指導御交流をお願いする次第である。

川雑明和病院支部

昭和二十七年療養者の句会青蛙会が生れ、川雑投句を始む。三十二年三月病院事務長西尾青一路氏を支部長として川雑明和病院支部を結成、西尾栞氏の指導を受けている。句会日は隔月下旬、会場院内講堂、句報「明和」発行。

明和川柳研究会

昭和三十三年二月明和病院退院者を中心として、河相すゝむ氏等の主唱で発足、西成支部その他各句会よりの交流も多く、自由な川柳研鑽の場として精進している。句会日は毎月第二日曜午後一時、鳴尾公民館で開催。句報「明和研究会報」を発行。

川雑西宮支部

西宮及び周辺地区在住の川雑系作家を糾合し、若本多久志氏を支部長に新分野開拓のため活発に活動している。特に新人の来会を歓迎している。句会日は毎月第三金曜日六時から西宮市立労働会館で開催、句報「宮水」を発行。

その他

西宮川柳同好会

句会日第三月曜日六時から西宮市民館で開催。

甲南川柳教室

毎月第二木曜日六時から新明和工業甲南工場クラブで開催。

はゞたき川柳会

毎月第四土曜日六時から新明和工業伊丹工場で開催。

西宮川柳連盟

西宮在住各柳社の合同により年一回文化祭市民川柳大会を開催、すでに十回を数えている。

所属会員名

（○印は不朽洞会員）

池田文女　西宮
植村白馬　同
内海敬太　奈良
鵜飼鮎子　西宮
○小倉へとち　神戸
大森一枯　同
大久保和三郎　京都
大石甘美　西宮
大石木綿　同
川村山友　同
○河相すゝむ　同
○門永三舟　同
○橋高薫風子　大阪
木田留三　西宮
木下輝尾　神戸
○小浜牧人　西宮
酒井丹謡　西宮
里田一ン十　芦屋
里　里　神戸
白石由美　大阪
新名誠子　神戸
末沢花美　西宮
○傍島静馬　神戸
恒成鯉太　同
塚田東雲　西宮
○徳永鬼美　尼崎
○富永柳洋　相生
○鳥本　泰　西宮
豊永一海　伊丹
中橋川太郎　西宮
○西尾　栞　大阪
○西尾青一路　豊中
○野呂鵜汀　西宮
○長谷川三司　尼崎
○林　夢虹　豊中
○菱田満秋　大阪
○樋口舟遊　西宮
樋口寿栄　同
藤田一本歯　同
本城弦月　同
丸尾蝶花　伊丹
松本一光　西宮
丸市民子　同
三上芙路　芦屋
水谷策平　尼崎
○室田千尋　神戸
村上球絵　西宮
森本猛彦　同
○山本一傘　同
山岡半歩　同
八色修児　同
山村正雪　同
安田義子　同
○吉本菁風　堺
吉田啓子　西宮
横川不二子　尼崎
○若本多久志　西宮

烏ケ辻の展望台

——大阪遞信病院烏ケ辻川柳会——

水谷竹荘

人間たまには過去を振返るのも亦、有意義なことだと思う、昔から十年一昔という言葉があるが烏ケ辻川柳会が生れたのは昭和十七年六月である、丁度今年で十八年の歳月が流れている、その間に多数の柳人を輩出しているのであるが発足した時は、方正、没食子、竹荘の三人だけであつた。昭和十七年その当時、元気であつた阪大の長崎柳秀博士を始め阪大川柳会の柳友を招いて第一回の烏ケ辻川柳会が生れたのである、その時から現在まで路郎先生の御薫陶を受けているのである。

毎月一回の句会で抜けた句を初めは、没食子が薬包紙に印刷して、同好の志に配つていたが、吉田斜木氏の入会後、鉄筆を握つて貰つて現在の様な烏ケ辻になつたのである。

その後斜木氏から「川柳大阪」の博也氏に暫く依頼していたが後に同人「愛論氏」が変つてガリ板をすつてくれたのである、その愛論氏も多忙になり、現在は印刷屋さんに依頼している、その間に編輯も、没食子から竹荘、史葉氏と引きつがれて現在になつている。

烏ケ辻の特色は表紙の美くしい事である、これは史葉氏の絵のうまさ素人ばなれがしている、烏ケ辻名物の一つといえよう。

現在同人は十八名、その内不朽洞会員は、十一名、客員六名、会長は方正、相談役として没食子、竹荘、幹事には史葉、愛論、幸男、蕗児、客員には北川春巣先生が居られるし、番傘の風船堂氏も出席される。そして毎月の例会の外に、六月には青葉吟行を、十二月には忘年句会を盛大に催すことにしている。

次に烏ケ辻同人の横顔と僕の好きな句を選んで見る、先ずは会長の方正氏から、

尾崎方正

氏は病院の耳鼻科医長で阪大時代からの柳人で、柳歴も古い、名句も多いが、その中で、

少々は毒もたべよう五十年

海老の絵と共にこの句をよく揮毫される自慢の句であると思うが僕の好きな句の一つ。

若林草右

若林草右氏は内科医長である、烏ケ辻の句会ではよく「天位」を得られる名川柳人であると共に句評もうまい。

名門は読めない軸を売りに出し

面白いうちに皮肉の効いているあかぬけした句を作られる。

足立春雄

氏は病院の産婦人科医長である、職業柄、女に接しておられるので、女性の句が多いように思うし、同人の中でも、中々の男前だから、遊びに行かれてもよくもてる事と思う。

又、只今洋行中なので話の種になりそうな句、

フランスの証拠エフエル塔が写つてる

市場没食子

烏ケ辻の発足当時は二人でよくあちこちの句会にも行ったし、川柳の為に苦労もしたし、面白い話も山程あるし、昔、市場没食子論を書いた事もある。

酔眼に映る名月いびつなり

（写真説明）
右奥より　桃村、風船賞、方正、愛論、蕗児
左奥より　竹青、没食子、春巣、路郎先生、
宏子、竹荘、幸男　（史葉撮影）

小沢史葉

烏ケ辻の編輯長であり表紙絵は特にうまい、僕の銀婚記念句集の表紙絵も書いて貰った。酒の好きな事は没食子に負けない烏ケ辻の両大関の一人である、仕事が多忙で烏ケ辻の発行がおくれ勝ちなのがみそ、又旅行好きなので僕とはよくうまがあう、句にも旅行吟が多い。

船室に寝るにはおしい四十九里

森下愛論

氏は川柳の外に詩もうまい、又中々の世話好きである。パチンコと麻雀は烏ケ辻同人中での第一人者、職業柄いつも身ぎれいにしている若手のホープ。

妻にない魅力求めて街へ出る

橘本幸男

幹事兼会計をしてくれている、毎月の句会の抜けた句を整理して原稿にしてくれる、史葉氏を助けて、副幹事長というところか、烏ケ辻の発行がおくれると、いつも文句や、不平の聞き役に廻って気の毒な事と思う。

麻雀をする程事務所仕事せず

桝本蕗児

蕗児氏も幹事の一人であるが、無口の方か余りしゃべらないが、短歌もうまい。

よくしゃべる女やないか暑いのに

中谷ハナ子

ハナ子さんは烏ケ辻での女性川柳人の花形である、昔は婦人友の会の岡野良子さんと並んで好一対だったのが、現在は紅一点というところ。

青空を仰ぎ西瓜畑を通り抜け

西辻竹青

竹青氏は僕と同じ職場に居るので川柳を、語り合う時が多い、号の竹青は、竹荘の、竹をわけて命名した親友の一人である。

心得て妓は糸をしめなおし

次は烏ケ辻同人中の新人の句を各一句ずつ抜いて御披露することにする。

蕎子型かいな六十まきを割り　池戸桃村

夕焼の道恋人は遠く去り　小野木凡平

愛のムチ親には高い授業料　真野康彦

食慾は八等身を忘れてる　乾静夫

二号にも浮気しないと誓わされ　木村よしを

ご機嫌の部長一人で喋りたて　生越正徳

腹が立つ程おしゃべりして帰り　西口竹志

独身と言うので世話も行届き　半田夏生

常連のいつものアレで用が足り　長谷川兎風

孟母なら新婚の窓見せまいに　萩尾千代子

盲点をつかれて汚職どろを吐き　稲森けい女

烏ケ辻の異色は同人が、それぞれ、何か持色を持っていることである、カメラ賞には、草右、史葉、愛論、蕗児、竹志、挿絵では、方正、没食子、春巣、竹青、舞踊には、竹荘、俳句は凡平、短歌に蕗児、詩に愛論、絵は史葉、余技の持ち主の多いことは有名である、又遊ぶこと。呑むことが好きが揃っているので、吟行と忘年句会だけは出席者の多いことは烏ケ辻名物になりそうだ。

最後に僕の最近の句

口先で儲ける自信を女将もち

川柳雑誌社　小松支部

不思議な数字

伊藤茶佛

母も、私も妻も、九月生れで、しかも、母と私は五日生れで、妻は六日が誕生日なのである。母は八十九才の誕生日を、文字通り元気で迎え毎日のお寺詣りが何よりの楽しみのようである。

三代目の小松支部を預って四年目、くわしく申上げれば四十四ヵ月で、しかも、本誌創刊が大正十三年二月なれば、三代目の小松支部を引受けたのが昭和三十二年二月である。三代目と言えば「売家と唐様に書く三代目」の句を連想して何となく気が引ける。しかし、私は本誌創刊号の第一頁にある左記のキャッチ、フレーズを座右の銘とし、心しているつもりである。

「現代人の思想にぴったりと嵌れた詩と言へば川柳の外にはない、我等はこの川柳によって人生を肉薄に批評して行きたいと思ってゐる」（原文のまま）

私の近況

道券茶の香

毎年梅雨明けの頃には、激しい雷鳴を伴った豪雨があるものだが、今年はそれがなく、何時の間にか猛暑に入ってしまった。

長女亮子にとってはすべてが新しいことばかり、毎日の暑さに、アセモになやまされながら、それでも元気に歩く練習に一生懸命である。お供をするこちらは大変で、腰を半分に折って、支えてやっているのだから、くたくたに疲れてしまう。でもこの調子だと、誕生を前にして、お盆にはお里へヨチヨチ歩いてゆけそうな気がする。お里のおばあちゃんの嬉しそうな顔が目に浮ぶ。

とに角暑い

千太郎

親が横についていると、どうしても甘えてよりかかってくるようだが、他の人に支えてもらうと片手だけつないで、五歩も十歩も歩くから不思議である。親の子守りは一面楽なところもある。だから私達は共稼ぎをしている。

暑い、とも何暑い、地方紙はこの暑さを、日本一と報じている。九州四国より酷暑というのでは風の前にしゃんとしているのがつらい、お向いの織屋さんの事務所が三十七度を記録したとか、暑い時に暑い話しはやり切れない。こんなとき、たとえ一枚の原稿紙でも、一字一字埋めていくのは難業苦業である。

さてと、手元の句集から夏の季感を集めて責を果すことにする。

應接間御免蒙るシャワとシャツ

これしきの庭行水のひたる幸

水銀の目盛りへ女の隙だらけ

実は城南さんにも手伝って貰って二冊の句集から二十分間に三句しか見当らなかった暑さでは句どころではないというように……。

この頃

村井城南

この頃、私の頭の白髪を見つけては妻が気にしているが本人の私はまだ、それ程でないと一向平気で、気はいたって若く、毎日を結構楽しく過している。仕事は職人の事とて、その日その日の稼ぎで休めば喰えないと言う割の合わないことではあるが、逆者な挿あり二人の子供の父として恵まれているとも思っている。したがって仕事からはなるべく離れるようにして職人がと言われながらも趣味に俳路をもとめている。

中でも川柳は熱病患者である。句会などで人の集まりが悪いときは自分のせいの様に切ない、ときには思いがけない人が見えたりすると自分が連れて来た様に嬉しくなる。私のこの川柳熱も感染率が悪く、私の町内に句会を持って三年にもなるが新人が育って来ないのが残念である。また一段と情熱をかたむけ川柳に打ち込みたいと思っている。

日本一

関戸宗太郎

日本最高記録これは木上石川の誇る山中や大崎選手の記録ではない、ここ数日来の石川県の最高気温、それに湿度が多くトルコ風呂に蒸されているみたい、お百姓は豊作を喜び句会は早鷲を奏いともに一と雨欲しいこの頃。でも句会は楽しい、残業が終って句会へ駆けつけると席題の作句時間が殆んど無く物足りないがそれでも句会へ顔を出さんと作句意欲が半減してしまう。句会はまさに作句の道場でありオアシスである。

去る日近くの末広球場で大相撲小松準場所が興行された。母が買うて呉れた前売券も弟にやり、裏の木陰で風呂場へ通う関取を見ていた。朝潮、若三杉、柏戸等さすがに他を圧する堂々たるもの。大剛かならずしも勝てぬ土俵に面白味があり魅力がある。ご当所力士が皆勝ち、寄りきりと押し出しばかりの取組には相撲がめしよりも好きな弟もがっかり、顔見せ準場所で力士も観衆もこの暑さに動くのが精一杯で本場所の取口を望む方が無理であった。ただ木蔭で見とれる母や子へ「おばあさん暑いですねー」と愛想よく声を掛ける巨漢力士朝潮の素朴さ、来場所の健闘を祈ってやまない。

丹波高原に文藝の花を

篠山支部　酒井ひか平

篠山支部の合言葉、丹波高原に文芸の花を、川柳の芽を育てたい。これは、指導者、小西無鬼先生が昭和廿三年、路郎師を草深い、丹波路に逸早くお迎えし、当時の関配文化活動を開始されるに先立ちモットーに掲げられたお言葉である。以来十有五年、無鬼先生の蒔かれた一粒の種子は、川雑篠山支部として立派な成長をとげたのである。

只だ、路郎師への一途な信仰的な尊敬の信念が、心の支えであり闘志であったに違いない。再度師をお迎えする頃には、川柳人、五十有余を数え、不朽洞会の三役を揃ってお迎えする痛快な光栄に浴した。

折柄、名物、さくら吹雪の下、師と葭乃夫人の相合傘、理事長、副理事長の睦まじい相合っぱ等々の、今にして懐しい記念写真の数々が支部のアルバムに大切に残されて居る。

川柳まつり大会の優勝一度、無鬼先生の指導面、作句面での活躍は、川雑誌上大書されてよい記録であると信ずる。

支部を代表する作家に、前期の家沢奔花、永尾永断両氏を育成、不朽洞会員に前川左文字、岡沢凡志氏を推せんし、後進作家辻文平、出口白猫児、川原みのる、遠山可住、常岡孝風、女流作家に畑小菊、初穂の友の会員を出し、以後新人の後を絶たぬ支部篠山、句報川柳ささ山は近く八〇号を迎えるのである。左文字君は毎号素晴らしい表紙画を発表され、可住君のプリントは玄人はだしと言った腕前である。毎号各人の作句と共に篠山支部の足跡がこうして大切に保存されて居る。

和気あいあいの無鬼一家篠山支部に、もめ事は今だかつて無い。

夫婦柳人、冨士子夫人の内助のお手柄が、こうした和合の面でも現れ、川柳なるかなと自慢の一つもしたい平和を保って居る。

然し、日進月歩の昨今、自画自賛は許されない。将来の計画、発表を望むとき、未だ、六万石の城下町であり、市制を目前に足踏みのもどかしさ。

今一歩の壁を破れぬ悩みは母胎の町政と共に、当支部の痛切な問題である。

祝賀記念自選句集

大阪市　橘高薫風子

春の雲旅に出でよというごとく
四面楚歌故郷は豆の花の頃
キリストの肋に似たる昼寝をし
檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし
都会の夜セロリは母の香に似たり
クリスマスカードの雪はしずかなり
除夜を聞く一つの旅を終えしごと

堺市　吉田圭井堂

割勘で来ても下座へすわる癖
生きられるだけはと子等の気も知らず
役に立つ看護婦奥の気に入らず
客種に知事もされてるにぎりずし
人ごとで人生欄の面白く
仏滅をさけて入院さす弱さ
腹案は儲かることになっていた

豊中市　戸田古方

ぬくみうれし妻の敷寝のズボンはく
上げ潮にさからいかねているヒトデ
ゆたんぽの底の値札をはったまま
伜のタバコ一本もろてからねむる
孫ひとりこんなにおしめもって来た
青空の底の知れないのがこわし
日が暮れたらねるんだったね老子さま

兵庫県　戸倉普天

土足のまま備うてあがるも留守の事
村放送下駄のかわった事も云い
葬式の出たあとにある煙草盆
寺荒れてしよう事なしの鶏を飼い
老夫婦宿の給仕も放っとかれ
借りて出たカメラは花に置き忘れ
あざけられけなされパチンコ殖えて行き

児島市　本田恵二朗

山のバスゆうゆうせまらずエンコする
記事になる気で心中したわけでなし
ハイヒールそれみたことかよろめいた
噛みついてみたが人柄歯がたたず
パチンコで損せぬ指を五本持ち
道聞えば方言微に入り細に入り
ここからは運にまかせてこせつかず

大阪市　児島与呂志

口答えする子へパパがにやにやし
どん底の暮しいや味もよう云わず
戦歴を酔えば語れる彼と飲み
気ぜわしい奴やと一人でバタバタし
忙ぎ足妻の勝気のままの音
誇大妄想ずぼらな男に成り下り
気にかかるペンペン草もよう抜かず

山口県　長野井蛙

聴かないことにして置くと課長逃げ
税務署へ親指可笑しい程あわて
目の保養したと女の敗け惜しみ
家内とも相談してと頼りなし
金のこと以外ならばと先手打ち
酔うて云うのではなかろうねと釘をさし
あのどこが好いかと野暮なことを訊き

山口県　国弘半休

休業の札がクルクル春の風
風呂敷に寝て青空の広さ知る
くぐり戸を押せば二階の台所
「スリ用心」スリも用心して盗み
人間の臭いを捨てに立つ夜風
千円の保険証書が阿呆らしうて
年寄りを「年寄」言うて叱られる

岡山市　逸見灯竿

山緑小鳥囀る中の恋
汗かいたのが汗かいたのへ道を聞き
特種を秘めてジョッキの味となり
草だけはよく伸びる庭秋を病む
お隣へ留守を頼んだ秋が澄み
柿を盗る約束指切りして別かれ
人が買うのを見に行った年の暮

加賀市　野村味平

画才があってノートを粗末にし
全学連デモを習うてどうする気
酒きげんこれもって行けあれもやろ
台風がそれたうれしさ足袋を脱ぎ
これが恋かと智恵子抄を伏せ
春雨にショボショボショボとドサ廻り
鼻声で仲居も呟う枯れすすき

大阪市　浜畑胡蝶

看板をはみ出しそうなめしの文字
銀行の隣に住んでこそばゆし
出て歩くだけが能なり替ズボン
不覚にも恋のきめ手を知らなんだ
父に似ぬ児で母親淋しがり
御落胤髭の手入に余念なし
黙否権とうとう妻もやってのけ

岡山県　直原七面山

澄し給うなセックスの世に
柔肌に触れさせもせず恋と云う
秋だなと金を持たない者同士
胸病めば科もつ如く人をさけ
一瞬を惜しむが如く抱く二人
いつからか子供は親のものでなし
北風へ母が恋しい靴磨

東京都　山根白星

辛うじて住む東京をうらやまれ
金持になれとは母ののたまわず
鏡台を並べてみんな不倖せ
前借で来た娘邪慳に父と会い
政治力とかは田甫に駅をたて
ドルだけで買えぬと知った月の裏
薄情を言わず尾を振る昭和基地

岡山市　服部十九平

うるさ型圧えるためのいろは順
神様へすがるてだけがまだ残り
天才を殺して了った民主主義
インテリが村の平和の邪魔になり
火の用心自家の前でも一つ打ち
愛のこと二二が四では割り切れず
奥さんの留守に子守が子を叱り

豊中市　林夢虹

孤独の日人の心の素直なる
足萎えを淋しがらすな山だより
恋を恋して少女のペン習字
バー出れば鼻の先から冷えて来る
春の陽を掌に受けている盲少女
麦熟れる頃少年の性に覚む
河鹿ころころ月の光を声にする

大阪市　丸尾潮花

手をひけば影もあまえている月夜
灯がついているに音させぬ新地
ハイヤーで送ってバスで帰る恋
濡れて来た傘花びらをたたみこみ
手鍋まで提げる気もないひとと添い
面影は老けず十九のままでいる
添乳するように女も横になり

大阪市　藤村梨花

草萌える春の希望はねたいだけ
たまさかに酔えばこんなにきれいな夜
ブローチへそっと手をやり夢があり
青春もすぎてクリーム色の恋
君を恋う琴はきこえず嵯峨の風
人肌のぬくみにも似て春朧ろ
誤解とけぬままに時雨の街へ出る

大阪市　市場没食子

顔ぶれに圧倒されて酔うて来ず
百万円たばこの老舗さえ買えず
中風で寝てても慾であきれられ
兄弟の呑めぬ浮気と呑む浮気
奥さんの死ぬのを待って二号老け
ぜいたくな肩が凝ってる春三日
事なかれ主義を労組コヅキ出し

大阪市　魚住滿潮

近衛東条ああこの人もふしあわせ
パン助と呼び同胞をかえりみず
大臣に訊うことがある昨日今日
法律にふれぬ盗人ばかりの世
米を買う悲しき千円札となりぬ
大阪弁政府の痛いとこを突き
ハッハッハッお金の仲仕だなと思い

大阪市　石倉旅風

味褒めたとたんわかめの石を噛み
要領を覚えて街に住む雀
大阪に住む義理すます通り抜け
独り者ポケットまでも縫いつけて
御本尊偶像だよという如し
よろこびへ墨の黒さを確かめる
灯を消せばやはりうちわの風がよし

大阪市　平沢保美

日曜日妻と朝刊分け合うて
物を買う快感お釣忘れて来
十二月ハイと言わない妻になり
洗濯機あんたも憶えときなさい
子を叱る声から朝になる我が家
すし屋でも女がリードする夫婦
商売の上手いやっちゃと見下げられ

大阪市　欄蘭

掃除器へ蚤も一緒に吸い込まれ
台風のコースはパンが売り切れる
赤い服犬にも見せる女の子
電化しても米はやっぱり手で洗い
デシャ焼きの女房隣りのすしを巻き
友情に缺けて孤独な暮らしをし
タイムレコーダー押す手生涯働らく手

大阪市　西川晃

次々と阿呆ばかりの来る日なり
生れ変りますと便利なことを言う
無から有生じ神殿華麗なる
香煙　る　る　手ぶらで昇天し
血のような雨日屋の屋根を洩り
無駄費いする尚さも子に訓え
大悟した姿でくらげ浮いており

大阪市　後藤梅志

虫の声もう何里ほど来ただろう
あばら家に八ツ手一つが陽を支え
曲った家に又一つ棚
坑夫かしら山越えをする子を背負い
パイプ掃除するはりがねも横にある
生れたての泣声をよしと思へり
夜汽車いま風に乗ってる音になり

京都市　大鶴喜由

この春をここに集めた儀装馬車
中学生大人を真似て子が産れ
糧続く日のうららかなることよ
あたしの人撰ぶに言葉過ぎる母
泡の一つ一つに貴郎がいるタライ
肉は寄らんとし心逃げんとし
リボンあかあか理想のハズは何処にいる

岡山県　田村藤波

気まぐれの撞いた鐘らし一つ鳴る
趣味ない証拠返事が生ぬるい
生活に困るエプロン白すぎる
商魂はがしんたれから培かわれ
信用をされて職人手がぬけず
仲人の言うた博士になれぬ婿
叱られてばかりいますと嬉しそう

岡山県　岡田夜潮

撥の音舐めたら妓笑顔せず
アコディオンのよう鼻紙を開け閉じし
かんしゃくの煙草の煙輪にならず
詰めよられても耳糞掘っており
涼み台みんな欠伸で別れたり
カンガルーのように炬燵で子を抱いて
おもねってボスの銅像説も出る

岡山県　浜田久米雄

二人とも銀婚式の日を忘れ
春の酒障子をすこし開けに立ち
火葬場の煙が横に這って春
四月の灯煎茶をすこしよばれ過ぎ
夏やせを見事にやせたなと云われ
手を口に持て行く合図ついて出る
かまぼこを男が切ればほほえまれ

倉敷市　田垣方大

着換えする間むこうをむいててね
麻雀とあたしとどっちなのあんた
デフレかてお向いさんは着ています
課長になったら面白い会社
ぬらりくらり逃げて課長らしくなり
プライベートでは課長を呼び捨てる
よその課の課長気安うものが言え

大阪市　大谷月都

さりげなく無芸の前に老妓坐し
流木を拾って焚けば冬の色
バスで見た人が迎える山の宿
家計簿をつけてる横で本を読み
作品を見る目で花嫁眺められ
伸びをして電車を降りる暇があり
男、男、己が知性に酔う如し

兵庫県　前川左文字

ふれるもの見るもの僕と君のもの
口づけを静かに待っているこけし
よき人の手には素直な花なりき
夢で逢う君じゃなかった振られよう
死火山じゃなかったこの頃紅を引き
貸ボート今は子供のために漕ぐ
樟脳の香い着て妻どこへいく

大阪市　村山光輪

祖母ふっと昔を偲ぶ花を活け
御成婚記念に妻は鍋を買い
末の子も金魚すくたを自慢する
袈裟拝領したが十誡守りかね
反り橋の晴着初日に燃えるよう
ボロクソの批評最中ホームラン
タンポポも食べたであろう牛引かれ

愛媛県　槇紫光

異性からもてる秘訣を妻に聞き
愛は惜しみなく与えて疑われ
好きだった娘ゾロゾロ子を連れて
淋しさを女は体じゅうで見せ
倖せを祈って見たが少し妬け
勉強見てもらって好きになりかかり
眼が合っただけで楽しいのも恋か

大阪市　伊達堰子

お手前のお薄もどこか京の味
餅代も危のうなってスト終る
靴磨き親はあるでとうるさそう
紺のれんひやりと家風感じさせ
骨にする煙はなおも山を恋い
生前は通るたんびに寄った人
商才を見抜いた方も船場の娘

岡山市　江国幽谷

突出しの辻うらにたりにたり読み
悪阻の背撫でてあんじょ敷かれとり
あきらめて見れば転任地もたのし
三分ほどたらない下女でよく動き
趣味のない男が庭を掃いており
朝刊を見たかと事務所騒いでい
流行か知らんがあれで奥さんか

岡山市　光好陽子

塩だけは切らさぬ母の台所
新入社オールドミスに指図され
何党も支持せぬ男で金をため
気味悪いほど母の日にいたわられ
雨だれを見とれば失恋かと聞かれ
お帽子にハイヒール四十には見えず
手相見て貰うに市場籠をさげ

大阪市　西尾栞

交渉はギブアンドテイクの肚でいる
チト低い鼻でサービスゆきとどき
最後の最後の味方は妻なりき
手術二日女は化粧するという
口八丁自分の恥もさらけだし
宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来
持って死ねなんだらしい銀行から樒

尼崎市　長谷川三司

久し振り京は雨なり雨もよし
春浅し一人で飲めばなお淋し
旅人へどこまで続く菜の花ぞ
画廊春青児の裸婦の銀の色・
終りかと思う喜劇のまだつづき
星を美しいと言う女の手の冷たき
水うまし老後を頼る子とてなく

大阪市　稲葉鳩花

才能も主義もないのがもてていた
生きている姿だ情にすがるまい
逢えばただもうかるかとは淋しいよ
子がいてもうすい化粧で迎えてや
木枯よ吹け吹け僕はサンドマン
べんちゃらもしたがあっさり整理され
すねてみることも教えて嫁に出し

西宮市　野呂鵜汀

とっぷりと暮れてススキの穂が怖し
情慾に負けて無力な人と居る
口あらば老木古事を語りたし
金蔓と思えば腹も立てるまい
一本は女将餞別代りなり
又逢いに行ける用事を残して来
生きようとすれば家名が邪魔になり

西宮市　樋口舟遊

案内の好みで歩く京の春
現金でなければくれぬ顔になり
手に付いた糊はずぼんで拭いておき
妻欲しいと思う日あり米をとぐ
二番目に好きな女と持つ世帯
からたちの人を疑ぐる棘をたて
我が影の疲れを知るも十二月

新潟県　高野むじな

肉親としての嫌らしさへ黙す
恋愛結婚でしたと云うになぜ笑う
学術優等を悪い方へ向け
旅帰り女はシャンにして話し
先生もお悔み習うて来た言葉
監査受けるに作り笑いもし
順序不同とドン尻を慰める

柳井市　弘津柳慶

冷蔵庫次々帰った子が開けて
禁酒禁煙いっそ毒薬飲みましょか
月光仮面が又宿題で叱られる
和服着て洋間へ肩がこって来る
温泉へ着くなり牌をかきまぜる
電気釜それから里帰り多くなり
連休で疲れきったる御出勤

大阪市　菱田満秋

集団の威力蚕が音をたて
男の子何になるかをまた訊かれ
記憶なる悲しいものを持ちつづけ
意見するだけの親戚ばかり持ち
男の眼すでに衣服を剝いでおり
人殺し遊ぶ間もなく逃げまわり
大自然はいいなあ小便もっと飛べ

豊中市　福田妄夢

信号を無視した犬よ轢れるな
消しゴムに似たり働きすりへって
溜息をつめた風船ふくらんだ
散らすには惜しいお嫁が隣りへ来
たばこと妖婦は同じかな白き肉体
雨の宿寝ましょ寝ましょの音になり
葬式に松・竹・梅と級があり

大阪市　**松江梅里**

割箸で名指しをされる平社員
途中から抜けていつものとこで逢い
顔のきくとこは本日定休日
社長ともなれば小唄の二つ三つ
貸附けに居て飲むことの多かりき
プラカード鰻の匂う橋に佇ち
板囲いしても賽銭箱はおき

大阪府　**川村好朗**

衆目を彼氏の方が気にしてい
桜なら堺刑務所今見頃
アルバムにはっときますとそのまんま
五十やっと親のすべてがありがたく
別れる気スタンドさせの金くれの
集金へ自費の手土産までも捧げ
式すめば別居どころかこきつかい

西宮市　**若本多久志**

袈裟ころも脱げば毛脛の凡夫なり
お流れを頂戴に出る自己嫌悪
御高説だんだん痛いとこにふれ
自己紹介会長やったことも言い
仁王さんあぐらをかいてみとうなり
請求書飲んだ覚えは二三本
倖を信じて茲に女生き

大阪市　**河井庸佑**

日が落ちているのにサングラスかけたまま
ずぶぬれになっても遠足楽しそう
強いのが負ければ八百長だと騒ぎ
炭を焼き世間にうとい人となり
入社してみれば半分つぶれかけ
出来ぬ子の親の期待が大き過ぎ
参観日新教育をはがいがり

京都市　**室井八九寸**

偕老は日永を欠伸うつし合い
子の棺へ玩具を蓋の出来ぬほど
成人にまだまだながら母代り
感泣した親に逆らい鉢巻し
学生へ盗せば飲みぷりもう成人
人間の裸抱き合う茶碗酒
ボタン一つで亡びる国にロッキード

善通寺市　**松岡委滄浪**

重役で新生を喫う味気なさ
存在を匂わしている反対論
停年も近く是々非々主義で居る
火を借りてバット喫うてるなと思い
履歴書のような名刺にぶっつかり

鳥取市　**森本法泉子**

幼稚園一人は山の方を向き
子をおいて出た買物が割ぼう着
男手の針にはながいながい糸
モーニング煙草を入れるとこがなし
機関車の入替え駅の日の永し
風呂敷も洗えば白くなるものを
小切手の署名は取締役社長

鳥取市　**北村三歩**

長男出生

産声の大きさ電話に言い添える
課長より小さい判をこさえとこ
一家五票組織の内へ読み込まれ
保険屋も紹介をする趣味の友
大小のある両輪と気づかざる
言い訳の後半分は妻がする
無視をするつもり事後承諾などと

唐津市　**新岡回天子**

だあまって一本つける妻に謝し
芸が身を助け男を養えり
あの顔にこんなにもいる化粧代
再出馬すすめる庭に菊盛り
自家用車までとは言わぬ妻の夢
三人の無料を連れて母せわし
娘だけ見れば長者の様ななり

大阪市　**岩崎一伸**

借金があって月日が早くたち
漏電ときまって火元落付けり
倖せは唯一筋に頼るだけ
八百長の声をいなして賞を受け
裏切りも予定に入れて票を読み
極楽のあまり風なと慾しい宵
逢曳も知らずそろそろ禿げて行き

大阪市　**河村瑞川**

特価品寸を計らず買うて来た
すっかりやられ戸締りに気がついた
駄目ですわと云いつつ魅力まだ信じ
どん底の頃の仲間が祝いに来
御迷惑でしょうがと弱点ついてくる
かけもちの女優空からかけつける
さい銭を胸算用して拝んでる

大阪市　**中島生々庵**

極楽へ来てあの人が見当らず
もみくちゃにされても人出お気に入り
長生きを年よりの日にてれてみせ
手土産の代りにキッスとは嬉し
故障した呼鈴に似た男です
頑固さがわざところんだ様に云い
人知れぬ勇気で妻のヒスに耐え

大阪市　**中島小石**

片手落ち神は女にだけ産ませ
すれ違う丈で嬉しい気の弱さ
足許にある倖せに気が付かず
誕生日忘れる程の長寿なり
いいたい事言える勇気をほめてやり
実力の差とは内心不服なり
手ぶらでは気がひける程もてなされ

大阪市　**牟田一哲**

茶柱を気にする程の弱りよう
新郎は扇の位置を教えられ
悪人の人権だけが認められ
入学へ悲喜交々の暮し向き
不満顔見せぬ貞女が遂に勝ち
自宅へも時々帰る主人なり
直言で損するあたり親ゆずり

大阪市　**安岡珊枝郎**

走り書家宝となって残される
親の子とまだ酔わぬのにほめられる
問い合せの先までちゃんと教えとき
あべこべに下ッ端共に指揮をされ
脱線と見せて要所はおさえとき
御養子はちと気短かな甲斐性者
芽が出ぬと今日も朝酒のんでねる

大阪市　**山川阿茶**

共稼ぎ外で飲まさぬ酒を買い
先生をママが誘惑しそうなり
酔うてようおやすみですと電話が来
子が無うて学生さんの世話をやき
舞扇孫の色気にはっとする
丁稚から上った婿によく仕え
溜息をお乳のむ子が下から見

大阪市　**平尾太希志**

脱線へ法螺までそえた立志伝
脱線したりすねたり女忙しい
至芸の魅力顔や形でないを知る
伐採に抵抗するかに新芽出し
極楽なんてフフンと笑う十世代
存在を無視されたまま〳〵切られ
道頓堀会うてはならぬ人に会い

兵庫県　**酒井ひか平**

十二貫柳に風と暮らして来
君の風邪ならとキッスをしてしまい
善人だったのに葬式は雨になり
鉄砲の音で丹波の霧が晴れ
頑として牛はゆっくり用を足し
ガガガ〳〵とあひるは妻をいたわれり
初風呂でくしゃみするとは運も知れ

岡山市　武部香林

敷きのしの重しとなっただけで暮れ
総白痴化よそに本屋は本を刷り
信頼に応えんとして身を削り
ターミナルの激しき中の孤独感
宿替えの荷物となって手をひかれ
すれちがうものみな風を切ってゆき
頬にふれるは秋の手のひら

岡山市　武部若菜

おっさんのズボンで林檎ふいてくれ
スピッツにはよくしゃべる口もっていて
がんとして下座に女らしういる
車車流れ作業のように来る
酒の味芝生が少しあればよし
妻の眼が問に合うてくれない医学
松籟に聞き入るは墓と私と

大阪市　北川春巣

ロシヤ語で食える日本になって来る
怒り初めやとお父ちゃん無視される
夫婦げんかで買うたテレビとは云わず
電熱を煽ぎたいほどあわてて
犬連れるようなものだと孫を連れ
出不精も遺伝するのか親と子の
うすいとは云わず帽子を妻すすめ

鳥取市　杉谷湖山

たまに見た映画はキッスばかりして
嘘言えぬのに仲人を頼みに来
うるさい旦那で仕事渉らず
団体の客にすまない雨となり
辛抱をせよと給料には触れず
出戻りのいっちかわいい娘なりしに
貝柱好きだと老いの一轍な

笠岡市　木山遠二

老人のつもりで居たり居なんだり
日日好日鶏と豚とを可愛がり
女房に買被られたまんま老い
長生をして小遣いを子にもらい
睦じく行儀正しく老夫婦
火鉢に火炭かごに炭客を待つ
懐へ入れると借金でもぬくい

高槻市　福田丁路

ポンポンに嫁はんがあり髭があり
泥沼へ斬られて転ぶ役がつき
目と鼻の間で競う焼芋屋
かまきりのけなげに迎え撃つ構え
永遠の愛を気軽に誓うとき
明日も亦かくてありなん投げキッス
急転直下離婚しましょうそうしよう

大阪市　金井文秋

たいていやないなと晴衣ながめられ
これ着替えなはれがボタン取れたまま
幼稚園で泣いてた事をまだ言われ
アルバイトするのに家業手伝わず
襖ならこう張るものが皺になり
一冊きりの雑誌を汚ながって買い
立読みの子におっさんはけちくさい

大阪市　西田柳宏子

腹案も言わずへまだけ叱りつけ
学生の味を末っ子だけが知り
立志伝裸一貫からにする
親譲りしたくない処ばかり似て
裏通り許り食通連れて行き
正月から止めやとパチンコまだ続き
学歴はないが話せる親父なり

大阪府　高津徹也

功成って裸一貫が口に出る
ジャンケンに三つしかないおもしろさ
ピースと葉巻すでに相手を制しけり
発奮を誓った水の冷たさよ
残業という口実が憎らしい
かけ込んだ書斎で覚る親心
グランドピアノ持つ娘にもしたくなし

大阪市　太田良子

髪そめて見たんやけどと妻若し
でこの蚊を叩き落せるのも夫婦
長男の重みへ母はへこたれる
裸に近い正装出来るのも女
ちょっと痩せたんと違うかとなでられる
時間外女医は割烹服でいで
子が病めば母の勤めが狂いだし

鳥取市　河村日満

神も仏もあるかと戦後から変り
眼に注射誰か医学を信ぜざる
子へ便り書く妻老けて老けて見え
懲戒解雇かくて男女のいくたり目
岸内閣誕生
ぬけぬけと舎弟も連れて坐る椅子
蚕取ってもとの寝息にはやい妻
皆母の背丈を越えて育てられ

宇部市　津秋六花

白衣着て稼ぎ背広で呑みに出る
上役の子へ勝って来たので叱り
呑んですぐ寝たが女の気にいらず
のし上げりゃ兄が下座で酌をする
お隣は公僕今夜も酔って居り
一国一城の主です鶏を飼い
お役所が下から出たで恐いなり

大阪市　西出一栄

裸一貫やけで飲んでる酒でなし
腹案の先手先手を打ってくる
仲よしの今日の欠席気づかわれ
裏門へ弱味の金を親は積み
逢曳へ鈴を落して猫戻り
玉串へ敷かれますとは言わなんだ
なみなみと酌がれ口から出むかえる

大阪市　酒田清子

和やかなムードを孫がまきちらし
雲行きへ猫ゆっくりと膝を下り
味のない膳は子供の居ない夜
未亡人世間の口が地味にさせ
靴ずれの痛さ知ってるセロテープ
もう誰もふり返らない松葉杖
仕事始め芯から酔がさめぬまま

堺市　吉本菁風

朝刊が来て寝しずまるお茶屋筋
学歴のある勝負師で線細く
店持てば屋台の頃の味でなし
年老いて男こせこせ云い始め
金出来て常識的な作を書き
男一人四季の着物を壁に掛け
黒靴をわざわざ買うて式を挙げ

大阪市　藤村〆女

満ちたりた顔かな孫をだく夫婦
兄ちゃんと呼んで遠慮のない夫婦
ごうせいな水引だけの記念品
盃がポケットから出る二日酔
インテリの無力な男持てあまし
杏音のそのままこおる帰り路
女手に角帽きせて夢多し

岡山県　池田古心

墓孤独わずらわし世をすねし如
内助の功趣味も嗜好も皆禁じ
不運なる印なり金を借るだけに
男好きと云う顔男見逃がさず
よろめいているなと世間すぐ覚り
二十四時寝てよし売って居らぬ身は
花見とは酒に呑まれる面白さ

奈良市　宮口笛生

児が一人ええわええわで育てて来
さしで呑む相手でもなし女中くむ
事故あった明日の機関車ふと怖く
ネギ坊主畑の隅まで来てた春
ハイボール機嫌の女美しく
終列車一駅毎の空席よ
恋夢中まだ喫煙の煙消えず

大阪府　友淵貴山

賽銭にうなずきそうな御本尊
ベニヤ板にかけられ裸体画も淋し
ワンマンカー車掌を離縁した姿
時代には勝てず支線へ来た車両
旧街道わらじ売ってる店で飲み
信濃路の気分を寺でこわして来
素通りも道理ペンペン草の屋根

堺市　辻圭水

前身を聞くまいなくてはならぬ人
天才と云われ友とはしてくれず
冗談も解せぬ妻と居る不幸
良心を偽るための酒を飲み
迷信と思えど神主祝詞あげ
川柳で本心云えてほっとする
口八丁ハイと一言言いにくく

堺市　高崎雄声

過ちが親でよかった笑うてすみ
待った雨二日も降ればぐちとなり
押ピンが一つなくとも事が欠け
殉職で一躍模範社員なり
言われてからするのはいやとアブレの子
おまへんと大阪弁のにべもなし
若いんだからと落選いたわられ

堺市　田中狂二

出直しと言う元日に酔いつぶれ
花札が一枚足らぬ置炬燵
娘と散歩今宵もコーヒーおごらされ
未亡人仲にはさんで夕涼み
義務無いと悴はっきり云ってのけ
アルサロで誰れかに孫の事云われ
秋夜長すみきる空にみをつくし

大阪市　西森花村

何時見ても天国何も食べていず
俄か雨銅像だけが馳け出さず
秋であるキリンの耳がそうかたり
にじりよる様に近づく十二月
根が生えた様に動かぬ露天商
尾があれば振って見せたい立候補
警棒の痛さを社会科で教え

神戸市　傍島静馬

名子役小学校へ行きたがり
もう用事無いかと祝儀ほのめかし
わたくしの趣味は仕事と大きく出
産院へ夫うろ〳〵しに出かけ
神さんの一番前で拝んで来
結納を仲人だけが急いどり
ややこしいみせではビール飲んでおき

下関市　中村九呂平

砂文字を誰も知られず波が消し
案外なとこから真相つかんでき
真白い花が怒りを和らげる
悪友にされてその場のけりをつけ
ハンサムが島に汚点を付けて去に
無駄骨の足が重たい戻り道
すこしならよかろう薬の気で酌がせ

小松市　伊藤茶仏

皆んなよい人だ金持ちにもならず
手の届くとこで人妻はしたなし
交際費使っただけでもう転任(かわ)り
無軌道な世間が母の腑に落ちず
父さんが帰り家中酒くさし
貧乏もいいものやなと夫婦きり
世の中は厳しきものと決めて寝る

石川県　那谷光郎

処世訓妻に聞える声で読み
仏には活けた残りの屑の花
出直して仲人口が又変り
俺の顔床屋無断でねじ曲げる
こんなにも扶養家族の飯茶碗
置くとこに置けとつまずいたで叱り
出戻ったその鏡台も邪魔にされ

大阪市　**正本水客**

窓ひとつひとつに人間がいるクレヨン
霧雨はうごかず社務所灯がはいり
鏡台の前のあぐらを邪魔がられ
洗い髪おとこに見せるためでなし
一番になった子黙って風呂へゆく
踏切はジンガジンガと夕焼ける
ページ繰ればページの間に冬がいた

京都市　**松川杜的**

労組費払ろてた時代をなつかしみ
携帯ラジオも止めてハネムーン寝るつもり
市場籠の中まで夕焼け赤く染め
釘を打つ事が好きです男の子
二等車を闇屋ドヤドヤ通り抜け
立読みの向いはてんぷらあげる音
カタコトと車窓で牛乳瓶が鳴り

倉敷市　**野田素身郎**

手伝ってもらえば肩を揉まされる
共稼ぎイチニイサンで二人起き
代議士の花輪がボスの死へ並び
旅三日枕の高さにも慣れる
栄転の机の巾を撫でてみる
先代が見下している社長室
ひき逃げはそんな大物とは知らず

大阪市　**冨岡淡舟**

逢うたのも別れ話しも中之島
さざえの香りに淡き郷愁
生活の事を想えば黙すのみ
職階に押えられない主義をもち
思いきり血を吸えやせっぽちの蚊よ
へこましてやれば長男むきになり
他人様の事やで話しだけは聴こ

西宮市　**小浜牧人**

共学のテニスコートへ春が来た
婚約を隠しきれない顔となり
退院と決まりはがきを買いにゆく
委員長ビタミン剤を噛み砕き
せっかちな便りを呉れて老い給い
一と杓の水薄命を悼むなり
串カツで酔う人生に嘘がなし

神戸市　**仲どんたく**

青春がのたうちまわるロカビリー
ドライヤーの中で練ってる夜のプラン
あぐら組む娘へも来た聞き合わせ
もう三年でっかうちは五年と後家どおし
インテリは数字でものを云いたがり
　白浜にて
あいあい傘今宵は年を忘れよう
　熱海にて
貫一を蹴とばしそうなハイヒール

平田市　**久家代仕男**

婦人会酒は男のものならず
後進のなどと辞めたくないくせに
飲めぬのを承知で酒を出したがり
カラカラと笑える女史に子がなくて
井の蛙泳ぎ疲れて汲み出され
云うなれば高野豆腐に似た君よ
　緒酔翁君退職
恬淡の君を大地が待って居る

岡山県　**福島鉄児**

褌でも取って酌でもせんかいな
時代ずれしてる頭と気付かざる
待つ妻を想うた事がありますか
金残す方では親に似ておらず
洗濯へ邪魔な小さい手を叱り
主婦の座に戻れば女医も子がもつれ
結論を云えと邪魔くさそうに聞き

大阪府　**早川清生**

茶の師匠散歩の好きな夫持つ
他所者のかなしさ景色ほめて住む
吝嗇も継いだを養子気がつかず
楽団で笛吹いてるへ初老くる
自嘲とは知らず後妻も笑うなり
生みの母探し当てたが二度と来ず
詐欺の家逮捕にゆけば鯉のぼり

豊中市　黒川紫香

鉋屑下見の靴でまた踏まれ
改札へ新聞を置く顔馴染
スト解除妻と子供は出かける気
のぞかれてまたも釣場をかえに立ち
貫禄がついた時分に停年さ
年の瀬は可もなし不可もないひとり
惚れている弱味ぼそぼそついて来る

枚方市　菊田いさむ

凡人でよし弱味などない生活
寒空に金閣寺までちと鈍り
商才は一坪ほどの仮事務所
学歴を職安軽く聞き流し
大金を持てば非力は持て余し
子の花火耳を押えたまま走り
腹案を同感したら頼まれた

大阪府　林昌男

誰も居ないのでコケシにキッスする
検温器去年の熱が残ってた
こちらにも言わせて貰う帯をしめ
キスミーの匂いきれいな嘘を言い
手袋の白さ欠伸も美しい
膝借りて女泣きたいことがあり
申告書子供の年をまた忘れ

名古屋市　野田一念

黒帯の猛者も口説きの手を知らず
雨の漏る屋根の下にも夢があり
遊説をして見て悪路よくこたえ
喰い逃げに執行猶予にはならず
ガム噛んでうっとり人の恋を見る
集金に泰然自若観世流
抱擁にキッスに秋の陽は落ちる

岡山県　永松東岸

さくさくさくきうりをきざむ音たのし
勤労奉仕煙草がへらぬまま暮れ
歩のような男規則をたてにとり
フェミニストお好み焼きについて行く
勉強もろくにせぬ子の委員長
税務署に勤めましたと小そうなり
極道も少しはせえとはげまされ

姫路市　植村客遊子

十代の意見も入れて普請する
丁重な言葉で学士こき使い
風鈴が鳴れば負けずにギースチョン
（森山句会にて）
六万石豊かにみのりデッカンショ
横着な物乞い頭さげたきり
家族湯の窓から雪をわけてたべ
饒舌のマダムパトロンと居て静か

兵庫県　吉原紅月

塩辛い汗下積と言う意識
天主閣雲を呑み込む様に立ち
気が付けば友達みんな嫁いでた
人間の弱さ他人をこきおろし
札束で叩かれたらしボス帰り
井戸水の冷えを都会で恋しがり
友情の限界を知る淋みしい日

大阪市　佐野白水

飲みに行く呉服屋背広着て出かけ
暮しの手帳妻の希望の台所
逢引は定期のコース乗り越えて
（課長級移動（二句））
変り映えせぬ金銀を置き変える
成り駒のように兼任命ぜられ
売薬如きを定価通りに売る場末
兼務して毎日二兎を追い続け

愛媛県　村上旭童

選挙選挙畠の草がめだって来
篤農の一人背広が似合いだし
芋つくるひけつでさえも秘中の秘
牛引いて雷族を遠くよけ
青い青い田ン圃の中の水げんか
赤とんぼ案山子をよけて流れたり
結局は医者へもってく土地だった

奈良県　**尾崎方正**

春や春今日も切花あの娘さげ
土筆見付けてもう春かいな春かいな
のぼせ上がればどこか抜けてる多弁なり
独身の旅菜の花たんぽぽれんげ草
すっかり春になったと散髪して帰り
新婚旅行景色ちっとも見ず帰り
重態へ看護婦動くほか静か

西宮市　**若林草右**

わが道を行くなめくじの白い跡
台風の眼は姑の眼にも似て
紅ばらのような唇棘もあり
ひげそりの手ざわりもよし春近く
療養の窓に遍路の鈴流れ
山雀のように仕込んで妻機嫌
カミナリ族牛の涎に止められる

豊中市　**足立春雄**

フランスの証拠エフエル塔が写ってる
受け売りの講義で飯も食えており
評論家一つお前がやって見な
娘が育ちアクセサリーのパパとなり
男性飼育月給運ぶだけのパパ
本で見た様には飛ばぬゴルフ場
老眼鏡忘れまごつく年となり

大阪市　**水谷竹荘**

愛の巣を女男にさがさせる
ある日ふとお里の様な妻がほし
別れたら死ぬと純情おどかされ
日帰りで逢えない恋とあきらめる
けちんぼは女難の味も知らず老い
素人になって嬉しい市場籠
恋せねば髭の伸びたも気にならず

西宮市　**小沢史葉**

サボテンの青さ南の旅に居る
ローカルのここにも源平の歴史聞く
取引の道具にゴルフ習う身の
和服着たナースに見とれけつまずく
師の閉店そろそろ蛙のなく季節
台風はもう去にましたと虫の声
鯉幟りビルの谷間にも泳ぎ

奈良県　**西辻竹青**

奥様に知れたらどうと詰められる
すじ道が違うと金を出し渋り
一本の手紙へ妻はこうもすね
お茶汲みに来たんでないと云う素振り
晩年を思いたくない夢を持ち
沈黙の父いとしくていとしくて
極秘だと言うて身元を調べに来

布施市　**森下愛輪**

借りるだけ借りて明日の風を待ち
旅の宿金策でない湯に浸り
ステップが踏めぬ女は茶をくばり
美人です美人です匂いで判ります
下腹が目立って秘書で置いとけず
妻にない魅力求めて街へ出る
ゲーボーイと知りつつドキンとさせられる

大阪市　**桝本蕗児**

愚痴りつつ魚の骨もとってくれ
日々出合う人とは見えぬお茶の席
イヤリングどんな気持でゆれている
添寝してラジオを消せの本とれの
女とは見舞に来てまで譲り合い
お茶お花どんな所へ嫁ぐ気か
人妻かそんならおごるのやめとこう

吹田市　**橋本幸男**

花活けてオールドミスは強く生き
四十年無口であった妻が死に
パパも留守ママも出かけて僕とチビ
病院の窓から名月見る身なり
子沢山妻の強気に支えられ
たまさかの約束風邪で果されず
恋敵歩き方まで気にくわず

尼崎市　小林文月

ゆかたでも夏帯だけはシャンと締め
手術後の異議なくと書く手がふるえ
地下鉄に少女花持てりラッシュなるに
婦人会に招待されてジュース飲み
お彼岸に明治ののぞき見て帰り
夏休み母あわてさす子のプラン
級友を失望させて彼女嫁き

島根県　藤井明朗

酔うてからの言う筈が寝てしまい
相談をする親類に金がなし
解け合って見れば笑い事ですみ
月給日電話の声は妻だった
友情は過去にふれない事にする
お人好しほんとを言うてもめさせる
仲人へ賀状倖せそうに来る

青森市　工藤甲吉

うらめしくかなしく耐える女房の目
台秤あまりに軽き己れを見
拾われもせぬアルミ貨の我である
新宮といっしょに産まれ貧し過ぎ
歌手になるような娘もなく貧し
ムシロ旗立ててピースをのんでいる
長生きは月の背中も見せられる

岡山県　臼井三林坊

社説今日云い度い事を云って呉れ
老眼鏡はずし毒舌冴えて来る
味気ない世へ爪切れば爪の音
名士まだ手紙を読んで呉れぬらし
悲しみか怒りか恋か虎が吠え
権利義務雲が静かに流れてる
云い遺す事多かりし多かりし

玉野市　伊原明林

大臣の土を踏まないお国入り
どの党も味方にならぬ松葉杖
残業の税を取る灯と取られる灯
税務署をやめて税務署こわくなり
完納のタオルが汗を知ってくれ
貧乏を押売りにまで知られおり
嘘をもう嘘と聞いてる妻になり

下関市　櫻川不水

遠謡い蟹はあぶくをこぼしたり
職場大会鰯を食った息で来る
手の平に乗せてみるのも春の土
こんにゃくの様な男に出しぬかれ
占らないのマッチをすててバイが更け
よだれ拭くにも愛妻のお手をかり
稲妻へ遠ざかりゆく旅の人

広島県　山田季賛

近代化煙出ぬ汽車絵にかかれ
娘の意見入れる暮しは派手に見え
真相は結局金だなとわかり
Sカーブ毎日強く生きる人
名刺要る職をどうにかあたえられ
フィルムがたらないままで旅がすみ
花もとむ蝶も短かい命なり

岡山県　野々口美舟

家裁までいって男の子をとられ
親譲りやっぱり爪に灯をともし
鈴虫の根強く城の跡に住み
持ち前の短気をあなたにはみせず
一命を捧げた談しふに落ちず
おおらかにして愛情が未だつづき
聞き捨てにされる意見の明治調

大阪府　深見雅堂

昼の酒盆栽に触れ年に触れ
三度目は風呂敷だけの嫁が来る
末席へ来て寛いだ庶務課長
中学生我家の歴史気に入らず
尾根裏に住んでる方が家主だす
外向いた足でひやかしだと判り
結論を言わぬ養子をはがゆがり

ホノルル　**羽佐間柳葉**

公平を叫び智能の差に触れず
民主の世でも勲章は嬉しがり
宿酔妻の権利が強く出る
世に馴れて善意の嘘に眼をつむり
偉くなりゃ天の眼地の眼寛げず
ハイボール四畳半には向かぬ酒
貧の眼に山柴水明何処にある

ホノルル　**三輪峯圓**

蘭咲いて心静かにお茶を入れ
温室に籠って無事な日曜日
鈴蘭は乙女の夢に似て白し
贅沢でない玉子酒腹にしむ
僥倖を明日と云う日に恃みつつ
遠大の希望煙草の輪を見つめ
述懐の女将勝気に呑み直し

ホノルル　**市岡曉舟**

云うだけを云うて白髪の重み見せ
握った手信じ合おうの血が流れ
まだまだと何時かな見せぬ底力
広告費赤字の側へ座って居
過去は過去ただ十字架へ跪づき
老婆心までと長老ぼかしてる
割り切れぬままに隠居の帰化準備

ホノルル　**古川魔花麗**

一日の歴史を終る妻の風呂
人の恋ああのこうのと嫁き遅れ
血統ばかり云うて娘をまた泣かせ
人同じからず社宅の窓あかり
ボーナスの高へ不満の猪口を伏せ
こと此処に至れば女負けて居ず
その中へ巡査を通す道をあけ

ホノルル　**築山快夢起**

グランパにキスそのあとで口を拭き
持つ者の悩みデノミだインフレだ
天皇の代りに教祖の額をかけ
将を射るつもりゴルフに凝って見せ
特徴は愚直に近い勤めぶり
モデル住宅買えそもないの許り行き
猫までが二号のヒスに跳び上り

大阪府　**谷沢好祐**

土曜日の風呂丹念にひげを剃り
タコの吸出しへお医者は返事せず
割当てでない割当ての羽根が来る
名を付ける時だけ親の儘になり
育てるのは義務やないかと子に言われ
尋卒がママと呼ばせてイヤリング
ターミナル美人を待たす人もおり

大阪市　**山本葉光**

壺は孤独つめたい浮世知っている
這うてでも自分の事をする病苦
むかしむかしのはなしでかたもむ
母の背で眠ってさめておぼろ月
耐え忍び日記にこまごま書いて寝る
蚊帳吊って宵寝の好きな父だった
弱いものいじめの世なり逆えず

西宮市　**河相すゝむ**

御馳走やなあと記念日忘れてる
今日の妻馬鹿にきれいだなと思う
がらくたをいっぱい持って転居好き
体面を云う程俺も出世した
着ぶくれて短軀愈々持て余し
生活展かくありたしと思えども
宴はてた頬に堂島川の風

高知県　**建沼康之介**

ここからが儲けて足したビルの色
男には負けぬ黒さで桑を摘む
恋人もなしニンニクを食うて寝る
仁術は二の次医師の野球好き
子も俺も叱りとばして妻よなべ
母の日の母乗り物へしりごみし
信用の限度でマダム催促し

奈良県　上田翠光

苗代の足跡父のふたなぬか
夕風は蛍へ少しきつすぎる
感情を殺してるのに髪匂う
叩かれて牛は道草喰いそびれ
満ち足りた恋は夜露を踏んで去に
コスモスの行儀は縄で縛られる
我もその烏合の一人賛成す

奈良県　飯降白香

誰も彼も自分のことで一杯だ
霧の駅へ私も下りるその一人
学帽に夢多かりしとは昔
世論ごうごう田螺のようにじっとする
秘書気取りオールドミスの猛々し
校長の話先生も生徒もザワザワザワ
不採用の通知に貴児は世をうらみ

兵庫県　小西無鬼

責任を誰にか問わむヒステリー
手洗所女辛抱強く待ち
神さんのこっちゃと寄附を押しつける
腹の立つ事も家相の故にする
去んでこます勇気が欲しい養子でい
神様を鈴で起こして頼んどき
此処迄が私んとこの門を掃く

堺市　八木摩天郎

酒の値をバイトの方が教えられ
商才へ娘貰えの家つげの
去られても泣くな泣くなと父は泣き
交際費から出しておけ出しておけ
待てば待つえにしと嫁ぐ娘をさとし
税吏などさせまい母の親心
腹案も結局金の要る話

倉吉市　大前鳴恍

無警手の踏切り恋の手をつなぎ
子供まではげた浴衣を着てくれる
満員車座席はアイスクリームなめ
運動会老いを走らす稲の出来
暴力と変らぬ声で叱りつけ
和服着て出れば女のつつましく
男ならなどと妻にもおどかされ

大阪市　真鍋一瓢

嫌な隣だが風除けの位置にあり
五十五の満期ペン先かえるよに
今日の餌ももろたぞタイムレコードよ
ハズ帰るあわれ変形した靴で
そこのけそこのけ野心の塊が行く
寝る為の酒を子の眼よ妻の眼よ
読み耽り一そ冷たいのも女

西宮市　門永三舟

新婚に当てられバスがまだ来ない
飲んだことふせて勘定合わぬ顔
数学が出来て商魂さらに無し
道づれの女に若さが残る宵
生噛り主治医黙って聞いている
懇談日母の化粧の厚過ぎる
返事位したらどうかと倦怠期

大阪市　小川恒明

夕刊へならんだ頃のなつかしさ
呑んで来なはんなやと集金云われて出
三枚目ならば使える顔だとさ
親譲り男であったらなと思い
下向いて働け今年もそれでいこ
殺される覚悟も出来ている首相
アベックは見向きもしないプラカード

大阪市　木村水堂

本当の散歩へ子供ついて来ず
子を思う角度が違う父と母
尻ぬぐいするのも親の義務と知り
くたくたで婦唱夫随が戻って来
ボーナスをみんな渡して家で酔い
盆おどり妻の器量がよく目立ち
女房の後から養子稲を刈り

大阪市　**清水白柳**

銅貨ころがっていても光を放たない
因襲の鐘マスコミに目もくれず
バイトする学生デモを黙殺す
嫁の友達が来て温顔ほころばす
くしゃみする父へ宿題聞きにくる
五女のぶ子死去
北枕かそけき嵩となりし娘よ
すまんなと死ぬ子が家計知っていた

大阪市　**大坂形水**

家族湯へ大阪からの電話です
レディファスト下の寝台譲りましょう
茨木で腕は上げたが不渡りを出し
球探すここらこんなに巌伸び
ままごとに似てお供えの物作る
昼飯をよばれる端へ猫が来る
妻に引かれて石切さんの石を踏む

大阪市　**平田三十郎**

長年の希望もかない差し向い
反対の理由も知らず署名をし
お互いに裸となって座がはずみ
ゆらり〳〵道頓堀に浮くネオン
証明が整いすぎて疑われ
赤電話家出の相談などしてる
アルサロのビール薬のように飲み

大阪市　**小島さぎす**

ベルトくる〳〵仲仕の肩はもう要らず
濠端に憩えば歴史へ想うこと
波の間に泳ぐくらげのごと生きん
女盛りダリヤに競うごとく派手
人の気も知らずのろ〳〵貨車が過ぎ
トラックにお通りねごうてふむペダル
大掃除わが体力を知る疲れ

大阪市　**志水礼司**

宝石の指輪を上に手を重ね
収賄の罪に問われたかくし芸
人の世の裏まで知ったみだれ籠
ゴルフ場草も気ままに伸びられず
恩給へ後一年の頭下げ
横丁で景気の裏をのぞいて来
天国へ行くのが一人生き残り

尼崎市　**坂田東洋男**

オートメ化人間様は油差し
正直な男で可もなく不可もなく
酒飲みを荷物のように届けられ
仲もうすなおに意見聞いて居ず
退院で制限といてくれた酒
恩給と心中をする未亡人
書いて消し消して書いてるイニシャル

大阪市　**西いわを**

役柄は人間像をきゅうくつに
表情は陶器の如き冷やかさ
はったりのうまさに借金引受けた
バラの花不幸な家に乱れ咲き
悪質のデマが起りそうな煙
縁談を両手で強く押し返し
秋の情事チンチロリンの私語よ

高知県　**大西迷窓**

幸福への招待などと売る薬
歯が抜けていて笑う事躊躇する
働いていたら厄年すぎていた
誰一人居なくてよかった独り言
運命へもう逆らわぬ年となり
感傷の十九孤独の文字が好き
ベビー蚊帳のぞくパパママに夢があり

大阪市　**今西生蓋**

出発が羽田と聞いて一寸妬け
裸一貫纜綱に頼る赤銅色
荒れ模様腹案出そか出そまいか
マイクからの指名がうしろから聞こえ
三本の映画に合わす閉店時
出張で稼いだ鞘をチボに遇い
ドヤ飯屋並ぶスラムの街の角

松本市　石曾根民郎

想い出のひと多くみな月のなか
にくしみが消える大人の日向ぼこ
目に見えぬ手を感じたる屋根の下
ほころびに似てこの酔いをたのしむか
去る者は追わず小高き山が見え
惜しむ眸に月もちいさくなる別れ
雨に濡れつつこの肚が出来てゆく

大阪市　須崎豆秋

奥さんを恐い同志が飲み歩き
赤電話ぐずぐずせんと来んかいな
アルサロが左ぎっちょで酌いでくれ
酔ってても五円の釣はちゃんととり
チャンバラで貧乏人の子は斬られ
飼主も土佐犬らしい顔になり
終点でああしんどとも云わぬ汽車

出雲市　尼　緑之助

父と子の和みて黙す朝のお茶
これからは貯金もします子の便り
平凡の凡をこつこつ歩まんか
山路の明るさ鶏が来て座わり
縁談に雪の出雲の炬燵酒
ピカソマチス我が感覚にうろたえる
初孫だ大内山より早い春

大阪市　本多柳志

学力の程度左派には成りきれず
ポーラの博士と知らず診て貰い
死亡通知になって戻った年賀状
新市制峠の上は八丁目
サイン帖嫁して従う文字でなし
本人が寝てからはずむ祝い酒
銀婚の女まだまだ御しがたく

大阪市　木村十悟

四十は四〇五十は五〇の女惚れ
御ビールにしまほと妓気まえ良し
四帖半いささかあくどい画もかかり
四半分着てます女夏になり
成人へ浅く水かく手も訓え
ミス日本頑ばりますとは何のこと
デザイナー今年はここをちょん切って

大阪市　菊澤小松園

金詰り夜食あったりなかったり
押売りの断り方も剛と柔
ライバルの家は宵から寝静まり
みおつくしの鐘は空しく響くのみ
父なし子雲の行方へ立ちつくし
美しく生きる姿を金魚見せ
自家用車利子丈け入れに乗り附ける
電化して主人が飯を炊かされる

呉市　林野甦光

昼勤と夜勤下宿で入れ変り
カクテルの味を女は知っていた
鼻の差で負けても馬の値が下り
共倒れする迄前の店と競り
勝運がなかった事にして戻り
家庭の都合に依り恋もして
コスモスの様な男にいたわられ

東京都　石居高志

税務署が見れば儲かる筈といい
怒ってる顔でやっぱり会いに来た
妬くだけの仕事を女しんどがり
すり切れた袖カバーに似し人生よ
やあ〳〵の仲がだんだん偉うなり
鬱心勃々紫煙の行方追うデスク
職権に物を言わせた淋しい日

倉敷市　木村千容

床飾よして日の出の軸をかけ
日向ぼこラジオ演奏背できき
ガヤガヤガヤガヤ嗚呼日本の民主主義
水の音うつらうつらと坐眠させ
定年もなく老齢がろくをはみ
七十すぎいとしきものに茶呑妻
妻はよし掌ほどの土に生き

加賀市　中松恒雄

蚊帳を出て涼み直しをする暑さ
ライスカレー鍍金の剝げた匙で食い
身ぶるいをして小便のすむ寒さ
良い年をとれと別れて又はしご
新しい母へ小さい順に馴れ
カロリーを計る嫁来て味が落ち
鳩ぽっぽ歌えと音痴いじめられ

神戸市　丸川初甫

手をはぶく事も経験教えとき
マイク上げ下げ司会者の咳払い
本来の短気をかくすハネムーン
見送りは傘の雫へ握手する
善人は軽い皮肉へピンと来ず
猪は皆走ってるとこを書き
百万円当るビラなど踏んでゆき

神戸市　室田千尋

トラックの何やら落したそがれる
字の読めぬ母できびしい躾なり
子が出来てから諦めることを知り
白きシーツ母に寝姿言われたり
浜の女男なんかにこだわらず
主婦の店という安心感があり
貧しさに長く忘れていた怒り

鳥取県　田中蛙眠子

趣味広く浅く祖先の土地を売り
はちまきをすれば先生もおっさんや
投げ出した辞表よ明日の米がない
おまわりの他所行きハンチングが似合い
蝶ネクのゆるみへ酒乱出そうなり
控えめに語る糸切り歯の白さ
手花火を見てたら童謡が口にもれ

出雲市　原独仙

老妻も戸惑う旅の夫婦風呂
仰山な子へ押売りは荷を解かず
叱る子の吾が幼少に似て淋し
子が炊事母母の日の気の疲れ
河豚と鮎に似たり水着の母と娘と
次々に世帯持つ子の他人じみ
赤線のないのも困るとは女将

松江市　梶谷冬生

山川児をなくして（一句）
友情の厚さの中を柩行く
弱味などみせまいとする梯子酒
本宅は抹香焚いて日が永し
有力な票となりそう部落の灯
雲の峯崩れて内閣総辞職
産声は極道息子と思われず
末っ子がいじめられてる夜の膳

松江市　小林孤呂二

さすが都マネキンの様な足ばかり
日曜をつかい尽した花鋏
出産もまじか定時にかえって来
大学に通いバーのマッチが増えるなり
三等国でもよし桜咲く日本
ほんとうの寝息きこえる三等車
酔うて帰れば児のピエロになってやり

松江市　舟木与根一

玉のこしなどと家柄見下げられ
出雲弁イヤリングがあわれなり
ディトいう意味がわかってははあわて
うっかりと心臓麻痺を羨みぬ
運不運あるとは見えぬ高島田
名器などアベックすっと通りすぎ
小父さまと呼ばれ警戒されてない

岡山市　津田麦太楼

泥んこのバスが通るよ梅の花
ひっそりと桜の下でゆでたまご
落ちぶれて牡丹の花も小そう咲き
養老院瓜や茄子の花盛り
曼珠沙華突き放された貨車一つ
茶の花に似て老らくのうら侘し
老夫婦の仲を一縷の蚊遣香

★不朽洞会員有志参加（到着順）

いのちある句を創れ

花地物壇

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 八月句会（大阪市）

8月7日 午後六時

会場——末生会館

46年ぶりの酷暑だそうである。どうりできょう七日は立秋というのに、水銀は35度を越している。

春巣氏の柳話、主幹久しぶりの披講、それに各選者の力のこもった声、ピチピチ若さが溢れるようだ。

八月の不朽洞賞楯はベテラン丸尾潮花氏が握る。さあ九月十一日はいよいよ四〇〇号記念川柳大会だ。（F）

出席者——路郎・一三夫・文秋・阿茶・旅風・正一・史風・狂二・満潮・良・三司・満秋・潮花・いさむ・すゝむ・圭井堂・徹也・紡毛・一瓢・玲人・いわを・多久志・梅志・東天紅・舟遊・千尋・春巣・薫風子・菁風・静馬・庸佑・水京・柴香・柳宏子・涼秀・梨花・井平・白柳・恒明・永香・牧人・敏明・与呂志・南宗・奈良子・宏子・葭乃

兼題「辞書」 麻生路郎選

教えてやれぬ辛さに辞書を買い与え 失名
この文字は生きてるかなと新辞典 弘村
辞書引き様もない達筆持てあまし 祥男
ナポレオンの辞書見ならえと子をきとし どんたく
何処となし恰好違うと辞書を引き 生薑
辞書引いて古文書読むに小半日 秋月
書き出しは辞書の例文そのままに 八九寸
国政を論じ言海引いて居り 鎮海
秀才のポケット辞書は手放さず いさむ
国文の大家に辞書の依頼が来 徹也
辞書代がムード喫茶へ消えていき 吸江
クイズ出す時だけ用がある辞典 卓
辞書までもお米にかえた過去もあり 繁太郎
卓上の字引きも僕も古ぼける 晃
虫食うたとこも出てくる父の辞書 摩天郎
認定へ板前さんも辞書を引き 菁風
辞書眼鏡持って来させて床に居る 与呂志
亡き父の手垢もうれしコンサイス 圭井堂
重宝なけれどけむたい生字引 正一
辞書ありて我に恩師が在すよう 繁雄
生きた辞書などと言われて庶務で老け 梅里
新しい辞書知った字をひいてみる 柳宏子
恥をかくところを辞書にたすけられ 旅風
天才は辞書より先に生まれて来 繁雄
中学生辞書よりトラを可愛がり 水京
一冊の辞書で大学迄通し いわを
辞書買ってタバコを巻いたこともあり 梅志
静かさを覗けば辞書を又枕 梨花
辞書引いてみると子供に返事する 高史
辞書引いたらしい一字がぎこちなし 静香
辞書引かなわからん新語やたら出し 文秋
父の辞書子の辞書秋の夜はながく 潮花
金に縁遠くこつこつ辞書をくり 菁風
お湯呑みも欠けて久しや生辞引 栞
知らんとも知るとも言わず出した辞書 舟遊
社長でも辞書に老眼鏡をかけ 敏明
持ちなれて辞書の手垢をいとおしむ すゝむ
共学の辞書オズオズと借りてみる 紡毛
老博士辞書を子のように可愛がり 水京
学問を極めて辞書を信じない 満秋
末っ娘に辞書をひかせて書き損ね 圭井堂
辞書二冊持てば段梯子がきしみ 薫風子
辞書引いて一字一画ごまかさず 静馬
辞書繰って出世しそうな名を選び 牧人
豆辞典近くよせたりはなしたり 阿茶
入試失敗辞書を枕にして寝むり 摩天郎
当用漢字になってもふるい辞書をひく 晃
辞書買うてあるのに当字ばかり書き 一鶴
辞書貸してやりたいようなラブレター 正一
辞書横に置いて小説読みふけり 酔舛
手紙かく時の辞書とは淋しすぎ 高史
新語辞書もう去年のが間に合わず 文秋
辞書を引く手間のはぶける子が帰省 花乃子
商売のコツは辞書では引けなんだ 恒明
階級が違うて辞書をひく手紙 潮花
辞書までも質屋に入れて帰省する 路郎

兼題「手製」 清水白柳選

大小さまざま手製のパンが出来 蘭
手造りの簞笥に二人養われ 八九寸
手製の棚ありったけの釘つかい 瑞歩
動いたらきしむ手製の涼み台 一瓢
お見合いが決り手製のすしが出る 満潮
手製とは知らずに凧の絵をくさす 圭井堂
ワンピース手製ですよとさわらせる 春巣
涼み台手製と見える太い釘 菁風
着こなしの良さが手製を光らせる 玲人
どれ前や手製のパンツのややこしさ 敏明
ひととおり手製の由来きかされる 紡毛
妻やり手少々うんざりする手製 すゝむ
お手製の本箱カンナをかけてなし 弘村
お手製の籠でキギスが届けられ 潮花
手料理に招かれ独身主義ゆらぎ 奈良子
器用さを褒める煽てにのってやり 旅風
馬を射る努力手製をほめておき 夢虹
玄人が見れば手製とすぐ判り 南宗
手製なら食べたく無いと言うドライ 涼秀
不細工だけれど手製は長く持ち 菁風
手製それにつながる想いに愛用す 祥男
母のもの手製ですます夏の服 文秋
彫刻をした筆立を子が作り 梅志
ワイシャツも妻のミシンの世話になり 阿茶
手製ではもう気に入らぬ長女次女 恒明
反抗期母の手製が気にいらず 奈良子
お爺さんの手製が重いたばこ盆 祥男
買う倍もかけた塵取り重た過ぎ 一瓢
手製の日の丸白地が狭くなり 良
インギン無礼に手製を押しつける 紡毛
お手製で双児のように着せている 牧人
足らぬ駒削って彫って指しに来る 圭井堂
国の母手製の足袋で上京し 一三夫
一家総出の助手が要る手製 恒明
手製にも斜陽は昔偲ばせる 満秋
切口が歪んだままで組む手製 白柳

兼題「景色」 西いわを選

ニッポンの景色の中にデモの旗 玲人
金持てば都会の夜景美しい 牧人
菜の花の景色へ不粋なダンプカー 夢虹
来てみればとのいすぎている景色 旅風
セーターを忘れなはんなやと言う景色 恒明
耳にガイド景色はあとへあとへ過ぎ 梅志
夜景千金戎橋の持ち呆うけ 舟遊
女まで股からのぞく良い景色 狂二
案内状の景色湯殿に女入れ 敏明
背をむけて女は沖の景色みる 満潮
あれっきり逢わぬ景色がこびりつき 花乃子
金になりそな景色商魂見逃さず 一鶴

色紙短冊
書画用品
大阪成美堂
丹青堂
電話 七二一・七三二

ポスターにつられて来たという景色　多久志
絶景へ必死ザイルを組む岩場　紡毛
弁当があればと思う景色なり　白柳
景色よりヌードモデルに気がとられ　南宗
くくられて牛景色など気にしてず　阿茶
六甲の夜景真夏の涼に佇つ　すゝむ
山の景色若者どもの声高し　満潮
自殺するにも絶景へ歩を運び　多久志
岩二つたっぷり金になる景色　史風
自然美の景色に観光船ゆるく　いさむ
いい景色二人はチュインガムを噛み　満潮
荒れ出した海の景色に旅なれる　梅志
夕景色どの漁火もまたたけり　千尋
子の画いた景色に一匹犬がおり　峻艸
ヨット浮いて湖水を夏の景にする　牧人
絶景のここにも一寸待てとあり　玲人
殊更に股のぞきする天の橋立　いわを

兼題「外見」　真鍋一瓢選

外見も古いのれんと言う構え　阿茶
外見などかまってくれぬ安定所　史風
外見をかざりたいのも新世帯　旅風
外見は空洞ありと思われず　春巣
平凡な外見舶来とは見えず　いさむ
外見の怖さみんなが寄りつかず　紫香
包装紙かびが生えてるのも知らず　白柳
外見のえもんないやらかと義理の中元　夢虹
外見のわるいズボンを娘に穿かれ　梅志
叩かれて外見だけのベニヤ板　白柳
外見に似ぬ強情なとがあり　柳宏子
外見は夫唱婦随の仲であり　三司
外見の悪さを親のせいにする　南宗
外見がシャレていたので引っかかり　玲人
面接へ先ず外見が損をする　奈良子
発車ベルもう外見を気にもせず　史風
外見の儘だんねんと仲人口　与呂志
外見にひかれ中まで改めず　柳宏子
外見が整い小遣い薄くなり　満秋
まるまると見かけ倒しの肥りょう　奈良子
外見につられた土産物を悔い　弘村
外見を捨てて儲けの役につく　八九寸
外見の悪い夫に浮気され　静馬
只持って去ぬのに外見まで言うて　祥男
みてくれは悪いが大きい方をとり　柳宏子

席題「団地」　黒川紫香選

市場バス団地の前でどっと降り　牧人
子が育ち団地の畳小さすぎ　牧人
同姓が三組で団地ややこしい　多久志
駅からは遠い処へ団地出来　菁風
子が先に知った団地のおつきあい　史風
団地また月賦のテレビ届けられ　満潮
掃除器がうなる団地の昼下がり　一三夫
引越しの荷がすれ違うている団地　いさむ
団地みな窓をあけてるいい月夜　潮花
市場もう建って団地になる所　旅風
バス降りて団地尋ねるとこがなし　白柳
一つ二つ三つ数えて団地母がくる　白柳
似たような団地にどれやら迷うなり　柳宏子

コーヒの味
モダン　川柳

心斉橋大丸北の辻東へ
御門
TEL ㉗6684
御集会には階上御利用下さい

日曜日団地の窓はみんな干し　文秋
郵便屋あざける如く建つ団地　正一
サラリーの差がはっきりとする団地　恒明
平凡に朝を出て行く団地族　いわを
球場のうらでテレビを見る団地　梅志
肩組んで団地の子供戻って来い　満潮
ベランダで子供を呼んでいる団地　いさむ
早朝のトウフ屋団地で軽くなり　良
カーテンの色さまざまに団地の夜　梨花
三階の窓で団地は犬が吠え　牧人
豆腐屋を団地高いとこで呼び　紫香

席題「朝風呂」　後藤梅志選

二日酔夕べの風呂をたてさせる　圭井堂
内風呂の朝は目覚めた順に入り　白柳
帰省して朝から風呂が沸いている　牧人
朝風呂を出れば娘が茶を点てる　与呂志
朝日射す湯舟腹まで透けそうに　柳宏子
朝風呂へ麻雀終えた四人連れ　いさむ
朝風呂がうるさく女中また変り　恒明
朝の風呂無念無想で出る欠伸　旅風
朝風呂に一本も付く誕生日　圭井堂
朝風呂のあとのビールも旅のこと　牧人
朝風呂は皆なでっぷりと肥えて居る　菁風
朝風呂の味明治からまだ達者　旅風
せめてもの楽しみ朝風呂へ通い　庸佑
朝風呂を孫の汗母へ立ててやり　井平
荒稼ぎして朝風呂も落付けず　玲人
朝風呂でとしより体操して帰り　静馬
朝風呂でまずい小唄は控えとく　徹也
いつ来ても朝風呂がある島の内　菁風
朝風呂で男のきたなさ話し合い　一三夫
やせたのが来て朝風呂をぬるくする　三司
朝風呂に変屈同士よく出合い　満潮
盲腸の傷朝風呂でもみほぐし　春巣
朝風呂の積上げた桶一つとり　梅志

席題「木蔭げ」　長谷川三司選

うだる夏野良犬も知っている木蔭げ　徹也
木蔭げからアイスクリームの声がよび　多久志
ニコヨンの昼寝木蔭げが楽天地　井平
女連れ銀杏並木の影をより　潮花
街路樹の木蔭げで休むサンドマン　いさむ
草野球監督さんだけ木蔭げに居　多久志
木蔭げからハラハラしてる孫の守り　庸佑
午後三時木蔭げへいつもの乳母車　玲人
一本の木蔭げに人を待ちつくし　阿茶
信号を木蔭げまで行き待っている　白柳
街路樹の狭い木蔭げに息を入れ　柳宏子
立話長びきそうで寄る木蔭げ　良
二人切りの木蔭毛虫がじゃまをする　敏明
炎天のバス待つ位置にある木蔭げ　静馬
拾い屋の汗はポプラの蔭で拭き　一瓢
公園の木蔭げキャンデー屋も這入り　紫香
夏だけは隣りの木蔭げありがたく　阿茶
ハンモック木蔭げに吊れば風がやみ　春巣
炎天へ木蔭げは限りある緑地　梅志
木の蔭へ来てそよ風のあるを知り　満秋
配達へ木蔭げの欲しい道つづく　牧人
頃合いの木蔭げ乞食が来て座り　失名
蟻の列木蔭げ横切るだけのこと　柳宏子
蝉を追う靴が揃えてある木蔭げ　玲人
バスを待つ木蔭げポプラへさわって見　梅志
自由行動ガイドさんは木蔭げに居　恒明
日当りをよけて木蔭げの冷しあめ　三司

（庸佑清記）

雑川 阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

説教の途切れたとこで蚊を叩く　晃
血を吸うた蚊が荒壁にすれて果て　葉光
掌の血は蚊の血か人の血か　亜鈍
満墨のピッチャーサインにうなずかず　堰子
かけ持ちへサインうるさくつきまとい　文秋
反対でもないのにサイン求められ　白柳
サイン攻め夢の中でも悲鳴あげ　光福
格下げにされて気楽と敗け惜み　喜仙
格下げをされても職にしがみつき　一三夫
十両落ち決った日から勝ちつづけ　生薑
油汗もう唇が動くだけ　義介
十字架へ苦悩の顔のあぶら汗　奈良子

雑川 玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

行きつけぬ冷房に居た腹具合　白柳
冷房のビルでネクタイしめたまま　柳宏子
へそ曲り又も会議をこねまわし　清
へそ曲げて帰り孤独をやけに飲み　文秋
へそ曲り独りぼっちを苦にもせず　井平
和やかなムードを孫がまきちらし　清子
雷族の運のよいので松葉杖　水京
夏山で親に済まない松葉杖　一栄
松葉杖置き忘れたるサンルーム　句念坊
松葉杖ついて美談を生んだ人　正一

雑川 淀川支部句会（大阪市）

木村水堂選

子を憶う気持が医者を神にさせ　赤舟
一と月と云うお医者を信じ切り　三舟
同級生だったお医者の頼りなく　永香
容態を見守る医者の口に笑み　東洋男
X線見せて先生もうれしそう　一鶴
海開き蟹はもぐったままで暮れ　さぎす
紙くずをつくって梅雨の子の欠伸　葉光
紙くずの谷間で寄せやよく儲け　六竜子
くず拾うくらしへ希望はまだ捨てず　灯子
紙くずに質札まじる大掃除　花村

マスコミへ廻り続ける輪転機　幽谷
マスコミに生きマスコミに滅ぼされ　三十郎
負けぬ気の母マスコミの智慧を借り　若菜
マスコミの気付かぬ善意持ちつづけ　水堂
マスコミに泥棒逃げ道教えられ　句念坊
マスコミの非情清濁まきちらし　香林

雑川 にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

弱虫が捨身になってかきむしり　敏子
弱虫と云われながらも優等生　粉洲
弱虫が母の好みに育てられ　満潮
ダンプカー来たよと言えば子等も逃げ　五色
蟻が物を運ぶようにダムのダンプカー　満秋
ステテコでブラリ裏町の有難さ　良
裏町は蛙鳴いてる新開地　文秋
裏町に住んで将棋の段を持ち　清人
人間の匂いここ裏町の午下り　葉平
あわてかた思い出しては笑われる　旅風
入梅へあわてて屋根をたのむなり　舟遊
未練まだ波に浮かんだ紙テープ　漣
逆光の銀波が躍るファインダー　三舟
ゆるやかに地球をめぐる波のあし　晃
雑念のしきりに去来して木魚　すゝむ
雑念の中に儲けることもあり　白柳

涼風天国へ

趣味の集りに、吟行に、御宴会に、御家族連れの御清遊に御越し下さい。

本格式日本料理
味は一流値は三流

紅葉の名所竜田大橋下車
半丁どやまのふもと

龍田川畔
おつる茶屋

電話竜田一六二

竹荘
竹青の店

雑念をしずめる丸さ壺は持ち　薫風子
雑念があるのかそこら掻ゆうなり　梅志

雑川 明和病院支部句会（西宮市）

西尾青一路報

カロリーに重きをおくほど世帯じみ　弦月
ほめられて同じ料理がつい続き　雅夫
お料理が出来てお嫁にいき遅れ　義子
藍染の皿美しい海豚の味　策平
お祭りによばれ料理の説を聞き　東雲
手料理もほめて半分喰い残し　泰
料理屋の格で仲居は口をきき　千尋
親切を甘く見られて居直られ　勇月
親切が仇となって疎遠がち　狂人
口だけの親切も云う通夜の客　芙路
出しゃばりの様に親切扱われ　寿栄
隅っこに座り遠慮のない欠伸　山友
アルバムの隅であせてる恋仇　正雪
父さんの掃除は隅にまだ残り　三舟
勧誘員資本の口でよくねばり　太三雄
出資してやろうかとマダム美しい　牧人
資本だけどうにか戻し店じまい　球絵

雑川 西宮支部句会（西宮市）

若本多久志報

灰皿に吸殻溜めて折れあわず　生薑
むかついて帰れば家の戸がきしみ　和三郎
不眠症けさもどこかで五時が鳴り　弦月
五時近くそわそわBG恋してる　舟遊
諦めてみれば怒ったことを悔い　満秋
こらえてる怒りが寝言になって出る　鮎子
灰皿へ揉み消して立つ物別れ　牧人
捗って悠々五時を待つ煙草　すゝむ
約束の五時を子供に起される　正祐
残業がつく五時からの仕事ぶり　静馬
灰皿へ先客らしい女巻き　三司
怒ってる煙草はパッパパッパ喫い　多久志

雑川 ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

色艶はないがそらさぬ世帯もち　内海
蔭口も逆宣伝か人気湧き　弦月
艶ぶきへ孫は足跡つけて去に　須磨子
色艶も褪せて鏡に用もなし　魔花麗
蔭口の口を拭ってご愛想　エス子
ピリョドを忘れ蔭口持越され　暁舟
秋祭おもやの柿の艶と居る　銀水
蔭口を云って良心責められる　拝山
良い嫁が来てから家に艶がまし　浅太
女学生あたら艶消しデモ参加　平八郎
捨ておけず婚期の艶の褪せぬ間に　周防
蔭口を云うて親類とも知らず　泉水
蔭口でくさしておいて前ではほめ　万里歩
社交家と云う嗜みの靴の艶　柳葉
昨日の蔭口今日は世辞となり　快夢起
母親の色艶生さぬ仲はよみ　斧平
蔭口へ関せず焉とハイヒール　峯円
権力へ蔭口だけの反抗か　紅渓
蔭口もただ聞き捨てで事がすみ　恵津子
この人も艶姿の前にケモノなる　青風
蔭口の相槌打たず煙むがられ　いつ生
聞いてると知らず女将をこきおろし　紅茶
お隣りがどうのこうのとふれ歩き　風草
末っ子が嫁し女房が艶を出し　美瀬

★記事フクツウのため以下次号で発表。

酌よし　千日前大劇裏　TEL(63)二七一〇
味よし　アベノ橋近映地下　TEL(77)〇一四七

梅里の店
大萬

★大万川柳（第百十五回）を募る
兼題「年上」　路郎先生選
締切・九月十五日　五句以内
発表・九月廿一日　（店内掲示）
投句先　阿倍野区松崎町三ノ一〇
大万川柳会宛

ペンの散歩

▼残暑まだおとろえず、まず御見舞申し上げます。▼川雑四〇〇号おめでとう、と、南から北から、柳壇の大家がドッと祝稿を寄せてくださった。

▼特別寄稿「誌寿四百号を祝う」の諸先生をはじめ、堀口塊人氏の「俳諧と川柳の交流」東野大八氏の「レーニンに会った男」本社北川春巣氏の「川柳の形態学」や、R・H・ブライス先生英訳の「前田雀郎自選川柳三十五句」などは異色中の異色篇である。

▼スペースの関係上、惜しい原稿を次号回わしにしたが、阿部佐保蘭氏の「ブライス教授の英訳川柳を再読して」は、どうでも本号に入れたかった。そのほかレギュラー原稿である鞍馬氏の「古句研究」や、古方氏の「絵と川柳で表現する歴史」から「柳界展望」まで休載した。

▼「川柳書架」と「現代柳人録」が復活したが、これは本誌創刊当時から好評を博したものである。

▼表紙は画壇の雄、田村孝之介先生をわずらわせ本号に壮厳の美を添えてくださった。また「自選句集」や「支部のページ」などのご協力や執筆諸先生方のおかげで、つぎの五百号を目指し、足音高く前進するわが「川柳雑誌」へ、かわらぬご愛援を願います。

▼ローマ五輪が26日から9月11日まで開催。十一日は川雑五輪の日だ。

（一三夫）

★九月の会★　川雑支部

★淀川句会・2日（金）六時、題、多数・替ズボン・口止め★**宇部句会**・4日（日）一時、題、邪心・コロッケ・梯子・筋書★**明和研究句会**・4日（日）一時実り・空・歴史★**玉造句会**・10日（土）七時、題、ドル箱・へらず口・膝★**西宮句会**・16日（金）六時、題、櫛・気配・代理★**京都句会**・16日（金）夕、題、疎ら・黒・図星★**にしなり句会**・18日（日）六時、題、蔓・月・ドヤ街★**阿倍野句会**・21日（水）六時、題、波紋・あやふや・リズム★**南海電鉄句会**・29日（木）六時三十分、題、検札・下り目・統計★**倉敷句会**・3日（土）六時、題、会計・見舞・いさかい・虫・腕前★**備前句会**・題、名残り・曲り角・半分・尻馬・独り身★**岡山句会**・17日（土）二時、題、白髪・猥談・トースパン・息抜き・

（会場は従前通り）

大阪市民文化祭
第十二回川柳大会

主催　（大阪市・大阪市教委）
　　（関西短詩文学連盟）
　　（大阪川柳連盟）
後援　毎日新聞社

日時　昭和35年10月2日（日）11時開場（入場無料）
　正午席題〆切・一時開会・四時半閉会

会場　毎日新聞大阪本社講堂（市電桜橋）

司会　鵜飼蟻朗
　　伊東静夢

開会の辞　大阪市・市教委

挨拶　関西短詩文学連盟　麻生路郎

同　学芸大学教授　前田勇先生

講演　「大阪弁の喜劇性」

席題　六題披講

兼題　休憩（十分間）
「自惚れ」　岡橋宣介選
「旧友」　岸本水府選
「こども」　中島生々庵選
「呼捨て」　堀口塊人選

閉会の辞　武田北人

川柳賞　席・兼題披講ごとに大阪市長・教育委員長から贈呈

兼題投句　各題ごとに郵便はがき一枚に二句ずつ明記
大阪市北区中之島　大阪市教育委員会内
市民川柳大会係宛（**九月十五日着限〆切**）

入選句集　当日会場で予約受付（**実費五十円**）
なお当日欠席の方で入選句集ご希望の向きは投句の際切手代五十円同封のこと。

もたれる！痛む！カイヨウ？

胃の不安をとる薬

新発売

ファイナリンソフト

★原因と症状の両面から胃を治療する新専門薬です。
★興奮している胃の神経をしずめ、胃を休養させ、痛みをとり、荒れた胃壁を守りつつ、酸を中和し、胃の働きを正常に快適にします。
もたれる感じ・重い感じの慢性胃炎
胃カタル、胸やけ・きみずの胃酸過多
二日酔、胃の痛み、胃カイヨウなどに

15包入　200円
30包入　350円
説明書・試供品送呈

山之内

山之内製薬株式会社
東京日本橋本町二ノ五
大阪・福岡・札幌・名古屋

麻生路郎著

川柳鑑賞

好評嘖々

川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送料三二円
B6判
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地
電話 上阪 ㊥六〇八一
西宮市岸上町七九〇五〇

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

9月号発売中　130円（〒12円）

特集
イノシン酸ダービー展望
イノシン酸の製法と性状
マーガリン ショートニング の現況と将来性

◇

アルミ箔と食品包装
硝子容器の将来
真空乾燥と真空冷凍乾燥
転換期のアイスクリーム

◇海外情報　◇特許告知板
◇意匠ニュース　◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・酒類・添加物

大阪市北区木幡町5/5 ㊥34.5231/4
食品と科学社
振替 大阪6702番

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

いで湯は手品師若やぐ心

ここに座席指定券がある。だから私たちは安心で清潔な快い旅ができる……

白浜温泉
ディーゼル準急オ2「きのくに」号
なんば発　毎日　12.30
全車席指定制　白浜口まで　620円
7日前から　なんば　堺　岸和田
の各駅日本交通公社南海交通社発売
週末準急「くろしお」号
なんば発　土曜ごと　12.55
座席券　7日前から　なんば駅で発売

椿湯川　瀞勝浦
南紀直通新宮行夜行列車
なんば発　毎日　21.55
座席券　7日前から　なんば駅で発売

ご行楽のご相談お申込
なんば駅案内所（63）1151（64）8686
南海交通社（64）0103（34）5038—9

南海電車

募集

課題吟募集

寝台　武部香林選（千月詩会）
内靴　黒川紫香選（千月詩会）
助　田中鳥雀選（千月詩会）
連れ子　西尾柴選（千月詩会）
観光　長野井蛙選（千月詩会）
サイン　後藤梅志選（千月詩会）

毎号募集

近作柳樽（雑詠十句以内）　麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）　北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）　麻生路郎選

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一野作家の雑吟を募る。

▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は本誌購読者に限る。

B判5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌
第九号　三十五年
大阪市住吉区
特価一百円
（送料八円）

（禁転載）

半年　四四四円
一カ年　八四〇円

昭和三十五年八月廿五日印刷
昭和三十五年九月一日発行

編集兼発行人　麻生路二郎
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地
電話 上阪 ㊥六〇八一
西宮市岸上町七九〇五〇

printed in Japan

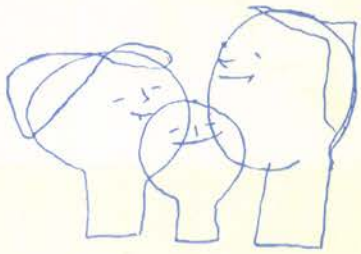
昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿五年九月一日 毎月一回一日発行
編集兼発行人 麻生路郎
発行所 川柳雑誌社 大阪市住吉区四万代酒五丁目二五番地 電話大阪(六〇八一)
振替口座大阪七五〇五〇番
本号に限り 特価百円 (送料八円)

マルゴ印
田辺製薬

お酒の前後に
二日酔・肝臓に

☆愛酒家の強肝保健薬☆
強力ネストン ゴールド
30錠 200円 100錠 500円 300錠 1,200円

一家そろつてホーライ党



廣東料理
蓬莱
大阪なんば・TEL ㊻551－2

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—
送価 二五〇円 三三〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂
東京都新宿区払方町27 振替東京29507

効きめの速い…
『中外』の胃腸薬

カートンは胃腸を丈夫にし食欲をたかめ消化をよくする新しい総合胃腸薬です。胃痛・胸やけ・むかつき等一服のカートンで爽快になります（バス入れにも入る特殊セロ包装も好評です）

カートン（散薬）
（15包 ¥100. 24包 ¥150. 54包 ¥300）

中外製薬
グロンサン製造発売元
東京都日本橋本町 中外製薬株式会社